

ドイツ啓蒙主義歴史学研究」（Ⅱ－2、完）

—A. L. vonシュレーツァーにおける「普遍史」から 「世界史」への転換—

岡崎勝世*

<目次>

はじめに 一学説整理—

第1章、生涯と活動

第2章、『普遍史の観念』（1771/72年の

初版、および1775年の増補改訂版）

第1節、『普遍史の観念』（初版、
1771/72）—「習作」としての
18世紀的普遍史—

第2節、『普遍史の観念』（1775）
—片足を啓蒙主義的世界史
に踏み出した普遍史—

第3章、『世界史』（1785、1792）—
「普遍史」から「世界史」へ—

おわりに

はじめに一学説整理—

これまでに筆者は、本誌に「ドイツ啓蒙主義歴史学研究」と題する一連の論文を掲載し、18世紀後半のドイツにおける世界史記述の変革の問題をテーマに、ヨハン・クリストフ・ガッターラー（Johann Christoph Gatterer, 1727-1799）とイザーク・イーゼリーン（Isaak Iselin, 1728-1782）に関する論考を重ねてきた。2000年に出版した『キリスト教的世界史から科学的世界史へ』（勁草書房）は、これらの諸論考を柱とし、18世紀以前の西欧における「世界史」記述の歴史、カ

ントの歴史哲学に関する論考などを加えて編んだものである⁽¹⁾。筆者のテーマに関して最も重要な役割を果たしたのは「ゲッティンゲン学派」の二名の歴史学者、ガッターラーとシュレーツァー（August Ludwig von Schlözer, 1735-1809）とであるが、シュレーツァーについては、これまで概説的記述でその業績の輪郭をスケッチすることしかできなかった⁽²⁾。そこで今回はシュレーツァーの史学史上の役割について、彼の世界史記述の変化、及びその歴史的意義をめぐる問題を中心に検討を行い、本誌におけるこのシリーズの締めくくりとしたい。

歴史学者としてのシュレーツァーに関して、日本ではそれほど多く知られているとは言えないであろう。というより、そもそもドイツにおいてすら、重要な歴史学者としてガッターラーやシュレーツァーについて議論されるようになったのは、つい最近のことである。

ドイツ啓蒙主義歴史学が顧みられなかった原因は、ランケ（1795-1886）の時代から1960年代までの長期にわたり、「歴史主義」がドイツを支配してきたことに求められる。というのは、19世紀前半、ランケ学派がドイツを支配する以前では、ドイツの啓蒙主義歴史学者たちは史学史書で極めて高い評価を与えられていたからである。もっとも、「史学史」自体の生みの親となったのは、ドイツ啓蒙主義歴史学であった。史学史は、歴史学における関心や達成された成果には時代毎に大きな質的变化があることが認識

*おかげさき・かつよ
埼玉大学名誉教授

されて初めて発生する。歴史記述の任務が聖書研究や聖書の不変の真理に奉仕する（メランヒトンの「範例としての歴史」）⁽³⁾ものと考えられていた時代には、文献目録的なものがあれば、それで事足りていた。これに対し、今日的意味での「歴史の歴史」を提起したのは、ほかならぬガッテラーだったのである⁽⁴⁾。そしてこの提起に応え、「史学史の名に値する最初の包括的著作」⁽⁵⁾とされる『ヨーロッパにおける文芸復興以後の歴史研究と歴史記述の歴史』（1818）⁽⁶⁾を著したのがヴァッハラー（1767-1838）であった。彼は学生としてガッテラーの講筵に列し、「ゲッティンゲン学派」の最後の代表者ヘーレン（Arnold Herrmann Ludwig Heeren, 1760-1842）に鼓舞されながら、本書の執筆にいそしんだ。本書は、こうした成立事情から見ても、またその内実からも、まさに「ゲッティンゲン学派」が生み出した、史上最初の史学史書であった。そこで彼は、18世紀半ばから19世紀初頭に至るドイツ歴史学がヨーロッパで最高の地位を占めていたとし、なかでも「ドイツ人歴史家による教科書は、いずれもその徹底性、完全性及び方法において明らかに優越しており、他の国では、世界史、とりわけ古代史において比肩し得るものがほとんどみられない。…人間および文芸の歴史においては、全体的にも個々の分野でも、全ての国はドイツ人から学ばなければならない」（433）と主張している。そして、本書の性格からして当然とも言えるが、卓越したドイツの歴史家の筆頭にまずガッテラーを置き、次いでシュレーツァーを挙げているのである。二人は、ドイツを超えて、当時のヨーロッパでも優れた歴史学者と評価されているのである。

この啓蒙主義歴史学の批判者として登場してきたのが、歴史主義史学であった。そこでは啓蒙主義思想は「非歴史的」思考を特徴とするとされ、歴史学の発展をむしろ阻害した思想と位

置づけられてきた。他方でドイツ歴史学の発展については、時代的思潮であったナショナリズムとも結びついて、ドイツ古典主義やロマン派を通じ、ランケによる歴史主義確立への道が独自に準備されたと説明されてきた。こうしたステレオタイプ的見解が支配していたなかでは、ドイツ啓蒙主義歴史学者として今日一般的に認められる歴史学者たちもまた、評価に値する存在としては認められてこなかったのである。

ドイツ啓蒙主義歴史学に対するかかる全否定的評価は、ランケ自身にその出発点を持っている。彼の処女作、『1494年から1514年に至るローマ系及びゲルマン系諸民族の歴史』（1824）序文の言葉、「単にそれが本来いかにあったかは、以後歴史主義の客観主義的・科学的歴史学としての基本的立場を表現したスローガンとなるが、この言葉自体は、啓蒙主義歴史学者ミュラー（Johannes von Müller, 1752-1809）の、歴史家を「過去の裁判官であり未来の世界への教師である」とした規定へのアンチ・テーゼとして掲げたものであった。このように歴史主義がその初発からドイツ啓蒙主義歴史学に対する否定を内包していた以上、歴史主義が支配した時代にドイツで書かれた史学史の記述でも同様の評価が受け継がれてきたのは、当然と言える。

ヴァッハラーの時代の後、ドイツで史学史記述が再開されるのは、1860年代に入ってからである。そこでヴェーゼンドンクが『ガッテラーとシュレーツァーによる近代ドイツ歴史学の創造』（1876）で行ったタイトル通りの主張は、このような空気のなかでは、受け容れられることはなかった。ヴェーゼンドンクは、この時点で既に、「歴史家としてのガッテラーとシュレーツァーは殆ど完全に忘れられている」⁽⁷⁾と述べている。1936年になってもなお、フューターは「歴史家シュレーツァーについてはヴェーゼンドンクの本があるのみである」（373）⁽¹²⁾と指摘して

いる。さらに、ブランケによれば、「啓蒙主義歴史家たちを不当な忘却から是非とも救出しようとの要望が繰り返し見られる」ようになるには、実に、「1970年代半ば」⁽⁸⁾をまたねばならなかったのである。一方19世紀における歴史主義的史学史書を代表するのはヴェーゲレ(1823-97)による『人文主義登場後の歴史記述史』(1885)であるが⁽⁹⁾、ここで最も特徴的なことは、「ドイツ啓蒙主義歴史学」の存在そのものが認められていないということである。ヴェーゲレはフリードリヒ大王から解放戦争までの期間を「古典的国民文学の時代」と呼び、「啓蒙主義」という言葉すら使用しないのである。そしてこのようなタイトルで呼ぶ理由は、「かの世紀には歴史意識が甚だしく欠如していた」(749)からだと言っている。もちろん史学史であるから、ガッテラーやシュレーツァーなどについて、個別的に記述されている。但し、ガッテラーについては、「歴史記述者としては多分一時期過大評価されていたが、歴史補助科学の分野では、彼は長い期間影響を与え続けるだけの貢献を行った」(757)としか評価しない。他方、シュレーツァーに関しては、史料批判の推進や普遍史の共時的=民族的編成の提案、「キリスト前」使用の拡大等を評価して、「彼に真に歴史家であるとの証明書を出すことができる」(793)と述べている。しかしヴァッハラーがヨーロッパで最高とまで評価した両者の世界史記述に対しては、ガッテラーは「膨大な普遍史の素材を整理し、その素材に明確な、長期間影響力を保った組織化を与えた」(789)と一定の評価を与えているが、シュレーツァーについては、「内容についてはガッテラーの著作に後れを取っている」(790)と、ほとんど価値を認めていない。

ヴェーゲレ以後も、「啓蒙主義の時代」の歴史家やその研究について記述されることはあっても、そこで使用される「啓蒙主義」という語は、

一定の年代を表示するための言葉でしかなかった。「ドイツ啓蒙主義歴史学」自体は、その存在を認められることは絶えてなかったのである。例えば、日本でも教科書的に読まれてきたベルンハイムの歴史主義に基づく歴史入門書、『歴史とはなんぞや』⁽¹⁰⁾でも、自らの歴史学を科学的歴史学とする見地に立ち、これに対し17・18世紀のドイツは「実用的歴史」(25)が盛んだった時代とされている⁽¹¹⁾。他方、フランス革命期の「歴史哲学」(41)については科学的歴史形成への一つの出発点として評価し、「主として大衆とその總體的文化業績に注意し、機械論的自然法の類の諸法則によって歴史を説明すべく、以て初めて此を真の科学に高むべきだと考えている」(同)と述べている。すなわち、科学的歴史成立の「前史」においてフランスの「歴史哲学」のみには一定の評価が与えられているものの、ドイツの歴史記述に対しては、科学的歴史以前の旧段階に属する、「実用的歴史」にすぎなかったとされているのである。このような流れのなかで、フューターは、「啓蒙主義歴史記述(Aufklärungshistoriographie)」という、単なる時代名としてではない啓蒙主義歴史学を固有の存在とする学術用語をドイツで初めて使用した史学史家であった⁽¹²⁾。しかしその彼も、啓蒙主義歴史記述の一般的特徴の第一に「非歴史的判断」(339)を挙げている。しかも彼は、今日盛んに論じられている「ゲッティンゲン学派」についてその存在すら否定し⁽¹³⁾、また、ガッテラーに対して「なお完全に博学者の学派に所属している」(375)として、彼を啓蒙主義歴史家と評価することも拒否している。ガッテラーの世界史叙述については「歴史記述の歴史においては、それらは無価値である」(375)と断じ、評価できるのはせいぜい「素材が若干拡大されていることのみ」(同)だと述べている。他方で彼は「ヴォルテールの普遍史のおよび歴史的・政

治的諸原理は、ドイツにおいてはシュレーツァーによって最も完全に継承された」(373)とし、シュレーツァーの世界史叙述をヴォルテールを継承したものと位置づけている。こうした伝統的な歴史主義的見解を総合し、体系化したのがマイネッケであった⁽¹⁴⁾。彼は歴史主義の成立を準備したのはドイツ独自の精神的潮流、「ドイツ運動」だとし、その担い手としてメーザー、ヘルダー、ゲーテやロマン主義を高く評価する一方で、ドイツ啓蒙主義者ではかろうじてレッシングを挙げるのみである。そしてこの記述では、イッガースが適切に批判しているように、「ゲッティンゲンの歴史家たち、ガッテラー、シュレーツァー、シュピットラー、ヘーレンを意識的かつ故意に無視」⁽¹⁵⁾している。

マイネッケ的な評価は、第二次大戦後のドイツにおける史学史記述においても、なお継続する。例えばズルビックは、『ドイツ人文主義から現在に至る精神と歴史』⁽¹⁶⁾において、第四章のタイトルを「啓蒙主義時代の高揚と終焉」としている。そこでは、しかし、啓蒙主義自体については、「全体として合理主義の世界観は非歴史的であった」(108f.)と述べているのである。ガッテラーの世界史記述については、「普遍史の理念を追求するも不十分な試論のみしか行えず失敗した」(123)としている。他方シュレーツァーについては、「典型的ドイツ人啓蒙主義者」(124)とし、その世界史に対しては、従来よりは、やや高い評価を与えている。「全ての時代の諸民族や民族グループに関する地平を拡大した」(同)こと、世界史への古代・中世・近代の三区分の導入、「世界史と国家史、自然環境、全ての分野での人間の創造物とを統一しようと努めた」(125)こと、さらに世界史観察の基礎に“集積からシステムへ”という観点を置いていることなどを評価しているからである。しかし、彼が「ゲッティンゲンの歴史家集団」(126)の

なかで最も高く評価するのは、ヘーレンであった。それは、ヘーレンが、近世ヨーロッパの国際関係を表現する、「諸国家体系 (Staatensystem)」⁽¹⁷⁾の概念を提出し、その記述によって、一九世紀の「ドイツ民族に大きな影響を与えた歴史家たちの最初の一人となった」(127)からである。「ドイツ民族」への影響という視点は、ナチズムに深く関わったズルビックらしいとも言えよう。結局彼は、ガッテラーとシュレーツァーの独自の貢献は高く評価せず、ヘーレンほどには大きな役割を果たしていないとしているのである。このように、啓蒙主義とドイツ啓蒙主義歴史学に対する否定ないし無視は、ディルタイ⁽¹⁸⁾などの思想史の側からの少数の発言を除いて、歴史主義がドイツで支配的であった時代、すなわち1960年代までの史学史記述においては、まったく揺らぐことはなかったと言えよう。

しかしこのことは、逆に言えば、歴史主義史学自体が批判の対象となるときには、啓蒙主義やドイツ啓蒙主義歴史学についても、改めてその意義が問い返されるということの意味する。この問い直しの動きは、まず、ドイツ以外で始まった。すなわち第二次大戦後、ナチス・ドイツから亡命したカッシーラー⁽¹⁹⁾やピーター・ゲイ⁽²⁰⁾らによって先鞭がつけられたのである。両者はともに啓蒙主義は「非歴史的」どころか歴史学の科学への変革を追求し、歴史学の発展において極めて大きな役割を果たしたとして積極的に評価した。もっとも、両者にとっては啓蒙主義一般の再評価がテーマであったためであろうが、ロックやヒューム、ヴォルテールやモンテスキューなど、イギリスとフランスの啓蒙主義者が議論の主要素材となっており、ドイツ啓蒙主義歴史学には直接触れてられていない。しかしドイツ啓蒙主義歴史学については、バターフィールドが「ゲッティンゲン学派」に関する今

日の議論の内容のほとんどを先取りしたとも言える再評価論を展開した⁽²¹⁾。ゲッティンゲン大学を「歴史研究における科学革命に至る道を準備した」(42) 大学と位置づけ、またガッテラーの「普遍史」の取り組みや歴史学の科学化に向けての理論的諸活動などを紹介し、全体として、彼を「ランケにおいて頂点に達する発展のコースを出発させた」(44) と評価した。さらにシュレーツァーをガッテラーの議論の「全てをはるかに超えて広範に展開した」(49) 歴史学者とし、その『ネストール』(1802-9) における史料批判の展開を高く評価して、「史学史上、注目すべき文書」(56) と呼んでいる。このバターフィールドに発するドイツ啓蒙主義歴史学再評価の流れは、1970年代に入ると、自身が両親に連れられて6歳の時にアメリカに渡った亡命者でもあるイッガース⁽²²⁾ や、またライル⁽²³⁾ らによって研究が一層詳細に展開されて、ますます強力なものとなった。

他方ドイツでは、1960年代に入ると、いわゆる「68年運動」を頂点とする「異議申し立て」の諸運動が起こり、1969年には社会民主党が政権を握るなど、終戦時から続いてきた歴史的状況が大きく変化した。歴史学の世界では既に1959年に「フィッシャー論争」が始まっていたが、この60年代、とりわけ70年以後になると、ドイツ社会全体の動きと連動する形で、歴史主義、あるいは19世紀以来の伝統的なドイツ歴史学に対する批判の動きが起こった。ナチズムの形成に対抗し得なかった歴史主義史学の欠陥と責任が追求されるとともに、歴史主義が国民国家の理念を至高のものとしていたことや、その観点から個人やエリート集団の政治的行動を重視して歴史学の持つ可能性を狭めたことを批判し、これに代わるものとして、民衆の生活や制度、社会構造、経済基盤等を重視する、新たな歴史学の樹立が模索された。この70年代に登場

してきたのが、ヴェーラーとコッカを代表とし「歴史的社会科学」⁽²⁵⁾を主張する、いわゆる「ビーレフェルト学派」の人々であった。ヴェーラーはまた『ドイツの歴史家』の最初のシリーズの編集・刊行を1870年に開始しているが、そこでは「専門家仲間に限定しないで、…すぐれたアウトサイダーも加えたいと思っている」⁽²⁶⁾と述べており、実際、マルクスやエンゲルスなども取り上げている。当時はクーンの『科学革命の構造』(1962)が議論に大きな影響を与えていたが、このシリーズは、旧パラダイムである歴史主義の批判だけでなく、パラダイムの転換に先立って発生するとされる「変則事例」を史学史的に確認する作業でもあった。そしてこうした動きのなかで、18世紀半ばがむしろドイツ精神界が変容する一大画期と認められるようになるとともに、かつて歴史主義が全面的に否定していた啓蒙主義歴史学の再評価が行われるようになったのである。例えばコゼレックが、その「歴史」概念の史的 연구において、「Historie を忌避して Geschichte を選ぶ動きが1750年以後統計的に測定できる急速さで生じた」と述べ、そのなかで「Universalshistorie 普遍史が世界史に転換した」と指摘している⁽²⁷⁾。また彼は、『歴史的基本概念』第1巻序文で、この辞典の諸前提の一つについて、それはドイツの言語世界で大きな意味変容がもたらされた変革期が18世紀中葉であったという「推測」だと述べている。彼はこの時期を特に「はざま期 (Sattelzeit)」と呼び、以後は「古い言葉が新たな意味内容を獲得して現在の我々の意味に近づき、いかなる翻訳ももはや必要なくなった」⁽²⁸⁾と説明している。すなわち、現代ドイツの言語・精神世界に出発点を与えたのは啓蒙主義であると評価しているのである。そして1970年代半ばには、ドイツ啓蒙主義歴史学を「歴史的社会科学」の先駆者として評価しようとする議論が始まった。ヴェーラーが1980

年から再開した『ドイツの歴史家』の第二シリーズでは、そうした議論を踏まえ、17.18世紀の歴史家の再発掘が行われた。その結果、ガッテラー、シュレーツァー、シュピットラー、ヘーレンなどの「ゲッティンゲン学派」が記述対象に選ばれている⁽²⁹⁾。

「ビーレフェルト学派」が展開した歴史研究は、そこで問題とされ批判されたのは主としてドイツ近・現代の政治であったとして「政治の社会史」ともいわれる。これに対し、1980年代になると、そこで批判の対象となっていなかった「近代」そのものの根底的批判をめざし、「日常生活史」、「下からの社会史」を追求する「新しいゲッティンゲン学派」⁽³⁰⁾が形成されるなど、「社会史」の潮流がさらに拡大・深化した。ドイツ啓蒙主義歴史学再評価の動きにおいて一つの画期となったのは、この「新しいゲッティンゲン学派」の拠点となっていたゲッティンゲンのマックス・プランク研究所で行われた研究集会と、その議論をもとに出版された『啓蒙主義と歴史』(1986)であった⁽³¹⁾。この研究集会についてまず目につくのは、ドイツの新潮流に属する様々な研究者とアメリカのイッガースやライルらが一堂に会していることである。上述のドイツの動きとアメリカの動きが、ここで合流しているのである。とはいえ本書「序論」でも認めているように、19篇の報告内容はきわめて「断片的」(12)である。報告テーマのレベルが18世紀の一般的概観に近いものから特殊な観点から見た人物論まであって、しかも、テーマ設定が体系立てられていない。また、ドイツ啓蒙主義歴史学ではゲッティンゲン学派について論究することは不可欠のはずだが、これについてはたった一人、シュレーツァーしか取り上げられていないのである。これは、当時の研究状況を反映していると言えるであろう。しかし、最後にこれを「画期的」というのは、そこで確認

されたことが、「近代的歴史的思考が18世紀半ばにおいて既に啓蒙主義運動の要素として登場しており、従って、19世紀における“歴史主義”が一つの歴史的評価を必要とするようになった」(10)という認識だったということである。本書の意義はこうした共通認識を確認し、それに基づいて啓蒙期ドイツ、及びドイツ啓蒙主義歴史学の研究を促すことになったということ、ひるがえって、“歴史主義”の歴史的再評価を促すことになった、ということにある。本書が出版されたと同年に、ドイツ18世紀学会との連携のもと、雑誌『啓蒙主義 (*Aufklärung*)』⁽³²⁾が発刊され現在に至っているが、このことに象徴されるように、以後ドイツでは18世紀ドイツ、啓蒙主義研究、ドイツ啓蒙主義歴史学の研究が急速に広がった。

この動きのなかでドイツの史学史に最も関心を払ってきたのは、ビーレフェルトと並んで新潮流のもう一つの中心大学であったボーフム大学の、リュージェンを中心とするグループであると言えよう。彼は既に1960年代末からいわゆる「ポストモダン」の歴史学の構築に取り組んできた歴史理論家であり、その過程で、科学的歴史学の出発点を形成したのは歴史主義ではなくて啓蒙主義歴史学であるとして、とりわけ、啓蒙主義歴史学の歴史理論 (*Historik*) に注目していた⁽³³⁾。このリュージェンの指導下で史学史研究を推進したのがブランケである。彼もすでに70年代以来のドイツ啓蒙主義歴史学をめぐる諸議論⁽³⁴⁾に参加し、ガッテラーに捧げた啓蒙主義歴史学関係の資料集の編集・出版に取り組んでいたが⁽³⁵⁾、そうした活動の総まとめとして1991年、ここまで何度か引用してきた彼の学位論文『歴史理論としての歴史記述史』⁽⁶⁾を上梓した。彼は本書で、ドイツ歴史学界ではパラダイムシフトが完了したとの認識を表明している。すなわち、1960年代以降の歴史主義史学批判に

よってドイツ歴史学におけるパラダイムの転換が始まり、さらに70年代の諸論争を経て、1983年に至り、新たな歴史学の「学問母型（専門図式 disciplinary matrix）」がリューゼンによって提出され、シフトが決定的となったと認識しているのである⁽³⁶⁾。この時代認識の上で本書が目指すのは、このリューゼンの「学問母型」に依拠し、「1750年から今日に至る歴史研究の歴史を三つの科学的パラダイム、すなわち“啓蒙主義歴史学（Aufklärungshistorie）”、“歴史主義”、および“歴史的社会科学”の連続として再構成する」(7)ことである。彼は歴史主義の時代を「1810年から1960年の期間」(668)としている。1810年という年号は「歴史主義の開花期」(192)を担ったニーブール（1776-1831）の『ローマ史』（11/12）を一指標としているが、彼が厳しく批判したゲッティンゲン学派の最後の代表者ヘーレンは1842年まで活動しているから、この40年代までは、同時に、啓蒙主義歴史学からの歴史主義の時代への移行期にも当たっているとすることができよう。

ブランケは、ドイツ啓蒙主義歴史学自体については、それが何よりも啓蒙主義に属するものとして、「市民の解放への努力の一部」(55)であり、「市民階級の解放への努力を表現する歴史的思考」(同)であるとする。その史学史上の位置に関しては、「人文主義的・修辭的歴史思考と歴史主義との間をつなぐ環であり、それはヤヌスの顔のように古い時代にも新たな時代にも顔を向けている。それは歴史が歴史的思考の前科学的形態から科学へと発展した、まさにその歴史叙述の時期に相当している」(同)と位置づけ、その代表者については、「ドイツで後期啓蒙主義において遂行されたこの科学化の推進を代表するのは、とりわけゲッティンゲン大学の歴史家ガッター、シュレーツァー、ヘーレンである」(同)と述べている⁽³⁷⁾。また、それが達成し

た具体的内容について7項目を挙げている。すなわち「(1) 極めて膨大化した人間の過去に関する経験的知識を摂取しようとする試み、…(2) 歴史的世界の開拓。…(3) 市民の解放への努力の分節、…(4) 専門科学的議論の公共性。(5) 歴史的思考の世俗化、(6) 進展した科学化の過程、及びそれと結合した歴史の専門化。…(7) 大学の歴史科学研究の指導的機関への上昇」(117)が挙げられている。この結果ドイツ啓蒙主義歴史学は、新たな潮流のなかで1世紀半にわたる「不当な忘却」から救出されて復権を果たし、史学史上「歴史的思考の独自の様式」(51)としてその地位を確立した。そしてそこでは、ドイツ啓蒙主義歴史学自身がパラダイムの一つであると同時に、リューゼン以来主張されてきたこと、すなわちそれが「歴史主義によって初めて開始される真の科学的歴史記述の前段階としてではなく、(原理的には完了することなく、今日なお行われている) 継続的な科学化の過程の、本質的な一段階」(55)であることが、繰り返し強調されている。

ブランケは系譜的にはリューゼンを師としているが、1954年生まれであり、1930年代に生まれたヴェーラーやリューゼン等、「社会史」の開拓者たちから見れば第三世代に位置している。またこの世代は、現在、ドイツにおける社会史研究の指導的地位に立つ年代にある。このようなことから、本書は、現在のドイツにおいても、標準的な位置を保持していると言ってよいと筆者は考えている。

他方、ブランケの時代認識に示されているような歴史学の大きな変容は、ドイツでのみ生じたわけではなかった。各国それぞれの議論の内容や移行の時期は異なるにしても、アメリカやフランス、イギリスなどでも、この時期に歴史学が大きく転換した。上でも見たように、ドイツにおける歴史学の変容には、これらの国々

の研究者が直接関与してもいた。ドイツにおける歴史学の転換も、このような全世界的な動きの一環だったのである。ブランケのドイツ啓蒙主義歴史学の新たな位置づけもまたこのような世界的な動きと連動したものであり、それだけに、その位置づけも世界的に共有されるものとなっている。例えば、イッガースらによる、中国、インドその他を含むグローバルな規模の史学史書、『近代歴史叙述の世界史』（2008）⁽³⁸⁾では、18世紀における全世界の歴史記述を俯瞰する第1章のなかで、その一要素として西欧の啓蒙主義歴史学が取り上げられている。そこで、年号、普遍史の革新や史料批判の進展等々の諸変革が指摘され、全体として、「容易に指摘できるのは、18世紀における近代性の諸側面である」(32)と評価されている。編集の中心者がイッガースである以上この評価は当然と言えるかもしれないにしても、啓蒙主義の「非歴史性」などもはや問題にもならず、逆に、その「近代性」のほうが共通認識となっている。またこのような規模の大きな概括的議論のなかで、ドイツ人では、従来も言及されてきたレッシングやヘルダーらと並んで、今や啓蒙主義歴史学を語る場合に不可欠の歴史家として、ガッテラーとシュレーツァーがしばしば引き合いに出されているのである。

日本では、ドイツでの歴史主義による否定的評価を反映して、長い間ガッテラーとシュレーツァーについての研究はなく、史学史の記述でも殆ど触れられることはなかった⁽³⁹⁾。しかし日本でもまた、ドイツ同様に1960年代から「戦後歴史学」への批判が起り、70年代の移行期を経て、80年代には「社会史」へと転換して現在に至っている。こうしたなかで、筆者もその一例として、ガッテラーとシュレーツァーに関する論考も現れ始めている⁽⁴⁰⁾。また史学史の記述も、上でも引用した早島瑛氏の論文によつ

て、書き換えが行われるに至った⁽³⁰⁾。ここでは18世紀後半から現代の社会史研究に至るドイツ史学史について簡潔だが当を得た記述がなされ、そのなかで、学問としての歴史学の出発点となったとして「ゲッティンゲン学派」の再評価と紹介も行われている。

筆者がこれまでの研究で得た結論は、ドイツ啓蒙主義歴史学の世界史記述は「世俗的・文化的的世界史」を提出した点で西欧史学史上で独自の位置を有し、また同時に、そこで「キリスト教的世界史（普遍史）から科学的世界史へ」の転換がおこなわれたということである。この結論は、ブランケの主張と基本的に一致する。こうしたことからすれば、筆者のこれまでの研究は、クーンのいわゆる「通常科学」における「パズル解き」に見えるかもしれない。

しかし、筆者がドイツ啓蒙主義歴史学の研究をはじめた契機は、上記の研究史の流れとは別のところにあった。筆者は、埼玉大学の教養部で、1970年代後半から西欧における世界史記述の歴史の講義に取り組み、特殊研究はドイツロマン派と彼らの歴史意識の研究から出発した。その過程で、ロマン派研究からは彼らが批判した啓蒙主義歴史学の実相を知る必要が生じ、また世界史記述史からは、当時日本では不明なことが多かった近世における世界史記述について調べる必要が出てきたからであった。そこで出会ったのが、とりわけ世界史記述の変革を自らの重要課題として取り組んだ「ゲッティンゲン学派」の二人の歴史家、ガッテラーとシュレーツァーだったのである⁽⁴¹⁾。そして二人の研究の営みを知るにつれて、それを古代以来の長い伝統を有するキリスト教的世界史（普遍史）から現在の我々の世界史につながる世界史像への転換点と考えるようになった。さらに、このささやかな発見から、ドイツ啓蒙主義歴史学を重

要な一つの転換点とする、筆者なりの史学史の方法と構想が固まったのであった。すなわち、各時代には特有な人間観、世界・宇宙観、時間の観念があり、古代から現代に至る各時代の世界史記述はこれらを世界観的基礎として構造化されるととらえ、この見地から、西欧における各時代の世界史記述と、その時代的变化とを追求するようになったのである。

筆者の研究の重点は、このような経緯から、この二人の歴史家がどのようにして普遍史から脱却するに至るのかという視点から、可能な限りに二人の歩みに即して「発展的」に理解することに置かれている。この点では、ドイツ啓蒙主義歴史学の全体像を追求したブランケとは重点が異なっている。ブランケは、先にも述べたように、リューズンの「学問母型」に基づいてドイツ啓蒙主義歴史学を「理念型」として再構成している。すなわち専門科学の領域では「理論」、「方法」、「形式」、生活実践の領域における「関心」、「機能」というその各要素毎に、歴史家だけでなく哲学者その他の多数の人々の議論を組み込んで記述している。ブランケがこのような方法を採用したことには、それなりの理由があった。もともと方法論として「理念型」の追求という方向があったことに加え、啓蒙主義歴史学には歴史主義におけるランケのような一人の歴史家でほぼおおよその全容を語ることができるような歴史家がないという事情があり、他方で、啓蒙主義歴史学が取り組んだテーマが極めて広範だったという事情があったのである⁽⁴²⁾。そこで、このような事情を踏まえながら全体像を構築するという目的を達成するため、リューズンの「学問母型」に即して歴史家のみでなく多様な、そして多数の著述家たちの言説を網羅しつつ、全体を「理念型」として再構成するという方法がとられているのである。しかしその結果、ガッテラーやシュレーツァーら個人の活動

が五つの要素別に、さらにはその要素内に配置された小テーマ別に切り取られ、それぞれが「理念型」の一部をなすものとして、様々な場所に散在する形で記述されことになる。二人に関してだけでなく同時に引用される多数の著述家にしても、そこで扱われる個々人の思想を系統的・発展的に理解したり、個人としての全体像を追求することのほうは、犠牲にされているのである。

以上、ドイツの史学史書を中心にドイツ啓蒙主義歴史学をめぐる議論、およびガッテラー、シュレーツァーの評価の変化を見てきた。ここでは、ガッテラーに関しては啓蒙主義歴史学者と認めないフューターのような異論はあるものの、シュレーツァーは「ドイツのヴォルテール」とも呼ばれ、ながらくレッシング、カント、メンデルスゾーン、ニコライ等と並んで、ドイツの代表的啓蒙主義者として一般的に認知されてきた⁽⁴³⁾。だが、とりわけ歴史主義が支配していた時代には、ヴェーゼンドクが夙に指摘しているように、歴史学者としてよりは「自由主義的思想家としてのみ」(vi)、代表的啓蒙主義者の地位が与えられてきたのである。これに対し彼の本分は歴史学であるとして高く評価されているのは、ヴァッハラーの時代と、今日とである。ただし、評価する側面には相違がある。ヴァッハラーが彼を高く評価するのは、世界史記述者シュレーツァーのほうであった⁽⁴⁴⁾。ブランケも、シュレーツァーを高く評価して彼の『普遍史の観念』(1772/3)のリプリント版を出版している⁽⁴⁵⁾。しかしブランケが目するのには「歴史理論家・教育家」(XI)としてのシュレーツァーであり、本書を復刻したのは、「啓蒙主義の歴史記述と歴史理論の領域では、シュレーツァーの『普遍史の観念』は傑出した地位を占めている」(XIV)と評価したからである。も

つとも、ここでも、ブランケについて上で述べたと同様な問題点が見られる。というのは、『普遍史の観念』は確かに重要な著作であるが、この処女作のみでシュレーツァーを代表させるには、かなりの説明が必要なはずである。しかし彼は、シュレーツァーの『世界史』について、その内容をたったの一文で「1785/89年に『世界史』のタイトルのもとに『観念』の改訂版が出版されたが、そこでは理論的記述がずっと短縮されている」(XIV)と述べ、註でも「理論的序論(1-130頁)と並んで、『普遍史の観念』にある“概要”に比してかなり詳細な、普遍史の個々の時代に関する概観を有している」(註1)と説明して済ませている。ここでは、『世界史』のほうが世界史の具体的叙述という点でより充実しているという事実しか拾い上げられていないのである⁽⁴⁶⁾。筆者は、世界史の叙述の変化に関するこの評価に同意するが、しかし、それだけで済ますわけにはいかないと考える。というのは、シュレーツァー自身が本書を「大改訂され、形式も完全に変えられた版」(序文)と呼び、実際に「理論的序論」そのものにおいも、これから見るように、本質的意味での様々な「大改訂」を行っているからである。また、18世紀後半における普遍史から世界史への転換を指摘したコゼレックは、その世界史の「システムとしての世界史」段階への移行を代表する者として、カントと並んでシュレーツァーを挙げている。そしてそこでは、『普遍史の観念』ではなく、『世界史』のほうが論拠として掲げられているのである⁽⁴⁷⁾。ブランケはシュレーツァーの歴史理論家としての側面を特に高く評価しているのであるから、『世界史』の「理論的序論」の部分をこそ、入念に検討しなければならなかったはずなのである。彼においてこのような遺漏が生じてしまったことについては、彼の問題関心のあり方とその方法が、その原因の一端として

関与しているのであろうと考えている。

また、ブランケがシュレーツァーの代表作として『普遍史の観念』を復刻したことは、意外な影響も与えているようである。というのは、近年、本書のみによってシュレーツァーを論ずることが見られるからである。例えばイッガース等による上記の『近代歴史叙述の世界史』では、シュレーツァーも、ガッテラーとともに「天地創造からモーセ時代に至る聖書年代学を敢えて問題にすることはなかった」(28)としている。この指摘は、ガッテラーと『普遍史の観念』におけるシュレーツァーに関しては正しい。しかし、筆者には、これはシュレーツァーの「発展」を無視し、彼の『世界史』における達成を見落としした議論であると思われる⁽⁴⁸⁾。

他方で筆者は、上述の「遺漏」にもかかわらず、ブランケの「啓蒙主義的歴史家の争う余地のない功績は、…とりわけ歴史的世界の科学的解明と科学としての歴史の基礎づけとにある」⁽⁴⁹⁾という評価自体は、基本的に正しいと考えている。また、歴史学が独立した科学としての地位を獲得するに当たり、ガッテラーと並んでシュレーツァーが大きな役割を果たしたことは、既にヴェーゼンドンクも強調していたところであった⁽⁵⁰⁾。しかもその際にヴェーゼンドンクは、両者の間では、シュレーツァーのほうが「ガッテラーよりも先に進んだ」(80)と評価していた。筆者も同様に、ドイツの啓蒙主義歴史学はシュレーツァーにおいて一つの頂点を迎えると考えている。

彼の歩みには、「科学革命」はじめ、歴史学以外のさまざまな分野での思想的転換が絡んでいた。なかでも、彼においては、ガッテラーの場合にはほとんど表面に出てこない、啓蒙主義歴史哲学との関係が重要な問題として意識されていた。本稿では、このような同時代の様々な要素と彼自身の転換との関係にも注意を払いつ

つ、シュレーツァーの世界史記述の「発展」に即して、ガッテラーよりは彼が「先に進んだ」諸点を検証していくことにしたい。

第1章、生涯と活動

生涯 シュレーツァーは、1735年、ヴェルテンベルク北東に位置する、ホーエンローエ侯国のガグシュタットで生まれた⁽¹⁾。この年、カントは11歳、ガッテラーは8歳、イーゼリーンは7歳であった。シュレーツァーの生家はルター派牧師の家柄で、父も当地の牧師をつとめていた。父が早くなくなったため、やはり牧師であった祖父に引き取られ、彼から初等教育、ラテン語初歩を学んだ。7歳から近隣の町立学校に学ぶが、極めて優れた成績をおさめたためにもっと勉学の機会を与えようということになり、10歳のとき、ヴェルトハイム町立学校に移っている。早くから語学に関する天賦の才能を示し、ここですでに、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語、フランス語を身につけた。旺盛な読書欲を満たすため、月の明かりでまで読書したという。このため近視がひどくなったものの、校長がもはや何も教えることはないと告白するほどになったという。

1751年、16歳でヴィッテンベルク大学に進んで神学を学び、1754年、ゲッティンゲン大学に移った。このゲッティンゲン大学が、「シュレーツァーの生涯における新時代」⁽²⁾を開いた。彼はここで生涯の師、ミハエリスに出会うのである。ミハエリスを通じて新教義派の聖書研究に触れ、歴史学への関心を喚起されたのである。この後彼は、学費の窮乏から、師の紹介で家庭教師の職を得てストックホルムに移った。スウェーデンでの生活は1759年まで続くが、この間に、スウェーデン語はもちろん、ゴート語、アイルランド語、ラップ語、ポーランド語を習得した。また、通信員としてスウェーデンの状況をドイツ

に報告する活動のなかで、商業や経済に対する知見を拡げた。こうして、「スウェーデンにおけるシュレーツァーの経験は、多分彼の生涯の最も大きな転換点となった」⁽³⁾。その後、1759年、再びゲッティンゲンに戻って5セメスターを勉学に費やした。この1759年はガッテラーがゲッティンゲン大学に招聘された年であるが、このときは、ガッテラーとの直接の接触はなかったようである。あらためてミハエリスのモーセの法に関する講義を受講したのをはじめ、アッヘンヴァルの政治学、歴史学の講義を聴講し、形而上学、法学、統計学、さらに当時その専門家になろうとも考えていた医学、薬学のほか、骨相学、物理学、化学、植物学、動物学を学んでいる。こうして彼は自然科学の諸分野を含む驚くべき広範な諸学問に取り組み、百科辞典的知識人に成長した。

1761年、シュレーツァーの生涯に新たな転回が訪れた。ロシアに招かれたのである。彼のロシア滞在は5年間に及び、エカテリーナ2世によってアカデミー教授に任命され、ロシア史の研究を託されている。彼は短期間にロシア語をマスターして、1766年には『ロシア史』を著している。本書は『北欧一般史』(1771)とともに、歴史学者としてのシュレーツァーの地位を確立するものとなった。ロシア滞在は、エカテリーナへの心酔を通じて、「啓蒙専制主義一般へのシュレーツァーの偶像化」⁽⁴⁾と、同時にまた「官僚専制主義への嫌悪」⁽⁵⁾とを彼に植え付けることになった。この2点は、彼の今後の啓蒙主義的政治評論家としての活動の基本的要素となっていく。なお1803年、彼はそのロシア史研究の功績により、アレクサンデル1世によって叙爵されている。

ゲッティンゲン大学歴史学教授 1769年、シュレーツァーはその遍歴時代を終えた。ゲッティンゲン大学に歴史学正教授として招聘されたの

である⁽⁶⁾。招聘された最大の理由は、彼のロシア史、北欧史の専門家としての能力が高く評価されたことにあるが、また、彼の講義がロシアやスウェーデンなど北欧からの留学生を引きつける、呼び水となることを期待されたからであった。シュレーツァーがその初期に行った講義には教育学も含まれているが、その中心は当然ながら歴史であり、スイス史、メックレンブルク史のほか、ヨーロッパで始めて行われたロシア史や北欧史等の外国史、さらに「普遍史」を講義している。普遍史はゲッティンゲン大学のカリキュラム上重視されていた授業科目であり⁽⁷⁾、そこではガッテラーの普遍史講義が既に有名で、10年来、多数の受講生を集めていた。彼はガッテラーへの対抗心を燃やしつつ、とりわけ普遍史に力を入れて取り組み、その努力の結果、彼の普遍史講義がたちまち100名を超える多数の聴講者を引きつけるようになった。この数字は、当時としては、まことに驚くべき値であった。彼の登場によってガッテラーの受講生が30名くらいに減少したと言われ、ガッテラーが後期にはむしろ歴史補助科学の再編成に研究の重点を移していくのは、シュレーツァーのこの人気も原因であったかもしれない。シュレーツァーは、1773年に歴史学、国政学(Statistik)、自然法学を講じていたアッヘンヴァルが死去した後、その講義も引き継ぎ、これらの新たな講義もまた、多くの受講生を引きつけた⁽⁸⁾。彼の聴講生には、後に歴史学者となるヨハネス・フォン・ミュラーやリュス、プロイセン改革の立役者シュタイン、ハノーバーの首相となったミュンスター等々もいたし、一般の学生の他に大学の同僚たち、さらにはバイエルン皇太子を含む、ドイツ内外の貴族や高級官僚の子弟たちも含まれていた。彼の歴史講義は、当時それだけ新鮮で、また広く受けいられる要素を有していたのである。

シュレーツァーは、ガッテラーとともに、以後ゲッティンゲン大学を歴史学のメッカに押し上げていく。歴史学者としてのシュレーツァーは、歴史学の地位の確立に努め、同時に伝統的普遍史を批判して新たな世界史を唱導し、この新たな科学としての歴史学と世界史の基本的性格、世界史の「体系(構成)」や「方法」について探求した。そしてこれを通じ、今日の我々の世界史にも様々な意味で出発点を与えている。この点は本書のテーマでもあり、後に詳しく検討する。さらに彼は、ほとんどのヨーロッパ諸語、聖書に關係する古代の小アジア諸語、アラビア語までを身につけていた。その驚異的な語学力を駆使して、ロシア史や北欧史のほか、北アフリカ史、トルコ史などの著作も残し、それまでヨーロッパの世界史記述に欠けていた諸民族を世界史の新たな要素としてつけ加え、ブランケが彼の「歴史的世界の科学的解明」を高く評価したように、「世界史」の名にふさわしい内容へと拡大した。なかでも彼は「ロシア史の父にして創造者」⁽⁹⁾と呼ばれ、とりわけネストールの研究は、その史料批判の質の高さで、今日、「啓蒙主義歴史学から歴史主義への過渡における、歴史的方法の形成への貴重な貢献」⁽¹⁰⁾と評価されている。

ドイツ啓蒙主義の代表者 シュレーツァーは、1782年、自らが編集者となって政治評論誌『国事報』⁽¹¹⁾の刊行を始め、これによって、大学を超えてドイツの政治に広範な影響を与え続けることになる。この雑誌は、最高4,400部という、当時としては驚異的な発行部数に達した。本誌で彼が展開した君主たちの専制主義への批判は、ドイツの大小の君主たちにも大きな影響を与えた。マリア・テレジアがある枢密院の決定を「いいえ、それではいけません。それに、シュレーツァーがなんと言うかわかりません」と言って拒否したとか、シュレーツァーの評論誌の愛読

者であったヨーゼフ二世が、製本屋に「何をおいてもシュレーツァーを、すぐにシュレーツァーを持ってくるように」⁽¹²⁾と命令したと伝えられているほどである。そしてこの側面での彼の活動によって、彼は「ドイツのヴォルテール」と呼ばれ、また代表的啓蒙主義者と評価されるようになるのである。ただし彼の政治思想は、ガッテラーの場合同様、「改革的保守」⁽¹³⁾とされる。彼は人間の自由を根本に据え、公的生活への人民の参加を要求したとはいえ、しかし、他方で彼は民衆の大部分の無能力を確信しており、彼の自然権思想に基づく人間の隷属状態に対する批判は、民衆には少年のうちに当局への畏敬と感謝の念を教え込むべしとの主張とも両立するものであった⁽¹⁴⁾。彼の改革の提案も、「国家に忠誠な啓蒙主義」⁽¹⁵⁾の枠内のものであり、それも、当時の身分制国家を承認したうえでのものだったのである。また、当時のドイツにおいては、彼は君主たちの専横に対する勇氣ある批判者であり、それ故に貴族をも含む広範な人々の支持を得ていたとはいえ、その言論活動もまた、ゲッティンゲン大学のみならず許された言論の自由という防壁に守られて、かろうじて成り立っていたものでもあった。この意味では、彼の活動は、イギリスと同君連合の関係にあったハノーバーという領邦国家が許容する範囲内で行われ、保護されていた活動とも言える⁽¹⁶⁾。さらにまた、啓蒙専制君主が統治している大国プロイセンとオーストリアに対しては、彼は批判の矛先を向けることはほとんどなかった。彼の啓蒙主義者としての政治的言論活動は、フランス革命以前という時代にあつて、啓蒙専制君主による「上からの道」によって社会の進歩を実現することを基本的方向としたものだったのである。彼の政治的影響力は、1800年を過ぎると急速に失われる。それは、フランス革命に伴う状況の変化によって、彼の政治思想がもはや

人々の支持を得られなくなったからであった。だが歴史家としての活動はなお展開されていく。バターフィールド以後その史料批判に対し高い評価を受けている『ネストール』(1802-9)は、ナポレオン時代に公刊されているのである。

強烈な個性 最後に、「同時代人が一致して認めていた彼の気むずかしい性格」⁽¹⁷⁾について触れておきたい。「学者たちは、彼を、一部では真の科学の巨匠に対するように尊敬はしたが、一部は、シュレーツァーの仮借ない批判的筆致を恐れた」⁽¹⁸⁾と言われている。有り体に言えば、「あまりにも強情」(ミハエリス)⁽¹⁷⁾であり、まことにやっかいなトラブルメーカーであった。自分は他人を自由に仮借なく批判するが、自己に対する批判は決して許さなかった。ゲッティンゲン大学に奉職してすぐに教育家のパセドウや、後に見るようにガッテラー、ヘルダーとも衝突している。ロシアでもそうだったし、彼は、行く先々で、激しい悶着や論争を引き起こしている。カルレによれば、「彼の知人はほとんど職業上のものであり、彼の友情はつかの間のものであった。…学生や彼の雑誌への寄稿者たちが遠くから彼を尊敬していたのに対し、彼の同僚たちはしばしば彼を嫌い、蔑みさえした。職業上の事柄での自己主張の押しつけや他人の心情への思いやりのなさは、シュレーツァーに同情的な人々の間にすら、時として不快感を引き起こした」⁽¹⁹⁾。彼がアラビア語を身につけたのは、師のミハエリスが組織者だったアラビアへの探検隊の一員になるためであった。だがミハエリスは、彼の熱望を知りつつも、その性格を考慮して一員に加えることを拒んでいる⁽²⁰⁾。また、彼は娘のドロテアを自ら教育し、ドイツ最初の女性博士にまで育てあげた。だがこれについても、彼が娘を教育したのはパセドウやペスタロッチらの新教育論を批判するために娘を利用したものであるとされ、娘や妻との間も、実は

「冷たいものだった」⁽²¹⁾とされている⁽²²⁾。まさに、酷評のオンパレードである。しかし、このようにまで言うカルレ自身が同時に認めているように、彼は、何よりも創造的学者であった。「まずロシアで、次いでゲッティンゲンで、最後に全ドイツ語圏で彼が賞賛されたのも、まさに創造的学者としてだったのである」(42)。

筆者には、しかし、創造性とならんで彼のこのような個性もまた、重要な役割を果たしたと思われる。普遍史から脱却したのは、彼だけではなかった。しかし彼は、普遍史を単に否定したのではない。ガッテラーと違い、それを声高に宣言し、その成果を掲げて、人々に挑戦していった。しかもその挑戦は、その聴講生の数にも見られるように多くの人々を引きつけ、また後にも見るように、歴史学においても一定の成功を収めた。普遍史は、古代キリスト教時代から1500年近い伝統を有していた。この重い伝統に逆らい、これを放擲するためには、さらにその動きを世に広めていくためには、創造性以外の要素もなお必要だったのではないであろうか。創造性にこうした強烈な個性が結びついた故にこそ、かかる「力わざ」が可能となったのであろうと、筆者には思われるのである。

第2章、『普遍史の観念』(1771/72年の初版、および1775年の増補改訂版)

シュレーツァーの世界史記述もまた、ガッテラーと同じ1785年、「普遍史から世界史へ」の転換を遂げる。とはいえ、二人の経歴の相違から、当然その転換の様相は異なっている。シュレーツァーは、前期には『普遍史の観念』と題する二著(1771/72の初版、および1775年の増補改訂版)、後期には、『世界史』と題する二著(1785年版、および1795年の増補改訂版)を残している。ガッテラーも、同じく前・後期におのおの二点の著作を出版したが、彼の場合、

各著作ごとに、劇的な変化が見られた。他方、シュレーツァーの場合は、むしろその歩みは着実な発展として理解することができる。そこで本章では、その「前期」について、すなわち彼の「普遍史」の名を冠する二著について、ガッテラーとの相違にも注意しながら、世界史記述の発展を跡づけていくことにしたい⁽¹⁾。

第1節、『普遍史の観念』(1771/72) — 「習作」としての18世紀的普遍史 —

シュレーツァーの活動について注意すべきは、まずは「歴史学教授」としての活動から始まるということ、それも、ガッテラー同様、とりわけ大学のカリキュラムで重視されていた「普遍史」の講義から、しかも伝統的普遍史の改革への取り組みから開始されるということである。ブランケらが高く評価する彼の「歴史理論(Historik)」も、この講義のなかで展開され、教科書として出版されていくのである。

このような活動の最初の成果として公刊されたのが、『普遍史の観念』(1771/72)であった。本書は「世界史の理念」⁽²⁾と、それに基づく世界史記述の概要である「主要諸民族の歴史」の、二巻から成っている。講義では最初に前者によって記述の基礎にある考え方、枠組みを説明し、その後以後者の内容を講義した。この順序をそのまま反映させているのである。

体系的な世界史の追求；「集積(集合体)」と「体系」 彼がまず掲げるのは、「体系的な世界史」という目標である。彼はこれを本書冒頭で定義して、次のように述べている。

我々は、我々が居住している大地と我々が属している人類の諸大変革(Revolutionen)を全体として見通したいと考えるが、それは、両者について今日の状態を根本から認識するためである。我々は東西のあれこれの系譜の

人間たちの歴史を望み、彼らの成立、発展、没落の連なりについて、その全過程を、地域ごとに、民族ごとに、時代ごとに、その原因から影響までを追跡したいと望んでいる。そしてこのような意図のもとで、**大きな世界史的諸事件を関連させて**考察したいと考えている。一言でいえば、我々は、**普遍史(Universal-historic)**を研究したいと考えるのである (1f)。

彼によれば、どの民族も歴史をもつが、例えば、ヨーロッパ諸民族の歴史を集積したものがヨーロッパ史となる。しかし、こうした地域史は、それを寄せ集めたところで、「特殊史の集合体 (Aggregat)」(14) としての世界史は成り立つとしても、普遍史ではない。普遍史は、「一つの体系」(14) を提示するものでなければならないからである。というのは、「普遍史はより広く拡張され、地域史をより高次の立場で抽象したものであって、それは全世界、全時代を包括し、全民族、全地域を包含しており、その対象は**大地と人類**である」(2) からである。

ここで言われている「高次の立場での抽象」とは、いかなるものであろうか。それは、彼によれば、人類と大地の諸大変革を素材としつつ、「世界史の意図」によって規定されている「プラン」にしたがって、それらを相互に関連づけ体系化することに他ならない⁽³⁾。そしてそのプランに基づいて世界史的諸事件が総合的・体系的記述を与えられ、しかもその「関連づけの全プランにおいて統一性が支配しているなら、普遍史は科学的様相を獲得し、叙事詩の地位に高まる」(45) ののである⁽⁴⁾。

この「集積」と「体系」に関する議論は、ザンデが明らかにしたところによれば⁽⁵⁾、「イギリス人の世界史」における近代ヨーロッパ史の記述に対するシュレーツァーの批判のなかで形成

された。彼は、1766年の匿名での批評以来、それが膨大に過ぎるだけでなく、国ごとに粗密がばらばらな記述を寄せ集めるという、極めて杜撰な編纂によるものであるとし、とりわけロシア史、北欧史は学問的水準を満たしていないと批判した。その結果の一つは、彼が提案し自身が編著者となって出版した、そして彼がゲッティンゲン大学に招聘される一契機ともなった、『**北欧一般史**』(1771)⁽⁶⁾であった。もう一つの結果は、彼の歴史理論上の新展開であった。ザンデによれば、彼はよりコンパクトで大学でも利用可能な記述を自ら目指し、「この目的のために彼が発展させたのが、有名なその『集積』と『体系』の区別なのである」(143)。

またこのシュレーツァーの議論は、ズルビックやコゼレックが18世紀後半における世界史記述の重要な発展として夙に指摘していた部分であり、近年「歴史理論家」として彼を高く評価する議論でも注目されている部分である。もっともコゼレックの記述では、シュレーツァーのほうがカントより遅れていたと受け取られかねないところがある。この問題に関しては、ブランケやザンデらの『**普遍史の観念**』に基づく議論のほうが正しいと思われる⁽⁷⁾。

通時的・民族的方法 だが、この「関連づけのプラン」とは、いかなるものなのだろうか。彼は「この関連づけの特別な作法が、**普遍史の方法**を形成する」(45)と述べており、具体的には二種の連関を、すなわち「**事実的連関**」と「**時間的連関**」とを挙げている。「**事実的連関**」とは、具体的には、同時代の世界を構成する諸民族相互の連関である。彼は、こうした共時的連関の基礎に「**民族**」を置き、これを「**民族的方法 (ethnographische Methode)**」(99)⁽⁸⁾とも表現している。そしてこの「**事実的連関**」を構成し、普遍史において重要な役割を果たした民族を、「**主要民族**」と呼ぶ。そのうちで世界全体あるいは

その大きな部分に影響を与えた民族を「征服民族」(ペルシア人、トルコ人、モンゴル人など)、政治的にはそのような働きはしなくても、文化的、経済的、その他の分野で重要な貢献を行った民族を「重要民族」(エジプト人、フェニキア人、ヘブライ人、ギリシア人など)とも呼んでいる。これら二つの役割をともに果たしたのが本来の意味での「主要民族」であるが、具体的に挙げるのは、アッシリア人、マケドニア人、ローマ人、フランク人、アラブ人、イギリス人、ロシア人などである。他方の「時間的連関」は、字義通り、各民族の個別的動きや総体としての世界について、その通時的な連関を意味する。これに関係して最も重要なことは、全体としての見通しを示すよう、適切に時代区分を行うことである。そして普遍史は、この「事實的連関」という横の糸と「時間的連関」という縦の糸によって織り上げられるのである。ヴェーゼンドクが1876年の時点で世界史記述における「今日なお唯一の支配的方法」としたこの「通時的・民族的方法」⁽⁹⁾と、それに基づく合理的な時代区分とを、今後彼は一貫して追及し、発展させていくことになる。

普遍史の時代区分 シュレーツァーが本書で示す時代区分は、次の通りである(88-94)。

- A. 前史 (Vorgeschichte)、天地創造からローマ建国まで、3200 年間。
 - I 天地創造から大洪水まで、1600 年間。
 - II 大洪水からローマ建国まで、1600 年間。
 - 1. 大洪水からモーセまで、800 年間。
 - 2. モーセからローマ建国まで、800 年間。
 - a. モーセからトロヤ破壊まで、400 年間。
 - b. トロヤ破壊からローマ建国まで、400 年間
- B. 普遍史 (Universalhistorie) または「本来の世界史」の時代、ローマ建国からアメリ

カ発見まで、2300 年間。

- I 古代史 (Alte Geschichite)、ローマ建国からその分裂まで、1200 年間。
 - 1. ローマからキュロスまで=200 年間。
 - 2. キュロスからアレクサンダーまで=200 年間。
 - 3. アレクサンダーからキリストまで=350 年間。
 - 4. キリストからテオドシウスまで=450 年間。
- II 近代史 (Neue Geschichite)、ローマ帝国分裂から東帝国の滅亡またはアメリカ発見まで、1100 年間。
 - 1. テオドシウスからマホメットまで=200 年間。
 - 2. マホメットからカール大帝まで=200 年間。
 - 3. カール大帝からチンギス汗まで=400 年間。
 - 4. チンギス汗からコロンブスまで=300 年間。
- C. 最近代史 (現代史 Neueste Geschichite)、16 世紀初頭より現在まで=300 年間弱。

最初に「前史」が置かれるのは、この時代については情報が極めて貧困かつ断片的で、まだ「事實的連関」が明確になっていないからである。彼がこの時代の記述で依拠している聖書では、「民族」が形成されるのは「バベルの塔」以後であり、それ以前には、民族自体がまだ存在していなかった。従って、「前史」について、「この3200年という長期間の全体は民族によって総合的に記述することはできず、ただ年代順に記述することができるだけである」(67)とされている。また「前史」の記述は基本的には「ヘブライ人の立法者にして最古の世界の年代記の記者」(64)モーセに拠るとして、聖書による記

述がおこなわれている。

次いで彼は「普遍史」または「本来の世界史」の時代を設定し、「普遍史はこの期間の範囲内に、すなわちキリスト前8世紀からキリスト後15世紀内に限定されなければならない」(69)と言う。その始点に関しては、「普遍史はローマ建国(キリスト前753年、大洪水後1574年)とともに始まる」(69)としているが、その理由は、二つの面から論じられている。

第1の理由を次のように述べている。

一般的に言って、歴史が始まるのは天地創造からではなくて叙述された世界、または事件の記述からである。同様に、時間の始まりからではなく、年号の開始、年代学の開始以後のことである(61)。

さらに付け加えて、オリンピック暦、ローマ建国紀元、ナボナッサル暦が開始されるのが、いずれもキリスト前8世紀だからであると述べている。「前史」と訳した“Vorgeschichte”は、「先史」とも訳せる言葉である。「前史」と訳したのは、その時代に「モーセからローマ建国まで」が含まれており、このモーセを、彼は「最古の年代記の記者」と呼んでいるからである。つまり、「叙述された世界、または事件の記述」=歴史時代がモーセから始まっているとしているからである。そして、他方でローマから世界史を開始していることから、ここでは、世界史の「前史」の意味で使用したと考えられるからである。

“Vorgeschichte”をどのように訳すかという問題とは別に、ここでは、少なくとも「歴史時代」と「先史時代」の区別が行われていることは、認めることができる。この問題は、今後の彼の議論に注意していきたい。

第2に挙げているのは、「事実的連関」の様相の変化である。すなわち、「ここでは、その後役

割を果たす多くの諸民族が前史という夜のとぼりから初めて姿を現し、また、他の既成の諸民族も新たな姿で登場して、その時代を築いていく」(69)からである。さらに、アジアなど「他の南方の諸民族の歴史も、例えば日本の内裏が当時に始点を持っていることが知られているように、この時代に明らかになってくるからである」(71)⁽¹⁰⁾。つまりこの時代から日本人、中国人などがアジアでも形成され、「事実連関」が世界規模で観察されることが、ローマ建国の時点その始点とする理由とされている。

彼はこうして普遍史が本来の任務として取り組むべき時代を限定し、これをさらに「古代」と「近代」に区分して、各時代にさらに細かい下位区分を与えているのである。また、「近代」については、「他の人々が中世と呼ぶ時代を、私は近代と呼ぶ」(83)とも述べており、「中世」という時代名称は意識しつつも、まだこの段階では、普遍史を構成する時代名としては採用していない。

他方で「近代」は15世紀までとされ、15世紀におけるヨーロッパとアジアの諸変化を列挙しつつ、「この極めて豊かな内容を有する時代で、私は普遍史を閉じる。そしてそれ以後の最近代史(現代史)を、すなわち続く3世紀間を、特殊史にゆだねる」(78)と述べている。ここで普遍史を閉じる理由は、「最近代」は、二つの理由から体系的叙述が不可能だからであると説明している。第1に、この時代は「事件の数が巨大なものとなり、無限の個別的事件に統一性と関連性をもたらし、…世界史の概念に照応する一つのシステムとして認識することが、まだあまりにも困難」(79)だからであり、第2に、この時代は「まだ終わっていない」(80)ゆえに、その膨大な経過的・断片的事実から時代全体を見通すことが不可能だからであるとしている。そして、この時代については総合的な記述ではな

く、四つの大陸ごとの「一般的な通覧」(79)で満足しなければならないと述べている。

普遍史を構成する諸民族 シュレーツァーは、具体的記述において最も有効な方法は「民族的方法」であり、「民族 (Volk)」を記述の単位とすべきだと主張している。彼が言う「民族」とは、使用言語を考慮しつつ設定される、「政治的理解」に基づく民族、すなわち、「一つの国家に統合されているか、または一つの最高支配権に従っている人々」(103)である。本書第2巻、「主要諸民族の歴史」では、こうした意味での民族のうち、「事実連関」において重要な意味を持った諸民族について個別的に記述されている。各民族の歴史についても詳細な時代区分が与えられ、各民族の発展と没落の概要が記述されている。

まず「前史」では「ノアの息子たちから新たな人類が成立する」(63)とし、やがて形成された主要民族として記述の対象となるのはアッシリア人(バビロニア人を含む)、エジプト人、フェニキア人、ヘブライ人である。ギリシア人、ローマ人などはまだ歴史の緒についたばかりであり、また「中国人の帝国も、まだ宣教師たちの頭の中に存在しているだけである」(68)とも述べている。続く「古代」における主要民族としては、「前史」以来のアッシリア人(バビロニア人、カルデア人、メディア人を含む)、エジプト人、フェニキア人(カルタゴ人、その子孫を含む)、ヘブライ人、「古代」に登場してくるペルシア人、ギリシア人、小アジア人、未知の古代の諸民族、ローマ人を挙げ、「近代」ではフランク人、教皇国家、ノルマン人、スラブ人、シリア人、アラブ人、モンゴル人、トルコ人、中国人を挙げている。古代と「近代」を構成する主要な民族として、それぞれ九の民族が設定されているわけである。

エジプト史記述と聖書の関係 これら全てを見

るわけにはいかないのが、ガッテラーとの比較の意味からも、エジプト史の記述を見ておくことにしたい。彼は最も古い民族として「アッシリア人」を挙げ、第2番目に古い民族としてエジプト人を取り上げている。冒頭で、「本国のファラオたちのもとでのエジプト人の歴史は、その伝説によれば、大洪水後2世紀の人メネスに始まり、カンピュセスによって王位と命を奪われたプサメニットで終わる。その間は約1652年間で、その期間は4期に分けることができるが、そのうち前の2期及び第3期の一部が前史に属する」(116)と述べ、以下のように時代区分を行っている。

- I、**寓話的諸王朝**の時代、メネスからメリスマで=800年間。
- II、**セソストリスのオベリスク時代**、セソストリスからケオプスまで=400年間。
- III、**不詳のピラミッド時代**、ケオプスからプサミティクまで=300年間。
- IV、**より明瞭なギリシア期**、プサミティクからプサメニットまで、前670年から524年まで=150年間。

彼はさらに「以後、麗しのエジプトはボールのように受け渡されて他民族の支配を受ける」(118)として、古代における「ペルシア人の支配」から「近代」における「オスマン・トルコの支配」まで、支配した王朝名とその期間のみを年表の形で列挙している。

各時代の記述はごく簡単なものだが、彼が「寓話的諸王朝の時代」から、具体的にはメネスから記述を始めていることに注目したい。すなわち、エジプト人の出自に関しては何も触れていないのである。彼はエジプト人のいう「神々の時代」や聖書にあるミツライムなどについては

一切触れず、ヘロドトスが述べるメネスから、その記述を開始しているのである。他方、ヘロドトスが330名の王について述べた時代については、「従って多くの小王国・王国に分裂していたが、そのうちの一つはアブラハムのころに大変栄えていた」(116)としており、メネス以後の時代になると、聖書も利用している。

彼はアッシリア人の項目では最古の時代をニムロデから開始しているから、ここでは民族的出自の説明を、聖書によって行っている⁽¹¹⁾。従って、彼は、一切出自を議論しないわけではないし、また聖書を利用しないわけでもない。とはいえ、ガッテラーの場合とは聖書との関係が異なっていることも、また、明らかである。ガッテラーの場合、その「前期」においては聖書の記述が絶対視され、そのうえで、聖書記述の「追隨的合理化」が目指されていた。エジプト人をはじめ全世界の民族の出自を聖書によって説明することはその最重要課題の一つであり、なかでも、エジプト人自身の伝える歴史と聖書の記述とを統合的に理解することが、究明の最も困難な課題として取り組まれていた。これに対しシュレーツァーには、民族の出自を聖書で説明しようという原則的態度は見られない。エジプト史記述に見られるシュレーツァーと聖書との距離は、ガッテラーの場合と明らかに相違しているのである。聖書の記述を利用するにしても、そこには一定の「選択」が介在しているからである。聖書の記述が、絶対化ではなく「相対化」されているのである。

こうした彼の聖書との距離の相違の原因は、彼とガッテラーとの世代的相違に求められるであろう。シュレーツァーに即して言えば、その学問的生涯の出発点がガッテラーのそれと相違しており、彼がミハエリスの弟子として出発したことに求められるであろう。あるいは、シュレーツァーが学んだのが啓蒙主義のドイツへの

窓口となっていたゲッティンゲン大学であったのに対し、ガッテラーはまだ「宗派的大学」の伝統を維持していたアルトドルフ大学から出発していることに、求められるであろう。

ジョン・ロック的人間観 こうしたガッテラーとの相違は、その人間観にも現れている。シュレーツァーは、人間を次のように規定しているからである。

本性からいえば人間は無であり、諸関係(結合、Conjunkturen)を通じて、彼はすべてのものに成ることができるのである。この**無規定性**は、人間の本性の第二の要素となっている。無数の能力が人間に宿っているが、何らかの**機会**が単なる可能性からその活性化を導き出すことがないならば、能力は永遠に眠り続けるのである。荒野にあって羊の間で育てば、彼は羊となって羊の草を食ベメエメエとなくであろうし、理性を成長させる環境にあれば、それまで獣に近かった状態を脱し、上昇するか下降するか**いずれか**であろう。高貴化してソクラテス、アントニウス、モンテスキューのようになるか、または下降し悪化して、ハンニバル、ネロ、ピサロのようになるであろう(6)。

この人間規定はいかなる思想史的基盤に拠っているのだろうか。シュレーツァーは、本書では参照した書籍などの註を付けておらず、直接的にはそれは不明である。だがまず、彼の考え方は、古代以来の伝統的な普遍史のそれとは異なっている。普遍史は、「本性から言えば無」どころか、「完全な人間」として創造されたアダムから出発し、神による人類教育に導かれて「神の国」へと前進し上昇していく過程を、聖書に拠って記述するものだったからである。他方で、ルソーに基づいて啓蒙主義的歴史哲学を記述し

たイーゼリーンのそれと異なっていることも、また、明らかである。この点については、シュレーツァーが、人間は「高貴化」もすれば「悪化」もする存在であると述べていることが重要である。というのは、彼は別の場所で「人間性には、…完成能力（Perfektibilität）とともに墮落能力（Deteriobilität）も存在する」⁽¹²⁾とも述べており、これは、明らかにルソーとイーゼリーンを意識しているからである。イーゼリーンは、ルソーの言う「改善能力」を人間の基本的衝動の一つ、「完成衝動」ととらえ、こうした人間論を基礎に進歩史観を打ち立て、「完成」へと絶えず前進する、一方向的な人類史を記述していたのであった。

シュレーツァーのこの人間規定については、啓蒙主義における社会契約論と関係づけ、「社会状態以前」の段階での人間の「無規定性」と考える理解や⁽¹³⁾や、科学革命における生命科学の発展と関係づけ、生命体を環境との諸関係に応じて様々な方向に展開する能力を持つ存在とする、ビュフォンなどの考え方を、シュレーツァーが受容したとの理解がある⁽¹⁴⁾。筆者自身は、この規定の基盤を探るにあたっては、彼が具体例としてあげた、「ヒツジ少年」に注目したい。これは、リンネが『自然の体系』でホモ・サピエンスを構成する諸亜種のうちの「野生人」のなかで記載している、「ヒベルニアのヒツジ少年」に他ならない。この「野生人」をリンネは「四つ足。口がきけず、毛深い」と定義しており、他にいわゆる「野生児ピーター」をはじめ5例を挙げているが、当時は、とりわけこれらの野獣に育てられたとされる子供たちが全て「口がきけない」ことが問題となり、人間の言語活動、認識の発展に関する問題がヨーロッパで広く関心を集めていたのである⁽¹⁵⁾。こうした状況を考慮すれば、シュレーツァーのこの人間規定は、「タブラ・ラサ」の言葉で人間の生得観念を否

定し、感覚を通じて形成された単純観念の連合によって複雑観念の形成へと進むとする、ジョン・ロックの経験論的認識論が核となっていると理解できよう。

新しい地球大の人間世界 このシュレーツァーの立場は、当然、ガッテラーとの歴史観の相違にもつながっていくことになる。だが、その点については後にあらためて立ち返ることとして、彼のもう一つの言葉の持つ意味を確認しておきたい。

人類は諸大変革を経てきた。人類は増大し、もはやかつてあった人類とは異なっているし、モスクワに住む人々はシチリアや日本、カナダに住む人々と異なっている。

だが、全人類は同一種の被造物である。セネガルの黒人も、アルタイのカルムイク人も、北アメリカのイロコイ人、ジャヴァのカクルラケ人ですらも、ドイツ人、フランス人、イギリス人と同一の祖先に由来している。そのことは、モーセが啓示によって、また、ビュフォンが自然科学によって、述べるところである（4f）。

ここでは、当時の世界に見られる、人類の多様性が強く意識されている。彼は5人種を挙げその根拠としてビュフォンを示しているが、リンネもまた同じ人間世界を眼前にしてその分類に取り組み、これをアメリカ人、ヨーロッパ人、アジア人、そしてアフリカ人の4亜種（人種）に区分していた（もともと、リンネは「カクルラッコ」を「穴居人」の一例としていたし、4人種のほかに野生人、奇形人という亜種も設定していたが）。シュレーツァーが見ているのも、リンネやビュフォンが見ていると同じ世界である。一方で高度な文明を築いている人々があり、他方では文明化することすらなかった民族や、

一度文明化を果たしながら、現在は非文明的生活に再び落ち込んでしまっている民族も存在する。しかも、本来「全人類は同一の被造物」であり、出発点は同一だった筈なのである。

現代とは違って、シュレーツァー（とガッテラー）が生きていた時代においては、この多様な人々が構成する世界は、かつて知られていなかった世界であった。「大航海時代」を通じてヨーロッパ人の眼前に展開されるようになったばかりの、新しい地球大の人間世界だったのである。シュレーツァーは、このような人間世界の多様性をもたらした変化をこれまでの普遍史が説明してこなかったと指摘して、「普遍史または世界史の大事件を関連させて行う観察は、こうした諸問題に解決を与えるであろう」（7f）と主張している。本書で提出する新たな彼の「普遍史」こそが、初めて、こうした多様性に満ちた現在の世界に至る歴史を説明するものになると、ここで「宣言」しているのである。

年号表記の改革を提唱 彼は本書で、年号表記に関して二つの提案を行っている。一つは年号をなるべく丸めた数字で表記することである。その実例は、上記の時代区分に記されている年号（年数）である。他は、キリスト紀元のみによる年号表記である。

私は、まれにしか千桁にならない小さな年号を選ぶ。私は大洪水以前の全期間を切り捨てるが、これによって1656年間が省かれる。同様に大洪水からローマ建国までの全期間もいくつか区切ることにするが、これによって、やはり1600年間がうくことになる。ついで私は、キリスト生誕からさかのぼって、ローマ、またはモーセまで数えることにする。そこで、私の年号で最も大きな数は753または1600ということになる。大きな数値を小さな数値に変更することは、記憶力にとって大

きな利益となる。だがもっと大きなことは、これによってヘブライ人とギリシア人の年号計算の相違の問題が避けられることであり、さらに、ほとんど全ての教科書が食い違い、その結果全く異なった年号を与えることになっている、あの、きわめて不正確な天地創造から数える年号計算も、大部分を廃棄することができるということである（52 f）。

キリスト紀元を「キリスト前」を含んで最初に体系的に使用したのは、「年代学論争」におけるペタヴィウス（『年代表』1633年）であった。だが、彼においてはあくまで創世紀元による年号表記が主であり、キリスト紀元のほうは、その補助であった。そして、こうした創世紀元を守った最後の歴史家が、他ならぬガッテラーであった。シュレーツァーは、これに対し、現在から遡って「ローマ、またはモーセまで」の時代の全ての年号をキリスト紀元のみで記し、創世紀元の「大部分を放棄」したのである。これは、年号表記に関する一大革新であった。

こうした「革新」を彼が提案できたのは、彼が年号にこれまでと異なった位置づけを与えているからである。というのは、シュレーツァーにとって、「年号は使用しなければならないが、ただ、それを意図としてではなく、単なる手段として見なければならない」（51）ものであった。彼にとっての普遍史の本来的目的は、あくまで世界史的諸事件を関連ある一つの体系（システム）として記述することであり、歴史家とは、「世界史の意図」を主体的に設定する存在、すなわち、諸事件が有する事実に連関と時代的連関を洞察し、それを、一定のプランに基づく体系として提示することを任務とする存在であった。従って、年号は意図そのものではなく、意図の実現と具体的記述に役立つという意味では不可欠だが、しかし、「単なる手段」に過ぎない

のである。そして、「この意図に年号なしで到達できるなら、年号を完全に放棄してもかまわないのである」(51)とまで言っている。

これに対し伝統的普遍史の場合、年号は「意図」そのものでもあった。「放棄してもかまわない」どころではなく、すくなくとも、「意図」と不可分のものであった。なぜなら普遍史における創世紀元による年号は、神の導きの諸段階を明示するという意味で、天地創造から終末に至る人類の歴史全体を導く神の「意図」そのものの具体的表現でもあったからである。人類史上の諸事件の年号をめぐって長期にわたる「年代学論争」が行われたのも、その事件と神の意図との関係の問題が根本にあったからである。またそれだからこそ、創世紀元があくまで本体とされ、キリスト紀元のほうは補助の位置しか与えられず、創世紀元と併用する形でしか使用されてこなかったのである。これに対し彼は、「本来の世界史」(ローマ建国からアメリカ発見まで)の時代に限定してではあるが、そこでは創世紀元のほうを破棄し、原則として「キリスト前」を含むキリスト紀元のみで年号を記している。適用する時代が限定されているとはいえ、神の意図の具現という意味を有していた創世紀元の年号を廃棄することは、伝統的な意味での年号の位置づけを否定したことになる。

だが他方、創世紀元の年号の「大部分を放棄」したとはいえ、「完全」に放棄したわけでもないこともまた、見逃してはならない点である。彼がキリスト紀元のみを採用を提案する一つの理由は、「記憶力にとって大きな利益となる」からであった。彼が使用する年号をなるべく丸めて記すことを提案するのも、また、記憶しやすいという功利的理由からであった。シュレーツァーは、バセドウ等とも論争しながら、自らも家庭教師として子供の実際の歴史教育に携わり、子供向けの歴史教科書も執筆している⁽¹⁶⁾。後

述するヘルダーへの反論のなかでも、年号に関して、「8歳の子供」(290)にとって創世紀元による大きな数値とキリスト紀元による小さな数値のどちらが記憶しやすいかは明らかであるなどと論じている。そして、彼の提案とヘルダーの反対論の優劣に関しては、「長年若い生徒を教えてきた教師が最もよい裁定者となるべきである」(290)と主張している。彼の提案では、こうした子供の歴史教育における功利的理由が、大きな比重を占めていたのである。また、上記引用で「放棄」の理由の最後、創世紀元による年号が基礎となる聖書によって異なるということについては、「放棄」することでこの相違の問題を「避けられること」に重点が置かれており、他の諸章を見ても、創世紀元そのものに関する根本的議論は、行われていない。しかも、「前史」の時代については創世紀元が現実に生きており、本書でのキリスト紀元は、創世紀元とまだ完全に手を切っていない。すなわち、彼の「放棄」は、その多くを功利的理由に負った部分的な放棄であり、「キリスト紀元」は、まだ完全には自立していないのである。本書における提案は、この意味で、まだ「小さな一歩」に過ぎない。

しかし他方、この「放棄」は、「ガッテラーよりは先に進んだ」一歩であった。さらに言うなら、今日の我々のキリスト紀元使用の出発点となった一歩であった。このような「大きな一歩」へと展開していく過程については、今後の検討で明らかにしていきたい。

歴史哲学と歴史学の差異化 シュレーツァーは歴史の始まりを天地創造ではなく「叙述された世界」と「年号」の開始以後であるとし、そして両者が出そろふことを一つの根拠として、「前史」と「本来の世界史」の時代を区別した。上でも見たようにまだやや曖昧さが残っているが、「叙述された世界、または事件の記述」が存在するか否かにより、今日の用語で言えば「歴史

時代」と「先史時代」との基本的区別を行ったのである。だが、なぜこうした区別を彼が必要と考えたのであろうか。これについては、彼が本書に「普遍史」の名称を与えた理由を述べている、次の一文がその事情を説明している。

普遍史という言葉について多分少々説明するべきであろうが、それは極めて明瞭、明白であってなんの韜晦もない。というのは、普通の古フランク的なタイトルを守り、それに代えて世界史や、まして人類史、人間悟性史等々といったタイトルを与えないことが、私の気持ちにかなっていないということなのである⁽¹⁷⁾。

この文章についてブランケは、「啓蒙主義時代においては、『普遍史』、『世界史』、『人類史』、『人間文化史』などの概念は、同義語として用いられたり、個々の著述家に応じた微妙な差異化が行われたりした」⁽¹⁸⁾と説明している。一般的にはそうであったとしても、しかし、シュレーツァーに即してそう言えるのであろうか。彼は、ここではともかくも、「世界史」というタイトルが気持ちにかなっていないと述べている。さらに、「世界史」に比べて「人類史、人間悟性史」などは、もっと気持ちにそぐわないと述べているのである。このことを無視して、簡単に「同義語」として見過ごしてよいものだろうか。だが、それでは、わざわざこの文章を挿入した意味がなくなるのではないか。本書でシュレーツァーが実際に「普遍史」と「世界史」を混用していることは、今までの引用からも、事実として認めることができるが、しかし、この文章は、「世界史」も含めた他のタイトルを選ばなかったことについて説明している文章なのである。「世界史」に関しては後に考えることにして、ここでは、「人類史、人間悟性史」を選ばなかつ

た理由を検討しておきたい。文意通りに受け取れば、彼が本書に「普遍史」というタイトルを与えるに当たって最も重視しているのは、明瞭に大きな違和感を表明している「人類史、人間悟性史」と、自らの「普遍史」との相違だからである。

それでは、ここで言われている「人類史、人間悟性史」は、実際には何を指しているのだろうか。結論から言えば、それは、具体的にはイーゼリーンの歴史哲学を、あるいは啓蒙主義的な歴史哲学に基づく「人類史、人間悟性史」を指していると考えられる。イーゼリーンの『人類史』は人類の「獣的状态」を「生まれて最初一、二年の子供の悟性の状態」とし、これを始点として、感性、想像力が支配する各時代を経て理性の時代へ、そして未来の「最大多数の最大幸福」実現までを見通す人類の進歩を記述していた。そこでは、まさに「人類史・人間悟性史」が語られていたのである。他方、普遍史も「人類史」を語っていたことは事実である。だが、聖書によれば、アダム一代の間に人類は農業、牧畜、諸技芸、都市建設まで行ったとされており、人類は初発から「文明」段階にあった。従って普遍史の描く「人類史」は、「人間悟性史」と一括できるような内実のものではなかったのである。すぐに見るように、彼は当時なお根本では聖書に依拠していた。従って、その彼が「普遍史」をタイトルに選択したのは、イーゼリーンや同傾向を持つ啓蒙主義的な哲学者たちの「人類史、人間悟性史」を念頭においてのことだったとして間違いないであろう。

他方で、シュレーツァーには、イーゼリーン等とも共通する議論が見られる。彼は、その新たな普遍史では「世界市民、人間一般にとって重要な事件」(31)が記述されべきこと、とりわけ「**発明史**」(31)に取り組むべきことを強調して「火の発明やパン、コンパスの発明は、アル

ベラの戦いやザマの戦い、メルゼブルクの戦いなどと同様に重要な要素なのである」(30)と言
い、こうした記述が完成すれば、「それは基本的
に一つの**人類史**、これまで主として哲学者が著
してきた新たな種類の歴史となる。それとい
うのも、それは歴史家の一つの領分なのである
から」(30)とも、あるいはそれは「総合的な**歴史
の百科事典**となる」(31)とも主張している。彼
はまた、ジョン・ロックの人間観と自然権、自
然状態論や社会契約論を継承して自らの政治学
を後に構築し、そうした立場から、当時の政治
に対する批判を行ってもいく。こうした点では、
彼は伝統的普遍史の記述者たちとは明確に異
なる立場に立っていた。しかも、同じくこの点で、
イーゼリーン（とカント）等の哲学者とは、完
全に同一とは言えないにしても、少なくとも同
一の陣営に属していた。さらに、この哲学者た
ちもまた「世界市民的見地」に立ち、『百科全書』
にも見られるように、そこでは「発明史」が重
視されていたからである。

筆者は、こうした事態が逆に、「歴史家の領分」
を明確にする必要性、学問としての歴史学の存
立基盤を早急に確立する必要性を、彼に強く意
識せしめたと考える。同一の立脚点に立つから
こそ、イーゼリーンあるいは歴史哲学とは異
なる、歴史学の対象や方法の独自性の考察へと向
かわざるを得なかったこと、そのことを、彼は
この文章で「気持ち」という言葉を使用して表
現しているのではないか。そして本書でこの「気
持ち」に対応する議論として展開されるのが、
上で見た、世界史をめぐる「集積」と「体系」な
どの理論的考察であると考え。

その理論的考察の場でシュレーツァーが強調
する「方法」について特に注意したいことは、
この「方法」の基礎に「批判」が置かれている
ことである。彼は、「批判は、年代記や碑文から諸
事実を個別的に取り出す（ヴォルテールは多く

を自分で創り出した、または少なくとも潤色を
行った）」(45)と述べている。彼が「ドイツの
ヴォルテール」と呼ばれていたことについては上
でも述べたが、これは、彼自身にとって喜ばし
いものかどうかは疑問である。というのも、こ
のように彼（およびガッテラー）は、歴史家と
してのヴォルテールを評価していなかったから
である。その理由は、ヴォルテールの歴史記述
には、「批判」または「批判」に基づく厳密な事
実の裏付けが希薄だと判断していたからである。
彼にとっては、歴史学においてまず行われるべ
きは、「批判」による過去の真実の確定であった。
そしてそれらに関連づけるのが歴史家の仕事で
あり、「この関連づけの特別な作法が普遍史の方
法を形成する」(45)。「歴史家は、重い真実とい
う鎖につながれている」⁽¹⁹⁾存在なのである。近
年のシュレーツァー再評価のなかで高く評価さ
れている彼の史料批判への取り組みは、このよ
うな彼の姿勢から生み出されたものであった。
これに対し、啓蒙主義的歴史哲学では、すで
にルソーから、「憶測」が大きな役割を演じていた。
ルソーは社会状態にある人間に対する批判に基
づいて、その自然人像を「憶測」した。イーゼ
リーンは、上でも述べたように、人間の感性、
想像力、理性を人類史における各発展段階の
人間に配置していくが、その配置の事実に根拠
については、子供（人間）の成長過程と、当時
知られはじめた人類学的事実しかなかった。そ
こで、とりわけ人類史の初期に関しては、人間
学的な「本性」を根拠とし、「哲学に導かれ」て、
「憶測」する以外になかったのである。まもなく
カントもまた、「世界市民的意図における一般
史ための理念」(1784)において、その人間学
（「非社会的社交性」）を根拠として人類初期の
歴史を「憶測」により展開し、「人為」が第二の
自然となる未来を見通した歴史哲学を確立する。

コゼレックは、「歴史（Geschichte）が我々と

同じ意味に変革され、それと関連して歴史哲学が成立したということは、言語史的には同一の事象である⁽²⁰⁾と述べている。一方で歴史が“Historie”から“Geschichte”に転換し、複数の歴史の「体系」へと向かう動きが、同時に、同じく“Historie”の否定と歴史的事件の一回性を前提としながら歴史の進歩を探ろうとする、歴史哲学を成立させたというのである。コゼレックはこうした歴史哲学が「1760年と1780年の間」(56)に形成されてくるとしてヴォルテール、イーゼリーン、ヘルダー、カントなどを挙げている。シュレーツァーの場合は、まだ明確に「普遍史(Historie)」を否定したわけではない。しかし、1770年代の時点で、彼は、「集積」としてではない、諸民族の歴史(複数の歴史)の「体系化」を模索し始めていたのである。

筆者は、いわばこの「同一の事象」の一方の当事者として、形成されつつある歴史哲学との対立意識のなかで、シュレーツァーの歴史学の独自性の認識が深化したと考える。すなわち彼の「歴史時代」の規定と「本来の世界史」の限定、そして文字史料の批判的研究を通じて確認される諸歴史の集積を基礎に「世界史の意図」に基づくプラン——具体的には「通時的・民族的方法」に基づく彼の体系的な世界史の構想——に従って記述を行うものという、歴史学の営みの独自性の主張や、また歴史記述についても、イーゼリーンの「悟性の歴史」における一方向的「進歩」でもなく、普遍史的な神の人類教育という別の意味での一方向的「進歩」でもなく、進歩と並んで没落も生ずる多様な現実世界の動きを記述するものとして、その内容を明確にする地点へと到達せしめたと考えられる。

さらにもう一点、「本来の世界史」を彼の言う「近代」(＝中世)で止めていることについても、その意味を考えておかなければならないであろう。彼は歴史学が「最近代(現代)」に取り組む

ことまでを排除しないが、「世界史」が真の任務とする時代から「最近代」をはずしているからである。筆者は、これについてもまた、伝統的普遍史及び歴史哲学との差異化の意識が働いていたと考える。すなわち、まず、伝統的普遍史では未来の「終末」という奇跡が大きな役割を演じ、それがまた「現在」の位置づけに関与していた。当時は、ピューリタン革命時に「千年王国論」が大きな役割を演じたことも、記憶に新しい時代であった。「千年王国論」は18世紀前半には衰微に向かうが、そうしたなかでも、後に述べるウィストンのように、「千年王国論」及びこれと結合した普遍史を真剣に語り、一定の影響力を保持していた人々も存在していた。シュレーツァーが「最近代」を「世界史」から排除したのは、このような普遍史的意味での「未来」と手を切るという意思表示だったとすることができよう。さらに、上では、新たな啓蒙主義的な歴史哲学でも、その未来像が「現在」を規定する重要な要素だったことを見てきた。彼の議論は、そうした歴史哲学的未来像の「世界史」支配を排除することで、歴史学と歴史哲学の相違をも明確にするための議論だった理解することも可能であろう。すなわち歴史学と「世界史」の本分は、彼の歴史学の定義にあるように、あくまで過去の事実を通じて人間と大地の「両者について今日の状態を根本から認識すること」、その認識を記述することであり、未来との関係で現在を規定したり、ましてや、未来を予言することにあるのではないのである。

歴史学が独立した一科学としての地位を確立するに当たって、ガッテラーの場合は、普遍史との格闘が主要な戦場となっていた。これに対しシュレーツァーは、普遍史とだけでなく、このように形成されつつあった歴史哲学とも対決しつつ、二正面作戦で闘っていたのである。そして、今日の我々も踏襲している「歴史時代」

という概念や、また歴史学と「世界史」が対象とする時代の限定は、ガッテラーが先鞭をつけたとはいえ、決定的には、このようなシュレーツァーの闘いのなかで生まれてきたのであった。そしてこの点でもまた、彼は一步「ガッテラーよりは先に進んだ」のである。

聖書的時間と普遍史的諸要素 ここまでは、『普遍史の観念』初版の新しい側面に焦点を当てて検討してきた。しかし他方、その具体的記述を見ると、実は、伝統的側面もまた、本書では本質的役割を演じている。

まず、「時間」に関しては、「世界が成立してから 6000 年になる。長い、考えられぬほどに長い期間である！」(59) と述べている。「世界が」と言っていることに注意したい。これは、本書の時点では、彼がヘブライ語聖書による天地創造以後の「時間」を信じていることを示しているからである。

また、「前史」の第 1 期は「天地創造から大洪水まで、1600 年間」となっており、次のように言われている。

この長い期間については以下の七つの命題が知られており、また有益である。

- 一、我々の大地は、改造 (umschaffen) された。
- 二、全人類は、一組の夫婦に由来する。
- 三、最初の間人は、エデンに住んでいた。
- 四、彼らは、墮落した。
- 五、当時人間は、非常に長命であった。
- 六、彼らは、諸技芸を發明した。
- 七、彼らは、大洪水によって絶滅した。

他の殆ど全ては寓話か仮説、未知蒙昧、あるいは馬鹿話である (88)。

最初の命題だけがやや理解しづらいが、大地の変化についての記述で、「大地は、もはや創造

者の手によって出現したものではない」(8) と言い、神によって創造された大地が人間の手によって変えられてきたことを述べており、このことを指していると考えられる。つまり神による天地創造を前提にした言葉である。従って七つの命題は、全て聖書に基づくものである。本書ではこれ以上の説明が一切なく詳しい内容は不明であるが、彼が創世記の記述を肯定し、創世記から導き出された諸「事実」によってこの時期を記述しようと考えていることは、確かと言える。このように、この段階でのシュレーツァーは、聖書的な「時間」のなかで考え、とりわけ世界史の始まりの時代の内容に関しては、普遍史的諸要素を保持していたのである。この意味で本書は、明らかに普遍史に属しているのである。

ヘルダーへの反批判 (=18 世紀的普遍史批判)
シュレーツァーは、1773 年、ヘルダーとの論争を展開している。この起こりは、前年に 28 歳の青年ヘルダーが行った本書への書評であった。新聞紙上に掲載された書評であり、これを採録している全集では 4 頁半という短いものである⁽²¹⁾。全体としてその労を多とはするものの、「劇場的・模倣的なもの」(436)、すなわち、大げさな芝居がかかった「宣言」(436) と、実際には過去の諸著作から抜粋 (=模倣) したものとの「ごった煮」(436) にすぎないと言う。その「世界史の理念」についても、「おおよそは全て既に試みられてきたもの」(438) であって、「宣言」だけの、まだ「吹けば飛ぶような紙上の提案」(439) にすぎないし、本書の内容の概要として提示している人名を連ねた「表」については「リンネのサル真似」(440) に見えると言いい⁽²²⁾、さらにその「自惚れ」(440) を指摘したりと、かなり辛辣な批評である。

これに対して当時 37 歳のシュレーツァーが猛然と反発し、版型は異なるとはいえ序文も加

えると 188 頁に達し、ヘルダーの一言一句殆ど全てを取り上げての反論を展開した⁽²³⁾。「無知と不公平さ、悪意に満ちた論評の典型」(397)とし、ヘルダーを、「曲解、虚偽、思いつき、空言を弄している」、「無思慮で悪意に満ちた失敗者」(227)と呼んで、シュレーツァーらしくというべきか、ヘルダー以上に激しい言葉を連ねて反批判を綴っている。その激烈さには辟易するくらいだが、このうち、ヘルダーの疑念や指摘に対し『普遍史の観念』の記述を詳しく説明している部分については、上でも利用してきた。ここでは、さらに2点、それ以外の点で注目しておきたい議論がある。

まず第1点は、シュレーツァーが、ヘルダーを「ボシュエの徒」(270f, 333)と呼んでいることである。議論のなかでは、当時の歴史的記述の状況について、「ツォーフ、エッシヒ、ボシュエがはびこっている時代」(257)と表現したり、また、「今日では、ボシュエとヒュープナーの時代よりは…遙かに優れた普遍史が可能となっている」(262)という表現があり、ボシュエは、彼が克服の対象としている人々の代表として挙げられている。筆者は、これらの人々の著述を、ガッテラー、シュレーツァーとの関係に注目して、「18世紀の普遍史」と呼んでいる。だが、なぜ彼は、ヘルダーを「ボシュエの徒」と呼ぶのであろうか。

ヘルダーは、シュレーツァーが一つの体系的プランの設定が可能であると主張するのに対し、「どこにその一つのもの、偉大な究極的支柱 (Endpfahl) が存在するのか、そこに直接通ずる道はどこにあるのか、“人類の進歩”とは何か、それは啓蒙なのか、改善なのか、完成なのか、あるいはより多くの幸福なのか、その尺度は何か、その尺度に対応する、極めて多様な時代と民族のデータはどこにあるのか」(438)と問うていた。これに対しシュレーツァーは、「究極的

支柱」などと持って回った言い方は必要なく、全人類の祖は誰かと問えば済むことと答え、人類がアダムとエヴァという一組の夫婦を祖としていることが、一つの体系的プランが成立する根拠であるとこたえている。さらに、ヘルダーが「進歩」しか問うていないのは、「劣悪化」も組み込んでいる彼のプランに対し故意に誤解を招こうとしたものと批判し、そして尺度やデータの提出を試みたものこそ自分の著書であると主張している。

この反論には、“ずれ”があるようにも見える。というのは、ヘルダーが「究極的支柱」と呼んだもの、“人類の進歩”という言葉に込めていたもの、それは神であり人類の歴史を導く神の計画・摂理だったはずだからである。ヘルダーは当時 リュッケンブルクで宗務顧問官の地位にあり、説教師も勤めていた。彼が『人類の歴史哲学考』⁽²⁴⁾を記述するのは後年(1784-91)であるが、「世界における神の偉大な計画」⁽²⁵⁾という信念は、ヘルダーの根本思想であった。ところが、このシュレーツァーの反論には、神については一切触れられていないのである。しかし、実は、神に触れないことこそが、この反論の伏せられた核にもなっていると考えられる。彼は神ではなくアダムとエヴァに「一つ」の世界史のプラン設定の根拠を求め、そして、「完成能力」とともに「墮落能力」をも有するという人間的本性の上で展開するのが歴史であると主張しているのである。すなわち、人類の祖アダムとエヴァの創造者としては神を承認するとしても、そしてこのことに「世界史」の成立根拠を置くにしても、現実の歴史自体は人間の本性に基づいて展開するとして、人類史への神の介入を否定しているのである。そして他方でこの自身の立場とは異なるヘルダーの真意を感知したからこそ、彼を「ボシュエの徒」と呼び、ヘルダーの論評を筆者の言う「18世紀の普遍史」の

立場からのものであるとして、激しく反発しているのである。

彼は『普遍史の観念』初版では「ツォーフ、クーラス、クローザッツらがこの偉大な名称を帯びさせてきたものを、今後もお普遍史と呼んでよいものだろうか」(38)と述べていた。ここで挙げられている三名は、ヘルダーへの反論で「ボシュエ」によって代表される、そして彼がその克服を目指していた「18世紀的普遍史家」に属する人々である。彼が本書のタイトルに「普遍史」を採用するにあたっては、こうして、一方で啓蒙主義的な歴史哲学との相違を表現することが第一にあっただけでなく、他方では、「18世紀的普遍史家」にかかわって自分こそが真の意味での「普遍史」を提出しようとしているとの自負を込めていたことになろう。ヘルダーへの反批判の文章は、このような「18世紀的普遍史」へのシュレーツァーの姿勢をより鮮明にしてくれていると言える。

第2は、「時間」に関する記述である。彼は、上でも引用したように、天地創造後現在までを6000年間としていた。しかし、ヘルダーへの反論には、これとは異なった議論が見られるのである。「私は、我々の大地または巨大な地球がアダムより正真正銘の24×6時間前にまず創造されたと、無から創造されたと、ヘルダー氏が真剣に信じているとは考えたくはない」(349)と言い、さらに、「大地の最近の変化またはその大規模な変化については、つまり大地が何万年(Myriaden von Jahren)ものうちに大洋となり、干上がり、そして人間という被造物にとって居住に適した土地になったという大変革については、モーセ、サンコニアトン、ベロックス、オルフェウスの哲学などの伝承が伝えているから、そして高い山々の地中にある貝殻や化石がそのことを証明しているから、これを知ることができる」(349)と述べている。すなわち、「大地」

については、「何万年」という数値が提出されているのである。そして古代人の証言も挙げられているが、「高い山々の地中にある貝殻や化石」がその証拠としてあげられている。

シュレーツァーは、1759年以降の生涯2度目のゲッティンゲン大学学生時代に、自然科学の広範な分野にわたって学んでいた。彼は、その出発点から、深く「科学革命」に接していたのである。当時は、ニュートンはもちろん、パーネットやウィストンなどのイギリスの「ワールドメーカー」たちによる地球史の議論も、ドイツに広まっていた⁽²⁶⁾。フォースによれば、なかでもとりわけ「ウィストンの諸著作は、世紀半ばまでにドイツにおいて極めて広範に知られていた」⁽²⁷⁾と述べている。シュレーツァー自身もパーネットとウィストンの名を挙げて批判もしているから、「6日間」を「24×6時間」から解放したウィストンの議論は、当然、知悉していたはずである⁽²⁸⁾。また、ニュートンが地球大の鉄球の場合ではあるが、灼熱状態から冷却するまで5万年はかかるとしていたことも知っていたであろう⁽²⁹⁾。さらに、当時広く関心を呼んでいた、高山の山頂近くから出る貝の化石についても、シュレーツァーは、「大洪水説」を否定する立場に立っている。かつてはヨーロッパの大地を群れをなして象が歩き回る暑い気候の時代があったなどと説明して、大地は「極めて長期間の暑い気候や水に覆われていた」(350)とも述べている。また、「当時の大地は、青年アダム以後の最近の大地とは、全く異なっていたに相違ない」(350)と言い、このような「大変革」が継起した時代を、「青年アダム」以前の時代、人間が大地を「改造」し始める以前のこととし、こうして、「大地」の問題に関しては6000年を越えて「何万年」という単位にまで時間を拡大しているのである。さらに、自分の聴衆には「鉱物学を理解している」(351)人々

も含まれているので、彼らを前に天地創造に関して聖書通りに説明し、「私が『モーセがそのように述べている』等と言ったりすれば、思慮深い人々の頭脳に、私の非科学的説明がひどい残響を残すことになるのは必至である」(351)とも述べている⁽³⁰⁾。このようにシュレーツァーは、その普遍史における「大地」についての記述を、聴衆の要求水準にも考慮を払いつつ、自然科学の成果に適合させるようにも努めていたのである。そしてこうした側面から、「何万年」という単位の年数にまで、敢えて踏み込んでいたのである。

ヘルダーへの嘲笑的言辞とともに主張されているこの「時間」は、しかし、『普遍史の観念』自体で記述している6000年という「世界」の「時間」とは、明らかに矛盾している。彼が目指した『普遍史の観念』の全面的擁護については、この点に関しては、むしろ自らの手で破綻をもたらしていることになる。これは、「普遍史」の立場に立つ限り、「科学革命」との間で必然的に生じてくる問題であった。ここでは、「科学革命」と彼の中にまだ残存している「普遍史」とが衝突していること、及び、その衝突が本書の段階ではまだ解決されていないことが示されているのである。

ガッターラーとの論争 ガッターラーは、シュレーツァーの師ミハエリスの同僚であり、親しい友人であった。従って、ガッターラーの側から見れば、シュレーツァーは弟子の世代に当たる。またガッターラーは、シュレーツァーが『普遍史の観念』(1771-72)以前に『普遍史教科書』(1761)を出版し、『普遍史序説』(1771)を同時期に著していた。シュレーツァーがゲッティンゲン大学に赴任した直後の一時期には、二人は親密な関係にもあった。ところが、『普遍史の観念』の中心をなす理論的記述、第1部の「世界史の理念」では、ガッターラーの名は1度も出てこない。

第2部の「主要諸民族の歴史」でも、具体的記述を省いている「中国人」という項目で、その歴史については「ガッターラー氏の『普遍史教科書』を見よ」(221)とあるくらいである。このようにガッターラーをほぼ完全に無視しているばかりでなく、彼は自身の独自性のほうを強調していた⁽³¹⁾。こうしたことからガッターラーは、当時の新聞記事などで、『普遍史の観念』では現実にはガッターラーの諸発見を利用していながらそのことに触れていないと批判していた。このことが、彼がガッターラー批判を行う主な契機となったのであった。そして、ここでもまたシュレーツァーらしくと言うべきであろうが、彼は、ガッターラーの批判はシュレーツァーの講義に対する高い評判への「ねたみ」(405)によるものにほかならず、しかも、「利用」の件については事態は逆であり、ガッターラーのほうが悪者であり、自分のほうがその被害者だと主張しているのである⁽³²⁾。

彼は、まず、普遍史の分野では彼が1759年にフェニキア人の歴史に関する著作を刊行して以来取り組んできたのに対し⁽³³⁾、ガッターラーのほうは『普遍史教科書』(1861)が最初であるとして、ガッターラーより8歳年少であるとはいえ、「彼が問題にしているこの研究分野では、私は彼より3年先輩なのである」(411)と主張している。しかも、ガッターラーの『普遍史教科書』は「イギリス人の世界史」の形式そのままだし内容もその抜粋にすぎないから、「ガッターラー氏の発見など、確かに何一つない」(413)と切って棄てている⁽³⁴⁾。他方『普遍史序説』については、「イギリス人の世界史」の形式を変更して新機軸を提出しており、その変更内容には、「私の『観念』と重要な一致点が存在する」(414)と認めている。だが、この「一致点」について、「私の若干の変更が、ガッターラー氏のお気に召した」(414)と、すなわちガッターラーのほうか

剽窃者であると主張するのである。しかし、実は、上のように述べるだけでその一致点の具体的内容などには一切触れず、もっぱら出版の前後関係の説明でそのことを論証しようとしている。すなわち、彼のものは1770年の復活祭から始まった講義を原稿として渡し、1771年から印刷を始めたものである。これに対し、ガッテラーの本は序文の年号を1771年と遡って記して出版されたものの、実際は1772年1月になってやっと印刷が完了したものであり、従ってガッテラーの発見を盗むことなど「不可能なことである」(414)というのである。時間の前後関係から「一致点」の剽窃が可能だったのはガッテラーであり、また彼が序文の期日を9ヶ月も遡らせたのは、このことを隠蔽するための操作だったというわけである。

こうした批判に対して、同じ1773年、ガッテラーが反批判を行っている。シュレーツァーは当時バセドウとも論争していたが、バセドウがある公式文書で彼を「嘘つき」と述べていた。こうしたことも引き合いに出しながら、ガッテラーは、シュレーツァーのほうが多く嘘をつき、都合の悪いことを隠蔽しながら、「意図的犯罪」(37)を犯していると反論している。普遍史研究ではシュレーツァーのほう「3年先輩」としていることについては、問題の著書が「高々フェニキア人の商業史すぎない」(9)のにこれに『古代における商業および航海一般史試論』といった仰々しいタイトルをつけているばかりでなく、その実質も、二、三の書物に対して彼の師の「ミハエリスが付した註釈のみで飾り立てられた編集物」(9)にすぎないと断じ、全くの借り物であるときき下ろしている。また、その「嘘」の例として、ヘルダーが彼をガッテラーの主催するアカデミーの一員であると指摘したことに対し、ヘルダーへの反論のなかで、彼が「間違っている」(361)と否定したことを挙

げている。ガッテラーによれば、彼は1765年に会員登録し、研究例会にも1766年までは「全ての会合に出席していた」(17)のである。しかも、『普遍史序説』の構想について、1766年2月に行われた例会で、既にガッテラーが報告を行っていた。その内容も、あとで紹介するように、ガッテラーが編集・発行していた雑誌に公開されていること⁽³⁵⁾、もちろん当の例会にもシュレーツァーが出席していたこと、そしてそれについては故意に沈黙し書物の刊行の経緯だけを持ち出していることなどを暴露している。さらに『普遍史序説』の内容も1770年の復活祭からシュレーツァーと並行して行われた講義によるものであるし、序文に至っては、実際にはその講義の前に既に印刷されたものであることなどを、出版社の証言文書なども付して主張している。まだまだシュレーツァーが挙げたことに逐一反論しているのであるが、これ以上は、紹介する必要はないであろう。

両者の論争は、見たように、時間的な前後関係を巡る議論が中心であった。「一致点」があることは両者が認めているものの、残念ながらその「一致点」自体を巡る学問的な論争ではなかったし、そもそも何が「一致点」かすら、議論から伝わってこない。この論争文書からよく伝わってくるのは、そうしたことなく、シュレーツァーの強烈な自負心とガッテラーの苦々しい思いのほうである。ガッテラーが同じくその反論で述べているところによれば、1765年にシュレーツァーと知り合ってから、とりわけ彼のロシア史研究を高く評価して人々に広く伝えもしたし、彼のゲッティンゲン大学教授への就任に際しても、推薦者のミハエリスとともに力を尽くした。1年半も自宅に彼を寄宿させ、そのうち10ヶ月は、每晚夕食をともにしながら、様々な研究交流を行ったとも記している。そうしたシュレーツァーに、今回、「剽窃者」呼ばわ

りをされたのである。シュレーツァーのほうにも言い分はあったのであろうが、この「論争」も、また、常に強引に自己の学問上のプライオリティを主張していく、彼の「強烈な個性」のほう为主要な原因であると思われる。ブランケも指摘しているように、シュレーツァーの主張には明らかに無理や「不公正」⁽³⁶⁾があり、他方ガッテラーの反論のほうには正当な根拠があるからである。

「論争」は、ガッテラーの反論が出た後にハノーバー政府から論争差し止めの命令が出され、文書合戦も禁止されて、強制的に終止符が打たれた⁽³⁷⁾。しかし論争で示されたシュレーツァーのこのガッテラーへのむき出しの対抗意識は、ガッテラーにとっても研究の推進を促す大きな要素となったであろう。結果から見れば、二人の競い合いを通じ、「両者が一緒になって、歴史研究の場所としてのゲッティンゲン大学の名声を作り上げた」⁽³⁸⁾のであった。

「習作」としての 18 世紀的普遍史 筆者は、この著作をシュレーツァーの「習作」と位置付けたい。理由の第 1 は、シュレーツァー自身の否定にもかかわらず、ガッテラーの強い影響が明瞭だからである。ガッテラーとの「一致点」については上のような次第から推測するしかないが、しかし、地球規模での「世界」が実現した 18 世紀という新しい時代における世界史記述の任務、そこにおける新しい「体系(プラン)」と「方法」の重要性の主張とその研究には、事実として、ガッテラーのほうが早くから取り組んでいた。ガッテラーの『普遍史序説』については、筆者はこれを「体系的・18 世紀的普遍史」と評価している。それは、ガッテラーが「普遍史」の原則の上で 18 世紀の世界を歴史的に説明するとの意図のもとに構築した、その「体系的」な構想によっている。しかも、この構想については、ガッテラーが暴露したように、シュレー

ツァーが事前に「研究会」でそれを聞いていたことも事実であろうし、ガッテラーの議論は、「歴史的構想について」という論文となって 1767 年に公表されているのである⁽³⁵⁾。しかもそこでは、ガッテラー以前に存在した四世界帝国論に基づく普遍史を「古くさい」(628)として否定し、また各国史の形式によるプーフENDORF 的普遍史については、自らも『世界史教科書』で採用してみたがこの形式では「同時代則」(629)を無視することになってしまったという反省とともに、否定している。そして、この同時代の諸民族や諸事件の体系的編成を支え、新たな時代に見合う普遍史の基本要素となる諸概念を提出している。すなわち、伝統的な四世界帝国論にかかわって、前近代における諸「支配民族」とその支配民族を頂点とする「八大民族体系」、近代における「同盟体系」等々の諸概念を提出している。もちろん、構想の重要性、時代区分に関する議論も行われ、また、「アッシリア・メディア的民族体系」以下の「民族体系(Nationalsystem)」の具体例なども提出されており、やがて出版する『普遍史序説』と基本的には同一の内容を持つガッテラーの概念や全体の構想が、すでに、詳細に展開されているのである(635ff.)⁽³⁹⁾。シュレーツァーは「民族体系」という語は使用しないものの、そもそも、その根本にある、「民族」を単位としその共時的・通時的諸関係を重視して全体を構成するという「構想」は「一致」している。また、彼の「主要民族」その他の区分やそこで挙げる具体的事例も、ガッテラーの区分にほぼ対応している。それだけではない。ブランケも指摘しているように⁽⁴⁰⁾、今日高く評価されている彼の「集積」と「体系」に関する議論についても、すでに「エピソード・プラン」と「時期・プラン」という言葉を使用して論議されているのである。このような基礎的な要素の共通性は、現実にも両者の間

に当時密接な関係が存在していた以上、ガッテラーの影響を抜きにして考えることはできない。むしろ、逆に、ガッテラーを継承したうえでの構築物であるからこそ、本書をシュレーツァーが極めて短時日のうちに提出し得たと考える方が自然であろう。

しかし、他方、この時点ですでに一步「ガッテラーより先に進んだ」面があることは、ここまで見てきたとおりである。本書は、こうした意味で、ガッテラーを基礎にしつつも、しかしガッテラーを越えようと強いライバル心を燃やしながらかきシュレーツァーが構成した、一篇の習作である。そしてシュレーツァーがガッテラーよりも先んじた面を示し得たことには、両者の研究の出発点の相違が関与していると考えられる。ガッテラーの場合は、篤信家であったという個人的理由もあろうが、加えて彼は伝統的普遍史のなかで育ち、その原則や内容を確信していたところから出発した。聖書に対しても、その前期においてはなお伝統的な「逐語的靈感」の立場を保持し、その思考も、聖書の一言一句に強く拘束されていた。これに対し、シュレーツァーは学生時代という思想形成期にすでに、ミハエリスを通じて、「新教義派」の洗礼を受けている。こうしたことからガッテラーの場合は普遍史を内部から否定していく歩みを辿るのに対し、シュレーツァーの場合は、聖書との距離において、初発からガッテラーとは異なる位置を有していたと言えるであろう。

筆者がこの著作を「習作」とするもう一つの理由は、「前史」全体や、第2巻「主要諸民族の歴史」には項目が立てられているだけで記述がない部分があり、記述そのものが完成した形で示されていないからである。また、最後に、「科学革命」との不整合な関係がある。この点については繰り返さないが、今後、彼の歩みを辿りながらその推移を確かめていきたい。

次に、本書を「18世紀的普遍史」と位置付けるのは、以下の理由によっている。それは、シュレーツァーもアジアを含む18世紀的世界の新たな歴史的説明に自覚的に取り組んでいるものの、本書の表題を『普遍史の観念』としており、とりわけ「前史」の部分では聖書を直接的基盤とした記述が行われ、またそこでは、世界が成立してから6000年という数値が示しているように、彼の歴史叙述を支配しているのがなお聖書的時間だからである。ヘルダーへの反批判のなかで「普遍史」という言葉について、先にも見たように「極めて明瞭、明白」と述べてそれ以上の説明の必要性を感じていないのも、こうした基本性格を彼自身が自覚していたからであろう。本書は、ガッテラーの場合同様に、彼らの眼前にあったヒュープナーやボシュエ等の「18世紀的普遍史」に対する厳しい批判に基づくものではあるが、また実際に人間観や神の人類史への関与（奇跡）を排除するなどの諸点で「ボシュエの徒」などとの相違はあるものの、しかし、提出された記述の枠組みそのものは、今日から見て、なおそれ自体も18世紀的普遍史の内部にとどまっているのである。

しかしまた、このような「普遍史」的形式や内容を保持している面がある一方で、ここまでいくつかの引用でも示されているように、彼は「世界史」という語も多用している。さらに「世界史」については“Weltgeschichite”以外にも“Welthistorie” (34)、“Universalgeschichite” (35)といった合成語も使用している。先に引用した文章では、「人類史、人間悟性史」に対する大きな違和感が語られているのに対し、「世界史」に対しては、場合によっては「普遍史」を同義語のように感じていたのかもしれない面もある。とはいえ、「普遍史」のほうが「私の気持ちにかなっている」という表現からは、「世界史」に対しても、当時の彼がなにがしかの違和感を感じてい

たことも示されていると言えよう。そして、こうした問題を含みながらも、「普遍史」と「世界史」を多様な形で混用しているという事実が示しているのは、やがて彼が行う明確な両者の区分、及び「普遍史」の否定と「世界史 (Weltgeschichite)」の主張から勘案して、当時の彼は、両者の相違に関して一定の問題は感じ、何らかの模索は行っていたのではあろうが、まだ、十分な考慮のうえでの態度決定には至っていない段階にあると考えられる。

第二節、『普遍史の観念』(1775) 一片足を啓蒙主義的世界史に踏み出した 18 世紀的普遍史一

ヘルダーに対する反批判のなかで、シュレーツァーは「初版の印刷以来、普遍史が日々の仕事になっている」⁽⁴¹⁾と述べていた。そうした「仕事」の結果、シュレーツァーは、1775 年、『普遍史の観念』の増補・改訂版を出版した。

今回は第 1 部に「世界史概要」、第 2 部に「世界史の理念」が置かれ、初版とは順序が入れ替えられている。第 3 部にはヘルダーへの反批判が再録されているが、上でも述べたようにガッテラーとの論争が当局から禁止されたことを反映して、ガッテラー批判関係の文書は削除されている。「増補」されたのは主に「世界史概要」の部分で、今回は、中国史なども省略せずに記述されている⁽⁴²⁾。この期間にまさに「日々の仕事」として精力的に「普遍史」の研究を進めた様子が見える。

「プラン」の整備 本書では初版に比べて「通時的・民族的方法」に基づく「プラン」が、さらに一層体系的に整備された。全体を五つの時代に区分して各時代に新たな名称を与え、さらに各時代に関して記述すべき項目を、8 項目、すなわち、期間・時代の下位区分・諸民族・交通・史料・発明・移動・普遍史に整理し、記述している。どの時代でも「発明」が重視されて

いることに注意したい。それは、全体として、世俗的・文化史的世界史記述の性格が、濃厚になっていることを示しているからである。

まずそのうちの期間、時代区分をまとめると、以下ようになる。

I、始原世界 (Urwelt)。アダムからノアまで
=1656 年間。

II、前世界 (Vorwelt)。ノアからキュロスまで
=1700 年間。

1. ノアからアブラハムまで=400年間。
2. アブラハムからモーセまで=400年間。
3. モーセからトロヤまで=400年間。
4. トロヤからローマまで=400年間。
5. ローマからキュロスまで=200年間。

III、古代 (Alte Welt)。「キュロスからクロヴィス、楊堅、マホメットまでの 1000 年間。または、前 558 年のペルシア帝国成立からギリシア人、ローマ人、パルティア人、中国人の諸帝国を通じて、西ローマ帝国滅亡 (476 年) に至る時代」(52)。

1. キュロスからアレクサンダーまで=200年間。
2. アレクサンダーからキリストまで=300年間。
3. キリストからテオドシウスまで=400年間。
4. テオドシウスからクロヴィスまで=100年間。

IV、中世 (Mittel=Alter)。「クロヴィス、楊堅、マホメットからコロンブスまでの 1000 年間。または、フランク人、中国人、アラブ人の諸帝国の時代から 1492 年のコロンブスのアメリカ発見まで」(141)。

1. クロヴィスからマホメットまで=100年間。
2. マホメットからカール大帝まで=200年間。

年間。

3. カール大帝から十字軍を経てチンギス汗まで=400年間。

4. チンギス汗からコロンブスまで=300年間。

V、近代 (Neue Welt)。1492年以後の300年間。または個別的な諸有力国家連合の終焉および人類の全般的通商連合の開始以後の時代。

1. ヨーロッパ。
2. アジア。
3. アフリカ。
4. アメリカ。
5. 南インド。

四大陸の主要な民族全てを網羅 「諸民族」に関しては、「主要民族」の他に「副次的民族」、「形成途上の民族」というカテゴリーを追加している。「前世界」では四主要民族、エジプト人、カルデア人、フェニキア人、ヘブライ人を挙げ、「副次的民族」として、シリア人、エドム人、エチオピア人、キンメリア人、ケルト人等々、さらに「形成途上の民族」としてギリシア人、カルタゴ人や中国人などを挙げている。「古代」で取り上げる主要民族は5民族（ペルシア人、マケドニア人、ローマ人、パルティア人、中国人）、副次的民族は8民族（ヘブライ人、ギリシア人、カルタゴ人、アラブ人、アルメニア人、エチオピア人、ゲルマニア人、フン人）である。「中世」ではアジアにインド人、アメリカのペルー人、メキシコ人の項目が加えられている。日本については初版と同一の文章があり、そこで触れられているのみである。彼自身は、序文で、普遍史を完成するためにはおよそ200の民族に関する歴史記述が素材として必要だとしている。まだそこまでは達していないとはいえ、また、各民族史の記述には粗密があるとはいえ、

こうして、四大陸上で当時知られていた主要な民族の全てを網羅している。

エジプト史記述と聖書の関係 上の最後の項目、「普遍史」の内容は、具体的には上の「諸民族」の項目で挙げられている各民族の、個別的記述で構成されている。このうち、「前世界」の筆頭に置かれているエジプト人に関する記述だけは、瞥見しておこう。まず初版で筆頭に挙げていた「アッシリア人」を今回は取り下げて、代わりに、「カルデア人」として、これをエジプト人の後に置いている。その理由は、「カルデア人（バビロニア人）の智慧のほうがアッシリアの権力よりも比較にならぬほど普遍史的」（15f）だからであると述べている。他方、エジプト人を筆頭に置くのは、彼らが「文明化した民族として世界最古」（23）だからであった。今回は記述を大幅に増やしているが、彼のエジプト文明への評価は大変厳しい。エジプト人が普遍史的民族となったのは、三つの理由による。一つは「彼らの智慧がギリシア人を啓蒙したこと」（26）であるが、第二は、「定期的にあふれるナイルがペストを引き起こしたこと」（26）、第三は、彼らの「空想的資質」が、後に「不断に活動するペストである修道僧を産みだしたこと」（26）としているのである。

エジプト史の時代区分については、プランの変更にあわせて表現を修正して、「本国のファラオたちのもとでのエジプト人の歴史は、その伝説によれば、大洪水後2世紀の人メネスに始まり、カンピュセスによって前524年に王位と命を奪われたプサメニットで終わる。その間は約1600年間で、その期間は4期に分けることができるが、そのうち最後の34年間を除き、全ての期間が前世界に属する」（30）としている。具体的には以下の通りである。

I、不詳の諸王朝期；メネスからメリスマ

で=800年間。

II、セソストリスのオベリスク時代、セソストリスからケオプスまで=400年間。

III、不詳のピラミッド時代、ケオプスからプサミティクまで=300年間。

IV、より明瞭なギリシア期、プサミティクからプサメイトまで、前670年から524年まで=150年間。

「以後、麗しのエジプトはボールのように受け渡されて他民族の支配を受ける」(35)としてペルシア人の支配から「オスマン・トルコの支配」まで名称のみを並べることは初版同様である。

シュレーツァーは、今回は、エジプト人の出自についても論じている。ただし、その説明は、聖書によるものではない。「最古のエジプト人はエチオピアのサポログ人に由来する。彼らはナイルの瀑布を越えて北上したが、伝説によれば、その瀑布で最初の穀物が発見された」(26)としているのである。そしてエチオピア人がもたらした法と習俗、ヒエログリフ、黒人宗教を基礎にエジプト文明が築かれたとし、さらに、宗教だけでなく「以前荒野で居住していた穴が彼らの家のモデル」(26)になっていると言いつつ、「全ては穴居人的なのである」(27)と、全体を特徴づけている。また各時代の内容は事績の明確なファラオたちに限定した記述となっており、ガッテラーのようにノア以後の時代にエジプト史を押し込めるための努力は一切行っていない。シュレーツァーは「アブラハムのときにはすでに整った国制があり、ヨセフの時には文明化した国家となっていた」(31)と述べ、このアブラハム以後になってやっとエジプト史が確かなものとなると考え、これ以前については「不詳」であると簡単に片づけている。こうしたエジプト史が示していることは、彼がこの時点です

に、ガッテラーよりは一層聖書から自由になっていたということである。

古典的三分の世界史記述への導入 今回の改訂の最大の特徴は、時代区分の変更である。初版では大きく「前史」、「近代」、「最近代(現代)」と時代区分していたところを、今回は五つの時代に区分しなおしたのである。そして「これらの始原世界および前世界の歴史、すなわち世界の始まりからペルシア帝国の開始までの歴史、というよりその歴史の貧弱な遺物にすぎないものを、他の本来の世界史と区別する」(123)と述べており、その「本来の世界史」の時代を、「古代」と「中世」とに区分したのである。初版でも「中世」という時代名を意識していたことについては先に触れておいたが、ここでは、まだこれを「近代」と呼んでいた。今回はそれを改め、「本来の世界史」の時代あとに、つまり、以前には「最近代」としていた時代に、「近代」の名称を移し与えている。シュレーツァーは、本書で初めて公式的な時代名として「中世」を採用し、こうして、ケラーが17世紀末に近世的普遍史の枠内で、しかしその一定の修正として開始した「古典的三分」⁽⁴³⁾を、世界史記述上の時代区分として使用するに至ったのである。ネッダーマイヤーはこの三区法を世界史記述に組み込んだ最初としてブライテンバウフを挙げているが⁽⁴⁴⁾、シュレーツァーはそれよりほぼ10年前に、明確な世界史の編成原理として提示しているのである。またガッテラーの場合は、その後期になると、「三分」の時代名は具体的記述のなかでは使用されても、「構成」としては背景に退いていった。これに対しシュレーツァーは、以後、この三分を堅持していくのである。

シュレーツァーの「三分」に関しては、今回、その「古代」の始点をローマから前6世紀のキュロス(アケメネス朝ペルシア)に置き換

えていることにも留意したい。また当然ではあるが、これにともない、「キリスト前」の年号使用についても「私はキリスト生誕からさかのぼって、キュロス、ローマ、またはモーセまで教えることにする」(262)と、「キュロス」の一語を追加してもいる。初版では「年号の開始」と「本来の世界史」の開始とを同一の時期に置き、それを、前8世紀、ローマ建国に置いていた。初版同様モーセから歴史時代が開始するとし、また「年号の開始」を前8世紀に置く記述はそのまま残しながら、しかし今回、それらの時代を「前世界」の一部に位置づけたのである。その理由については、そこでは個別的歴史はあっても、「しかしまだ体系的な世界史が存在しなかった」(270)からであると言う。他方、これに対し、「キュロスで初めて世界自体が普遍的となる。つまり、それ以後初めて人類が多くの連関を持ちあい、また相互の面識を持ち合うようになるからである」(271)と説明している。また、別の場所では、「ペルシア人の帝国は「人類における最初の大帝国」であり、「それまでいかなる大帝国も存在しなかった」(14)からであるとも述べている。すなわち、それまで孤立した形で歴史時代に入っていた諸地域が相互に結びつきあうことで「世界自体が普遍的になる」こと、しかもそれと同時に、「人類最初の大帝国」が現れたことを重視したのである。もっとも、その結果、「歴史時代」だけでなく「年号の開始」の時代もまた「古代」以前、「前世界」のなかに移されることになり、「歴史時代」が有する画期性のほうは、「構成」としては初版よりはもっと目立たなくなったといううらみが残ることになってしまった。

彼はこの「本来の世界史」の時代を「個別的な諸有力国家連合」(204)の時代とも表現しているが、そこでは中国などアジアも重要な構成要素とされていて、その内実は、伝統的普遍史

における「四世界帝国論」とは、もはや無縁のものとなっている⁽⁴⁵⁾。ガッテラーの場合もこの点は同様であって、彼はこれを「諸民族体系」と呼んでおり、二人の概念は内容的には重なっている。今日でも「古代」については、我々は複数の「歴史的世界」あるいは「地域」の存在を前提に、その世界を統合した「古代世界帝国」という概念を使用している。他方で、シュレーツァーが「近代」に与えた「人類の全般的通商連合」という規定は、現在は「地球世界の成立」あるいは「一体化した世界の形成」などと呼ぶ状況を指している。彼自身「一体化した世界」の時代に生き、そこに至る「普遍史」の記述を目指していた。その限りで、彼が絶えず強調する「全体的視野」によって、使用した概念は異なるにしても、部分的には今日にも通ずる記述を提出するに至ったと言えるであろう。

伝統的普遍史の諸要素もなお記述 もっとも、少しその新しさを強調しすぎたかも知れない。というのは、本書でもなお、普遍史的諸要素が記述されているからである。それを特に色濃く残しているのは「始原世界」だが、記述は、初版よりずっと詳細になっているのである。

「始原世界」に関する情報を伝えている者として、彼はモーセ、サンコニアトン、ベロツス、マネットを挙げている。だが、カルデア人、エジプト人、中国人の歴史の古さの主張は、いずれも天文学上のサイクルなどを誤訳ないし誤解したものであるとして退け、その結果、「最初の世界の出来事に関するモーセの報告は、ユダヤ人やキリスト教徒の眼から見てのみでなく、批判的な人々の目から見ても、歴史的信憑性を有している」(7)と評価し、聖書に依拠して記述するのである。その理由は、「原初の諸事件は、モーセとアダムの間にいた伝承者はたったの4人しかいないのだから、伝承だけからでも、モーセに正しく伝えられたらろう」(8)からであ

る。「4人」とは驚くが、これは、アダム以後の父祖たちの長寿に関し、聖書の数値を信じているから言える言葉である⁽⁴⁶⁾。また、初版同様に、「ほとんど真実で確かな、また重要なことは以下の7命題であり、他のほとんどは寓話、ないしは仮説、秘密めいた、または馬鹿げた話である」(9)として、以下の7命題を、初版より詳しく、解説付きで述べている。少し長くなるが、引用してみよう([]内は要約、また、一部を省略した)。

1. アダム以前は地表は**太洋**に覆われていた。

このことを示しているのはモーセであり、また、大洪水では説明できない高い山上の化石、貝殻である。大地は、ゆっくりとした六つの諸大変革を経て、次第に乾いた土地となってきたに違いない。それ以前の状態はわれわれの惑星が火の玉状態であったに相違ないのだが、この状態からの変化については、モーセは触れていない。しかし、鉱物がそのことを示している。

2. 全人類は**一組**の夫婦のみに由来する。

今日の諸民族の形質的相違をもたらしたのは、気候、食物、技芸、それに偶然である。オランウータンはサルである。ヒューピングのカケルラックは、紛う方なきアダムの子孫である。…

3. 最初の人間は**エデン**に住んでいた。

ユーフラテスとティグリス近傍、従って、アジアのカスピ海の近くに。従って、また、温和な気候の地域ということになるが、それは、最初に人間となった、従ってまだ全く未成熟な人間が享受した気候であった。… [カスピ海は、死海同様に、大洪水またはモーセの直後くらいに生まれた新しい海であろう。この変動によって、アダムの頃の自然と現在では大きく異なってしまっ

おり、その痕跡は残されていない]。…

4. 彼らは、**墮落**した。

従って、すでにアダムとエヴァ自身が、創造主の手で登場した状態から変化した。彼らの肉体的・精神的状態は、彼らがエデンの園で果物を食べたときに悪化した。果物はワイン、アヘン、ドクニンジンなどと同様に身体を通じて魂に有毒に作用し、感覚的欲望を無制限な激しさにまで高めた。そしてこの腐敗と精神的弱体化が、家族全員に広がったのである。

5. 当時人間は大変**長命**であった。

モーセの年は一ヶ月ではなくて年である。モーセの挙げる父祖たちは、種族でもなく、王朝でもなく、あくまで個人である。…

6. 彼らは**技芸**を発明した。

すなわち**言語、衣類、火、鉄と銅**の精錬術、奢侈的技芸である**音楽**すら、さらに、**多分、文字、造船、織物**も発明した。

また人類の三つの主要な一般的生業形態、すなわち**狩猟、遊牧、農業**が出現したし、さらに**婚姻、土地所有**も現れた。

7. 彼らは**大洪水**で絶滅した。

全地を覆う大洪水は物理的には可能であるが、しかし、全ての動物がノアの箱舟で飼われていたということについては博物学者が疑義を呈しており、その疑義は誰も除去できない。またモーセの表現からは、必ずしも大洪水が全地を覆ったということになるわけでもない。さらにそれは、実際に大規模で時代を画するに十分なものではあったにしても、アルプスやコルディレラ山系、太白山脈、シベリア高地などにまで高まったはずもない(9ff)。

全て聖書によっていることは、初版と変わらない。とはいえ、ここでいう「聖書」が、伝統

的な意味での「聖書」とは様相が異なっていることには、留意しなければならないであろう。というのは、その議論をみると、まずは「科学革命」との関わりが濃厚であることが明瞭だからである。天地創造の「6日間」を「火の玉」から出発させ、地球の「6つの大変革」として記述することは、バーネットがデカルトに拠って、さらにウィストンがニュートンに依拠して、展開した議論であった。ノアの箱舟の問題については、「博物学者」たちの側に立つことを明言している。人間の位置付けに関しては、オランウータンなどの類人猿との比較も意識されている。さらに、アダムとエヴァを「全く未成熟な人間」と規定しているところでは、二人を「完全な人間」と考えてきた伝統的普遍史の人間観から、彼がすでに脱却していることが示されている。この「未成熟な人間」とするにあたっては、「新教義派」の代表者である師のミハエリスからこの観念を受け継いだのであろう。こうして、「科学革命」と「新教義派」の流れに沿った聖書解釈を通して、聖書の命題を正しいとしているのである。すなわち、聖書によっているとはいっても、その聖書は、科学革命と新教義派という二枚のフィルターを通したうえでの「聖書」なのである。彼はすでにヘルダーへの反論においても科学革命の側に立つという見解を表明していたが、今回の改訂版の本文でその見解を明記したのである。ガッテラーの場合は、『普遍史序説』(1771)の段階で、なお、「逐語的靈感」の立場に立っていた。それに比して彼は、ここでも、「先へ進んだ」といえよう。彼の言う「批判的な人々の目」とは、こうして、博物学者の眼のみでなく、聖書記述を相対化してみる眼をも含意していたと考えられる。とはいえ具体的議論になると、意味づけは多少修正されても、なお初版と同じく聖書的な7命題が正しいという結果に行き着いた、ということに

はなる。

「時間」の問題についてはどうだろうか。彼は、「他の事情によっては、大地が極めて古いのに対して人類が若いということは、あり得ることである」(6)という一文を挿入したり、また、初版では大地の諸大変革について「これらの諸事件は、歴史時代以前に起こった」(10)としていたところを、今回は、「歴史以前に、多分アダムの遙か以前に、起こった」(227)と改訂している。この新たな挿入句は、先に見たヘルダーへの反論のように年数は明記していないが、しかしそこで表明された立場を反映したものと言えよう。しかし他方で彼は初版の表現を全く修正することなく、「世界が成立してから6000年になる。長い、考えられぬほどに長い期間である！」(268)と述べている。ここでは、彼のなかに残っている伝統的普遍史の要素と「科学革命」との衝突が、「科学革命」には接近しつつも、この時点でなお明解な解決を見てはいないことは確認しておきたい。

片足を啓蒙主義的世界史に踏み出した 18 世紀的普遍史 本書では、啓蒙主義的な歴史哲学との相違の強調や、眼前にしていた 18 世紀的普遍史への批判的態度もそのまま維持している。「世界史のプラン」に基づき、それに関係づけて無数の歴史的素材に秩序を与えるのが歴史家の任務であるとする考え方も繰り返されている。初版にあった人間規定が無修正で繰り返されており、人類の多様性を指摘している文章も、修正されていない。年号表記の改革案については、今回は時代区分の変更に伴い「キリスト前」の延長を「キュロス」までとしているが、その趣旨は変えていない。新たな点としては、全体的プランを変更した。「本来の世界史」の始点をローマからアケメネス朝ペルシアに移ただけでなく、その時代を古代、中世に区分し、そのあとに近代をおくという構成に変えた。具体的記述にお

いては記述する諸民族を大幅に増加させ、当時知られていた世界史上の主要な民族を網羅するに至った。また「発明」の記述を重視する構成としたことで、啓蒙主義的な文化史あるいは文明史の性格を一層鮮明にした。各民族の記述でも、エジプト史に見られるように、聖書からの自立性が強まり、また、「科学革命」に依拠した聖書解釈が強まっている。これら全てのことは、彼が「18世紀的普遍史」から、完全にはないにしても、片足は、踏み出していることを示している。

しかし、以上のような諸側面をもつ本書に、彼は今回も「普遍史」というタイトルを与えている。彼が「普遍史」というタイトルの選択に際し最も意識していたのは啓蒙主義的な歴史哲学との差異の明確化ということにあったが、しかし、従来の18世紀的普遍史に対して、自らの普遍史を、新たな真の普遍史として押し出そうとする自負も、そこには込められていた。しかも、とりわけその「始原世界」は聖書の記述に基づいており、普遍史的要素が彼の「プラン」自体の一構成要素となっていた。「普遍史」と名乗るだけの根拠もあったのである。この意味では、本書はなお「18世紀的普遍史」にとどまっているのである。

彼は、今回もまた、「普遍史」と「世界史」の語の混用を続けている。とはいえ、一箇所、次のような改訂を行っているところがある。それは、第2部「体系的世界史の理念」の冒頭、「世界史」の定義に続く文章である。この場所は、初版では、「一言でいえば、我々は**普遍史**を研究したいと考えるのである」(2)とまとめていた。その同一の文章を、今回は、「一言でいえば、我々は**普遍史**を、または**一般的世界史** (allgemeine Weltgeschichte) を研究したいと考えるのである」(219)とし、一句を挿入しているのである。冒頭の、定義のまとめという重要な文章でのこ

の挿入は、他の場所での混用とは意味が異なるように思われる。挿入されたのは、「一般的」という形容詞をつけた「世界史」である。筆者は、この一句の挿入が示しているのは、「普遍史」から片足を踏み出していることを彼自身が意識しており、そして「一般的世界史」を新たな立場を表す名称として考慮しつつも、しかし、なお結論に到達していないというのが当時の彼の状況ではないかと考える。

第3章、『世界史』(1785、1792) — 普遍史から世界史へ —

シュレーツァーは、1785年、『世界史』を出版した。本書は、1775年の『普遍史の観念』の改訂版である。しかしそれは、彼自身も述べているように、この間の10年間の研究をもとに「大改訂され、形式も完全に換えられた版」(序文)であり、そして本書をもって彼の新たな立場が展開されていくので、これ以後を彼の「後期」として位置付けることが出来る。また、彼が最後に刊行した『世界史』(1792)は、具体的歴史記述で増補が行われているのみで、理論部分の構想や文章には、全く手が加えられていない。このことから、ここでは両書を同一のものとして扱うことにしたい⁽¹⁾。

本書は2部構成となっており、第1部では新たに「世界史序説」が置かれ、第2部「世界史」が歴史記述部分で、各時代およびその時代を構成した諸民族の歴史を記述する。「世界史序説」では、序章に続き次の7章が置かれている。

- 第1章、大地の始まり、
- 第2章、人類の始まり、
- 第3章、大地の変化、
- 第4章、人間の変化、
- 第5章、世界史の概念、
- 第6章、世界史の時代区分、

第7章、世界史記述の歴史

序章から第4章までは新設の章で、その記述も、これまでなかった内容が記されている。これに対し従来「世界史の理念」で論じられていた内容は、一部は関連する各章に配置し直されているが、第5章以下の三つの章にまとめられていて、ここでも補充や改訂が行われている。以下ではこうした「大改訂」について、その特徴的な諸点を見ていくことにしたい。

普遍史から世界史へ 「大改訂」の第1は、本書のタイトルが「普遍史」から「世界史」に変わったことである。その理由が、序章の冒頭で述べられている。

普遍史は、従来、神学者が聖書を理解するのに必要であったり、文献学者が古代ギリシアとローマの著作家や碑文を解明するのに必要な、歴史的年号の集積に他ならなかった。すなわち、それは聖書文献学と世俗の文献学との補助手段にすぎなかった(1)。

次いで、彼が本書で主張する「世界史」が定義されている。

世界史とは、“諸事実の系統的集成であるとともに、それらを通じ、大地や人類の現状を根本から理解するもの”である(4)。

歴史学の独立宣言 シュレーツァーは、上で見てきたようにその前期、『普遍史の観念』の段階では、タイトルに「普遍史」を選び、また記述中では「普遍史」と「世界史」を混用していた。しかし他方で、次第に「普遍史」に距離を感じ始めていた様子が伺われることも指摘しておいた。こうした動きが、本書において一つの決着を来たと言える。彼はここにあるように、明確に、「普遍史」一般を斥けているからである。伝統

的普遍史一般が単なる「補助手段」にすぎなかったということは、歴史学そのものも、また、従属的地位しか与えられていなかったということである。従って、自立した科学としての歴史学が取り組むべきは、かかる従属的地位にある普遍史ではなくて、「世界史」だとされているのである。なぜ「世界史」なのかについては、彼は従来の普遍史著述家たちの「世間智の無さ」(3)を「最も大きな罪」(同)と批判し、政治史の重要性を強調している。彼はこの『世界史』出版の3年前に政治評論誌『国事報』の刊行を開始し、それ以来、全ドイツ的な高い名声を獲得していた。彼の普遍史著述家たちの「世間地のなさ」への批判は、こうした状況を背後に持つものでもあった。こうして「世界史」の任務は、政治史を重要な柱とし、批判的研究によって検証された「諸事実」の体系的記述により、現状の根本的理解に資することだと宣言されている。「世界史」の定義自体は彼の前期における定義を簡略化した表現となっており、その点で、内容上の変化はないようにも見える。しかし「普遍史」を否定したところでの定義であり、「普遍史とは目的、史料、形式において本質的に異なった世界史」(6)の定義であることに注意しておかなければならない。

もっとも、ここでの「世界史」の説明だけでは、「18世紀的普遍史」を追求していたはずのシュレーツァーが、ここに来てなぜ「世界史」を主張するようになるのか、なお不明である。このことについては、しかし、「大改訂」の内容そのものを見たうえで、改めて考えたい。ここでは、彼がこの文章を冒頭においていることの意味だけを確認しておきたい。すなわち彼は、本書の「大改訂」を最も端的に表現するものとしてタイトルの変更を行い、それによってまた、歴史学の独立を「宣言」しているのである。

世界史への高い位置付け 彼は、この独立した

歴史学の最も重要な任務である「世界史」に対し、続く議論で極めて高い地位を与えている。

「世界史は全歴史学に対する指導的地位を占めている」(7) と言うのである。さらに彼は、歴史学においてのみでなく、他の諸科学に対する指導的役割すら与える。この新たな「世界史は真の人類史となり、人類の成立、進歩、完成と墮落を教え、それによって、心理学、国家学、自然科学やその他の諸科学に明晰な説明と証明を与えるものとなる」(8) と主張されているからである。

だが、彼はなぜ、これほどまでに「世界史」に高い地位を与えたのであろうか。この問題については、今日の歴史学の現状のほうから見るのではなく、彼の時代において「歴史学の独立」という場合、何からの独立だったかという側面から検討する必要がある。シュレーツァー（とガッテラー）に即してみれば、彼らが批判し、乗り越えようとしたのは、今日の極度に内部が専門分化された歴史学、専門家による「論文」を前提とする歴史記述などではなかった。シュレーツァーは否定の対象である歴史記述に対し「文献学」の「補助手段」という、彼一流の極端な表現を与えているが、より一般的に言えば、それはメランヒトンの言う「範例」としての歴史、あるいは聖書理解の「補助手段」としての歴史と言い換えられるであろう。すなわちそれは、直接的には、これまで見てきた聖書または神学に従属していた「18世紀的普遍史」、さらにはそれを超えて、聖書を直接的基盤として「人類史」を語ることを任務としていた、古代ローマの教父たち以来1500年近い歴史を持つ、「普遍史」であった。そしてこれまでの歴史記述の基本任務が「普遍史」記述であった以上、これを否定し、聖書または神学から独立した歴史学がまず取り組まなければならなかったのは、「普遍史」に代わる歴史記述であった。そうした新たな歴史記

述は、普遍史がそうしていたように、大地の歴史から人類史全体を包含するものにならざるを得ないであろう。「普遍史」一般を原理的に否定し、このような内容と意義を有する新たな歴史記述に、彼は「世界史」という名称を与えたのである。

他方当時は、歴史学以外にも、聖書（神学）という絶対的存在（学問）から離脱した、「心理学、国家学、自然科学やその他の諸科学」が成立しつつあった。シュレーツァーにおいては、なかでも、啓蒙主義的歴史哲学の語る「人類史」もまた、歴史学と区別されるべき一分野として意識されていた。従って、歴史学がこれらに対抗し得る独自の一学問であることを主張するためには、まず、歴史学こそが「真の人類史」を提供できる学問であることを、実際の記述で証明しなければならなかった。そしてその「世界史」記述が「真の人類史」である以上、それはその基礎的内容からして、他の様々な諸科学に「明晰な説明と証明を与える」筈だったのである。神学から自立したという点では同じでも、そうした他の諸学問に対して、彼は、この新しい「世界史」こそがそれらの新たな諸学問に基礎を与えるものと、主張したのである。

古代にも中世にもそれぞれ特有の「歴史学」があり、時代によって異なるそれぞれの課題と任務があった。このような観点からすれば、ここで述べている「歴史学の独立」は、啓蒙主義の世紀である18世紀の後半において、歴史学が神学から独立し、人文科学に属する「科学」として、その出発点を築いたことを意味する。しかもそれは、いくつかの曲折を経てではあれ、今日の歴史学に通じている出発点でもある。そしてこのような出発点を確実にするためには、なによりもまず「世界史」に取り組まなければならなかったというのが当時の状況だったと考えるべきであろう。「独立」を果たして後は、他

の諸科学同様、歴史学においても「専門分化」が急速に進展する。しかしその第一歩の局面では、なによりも「世界史」が、その中心的問題として闘わなければならない課題だったのである。シュレーツァー（とガッテラー）が「世界史」記述に取り組んだのは、まさに、それが当時の歴史学にとって「主戦場」だからであった。そして彼らが自らの任務を果たすために提出したのは、今後各側面から見ていくように、普遍史を様々な意味で「世俗化」したものである。「世界史」の記述だったのである。

「世界史」の新構成 改訂の第2は、そのプランを大きく改変したことである。前期以来の「通時的・民族的方法」を発展させたものだが、今回の構成が、シュレーツァーの最終的到達点となった。この新たな世界史の「体系」として彼が示すのは、下のような時代区分と内容である（〔 〕内は筆者が補充）。

I、始原世界（Ur Welt）。アダムからノアまで
— 従来は 1656 年間とされてきたが期間は不明 —。

II、無明世界（Dunkle Welt）。なお寓話・伝説的な世界。現存する最古の歴史記述者の出現まで。少なくとも 1000 年間。

III、前世界（Vor Welt）。モーセからキュロスまで=1000 年間。まだ世界史記述のない時代。

1. モーセからトロイ戦争まで=400 年間。
2. トロイ戦争からサルダナパルスまで=300 年間。
3. サルダナパルスからキュロスまで=300 年間。

IV、古代世界（Alte Welt）。キュロスからクロヴィス、ディザブル〔トルコ人〕、楊堅〔中国人〕、マホメットまで=1000 年間。

1. キュロスからアレクサンドロスまで=

200 年間。

2. アレクサンドロスからキリストまで=300 年間。

3. キリストからテオドシウスまで=400 年間。

4. テオドシウスから中世まで=100 年間。

V、中世（Mittel Alter）。クロヴィス等からディアズ、コロンブス、ルターまで=1000 年間。

VI、近代世界（Neue Welt）。紀元 1500 年以後。

時代区分に関する最大の変更は、『普遍史の観念』の 1775 年版では「前世界」という一つの時代に組み込まれていた期間が、「無明世界」と「前世界」に 2 分されていることである。新たな「前世界」の指標となっているモーセが従来通り「現存する最古の歴史記述者」（143）とされているから、2 分した理由は明らかである。シュレーツァーは『普遍史の観念』の段階でも歴史時代と先史時代の区別は行っていた。しかし、そこでは「歴史時代」と「先史時代」との区別が時代区分では不明瞭にしか示されていなかったことも指摘しておいた。今回の改定はこの問題点を解決し、「歴史時代」を明示しようとする意図から行われたのである。その意図は、さらに次の言葉で、一層明確にされている。

全体の三分の一ないし全期間の二分の一は歴史のない、または世界史のない二、三千年間として切り捨てよう、そして、その残りから、果敢な選択で、世界史の概念に従ってなくてはならない事実を取り上げよう。それでも、残った総量は恐るべき多さとなる（92）。

新構成の特徴 今回の改定では、このように「歴史時代」の開始と「世界史の時代」の開始とが時代区分の形で明瞭に示されたが、それに伴って、

さらに明確化されたことがある。

上の文章で大切なことは、第1に、上の引用で明らかのように、「歴史時代」までが歴史学の研究対象となる時代として明確に規定されるに至ったということである。歴史学の対象から「切り捨てられた」のは、「始原世界」と「無明世界」とだからである。

第2に、このことと結びついた重要な変更として、「歴史時代」以前の時代を、すなわち「始原世界」と「無明世界」とを、いずれも「寓話・伝説的な世界」として特徴づけていることである。こうした変更は、本書で、彼がその「前期」とは根本的なところで異なった地平に立ったことを示すものである。「普遍史」においては、6日間での天地創造やノアの大洪水、バベルの塔等々の記述は、それらが預言者としてのモーセが聖書で記述している以上、全て神の計画と関与に基づいて生じた奇蹟であり、人類史の節目となる重要な歴史的大事件であった。しかし、モーセ五書は、シュレーツァーにとって、もはや歴史記述を根底で規定する預言の書ではないのである。歴史時代以前については相変わらずモーセを利用してはいるものの、それは、モーセの記述が「純粋な物理学的・歴史的叙述」(27)だからであると言う。「純粋な物理学的記述」とするのは、後で見るように、6日間での天地創造の叙述がとりわけビュフォンの自然史記述により科学的に説明されているとの立場からの言明である。すなわち「科学革命」を通じて確認されないモーセ以前の時代に関する聖書の記述を、全て、「寓話・伝説」の地位に引き下げたのである。そして、聖書ではなく、史料の根拠を持つ「諸事実」によって記述が可能な「歴史時代」、さらに本来の世界史である古代・中世、そして近代こそが歴史学の研究と記述の対象であることを明示したのである。「普遍史」の否定を、彼は、このようにして「世界史」の構成(プラ

ン) そのものによって明示したと言えよう⁽²⁾。

各時代については、前著同様に、まず最初に期間、時代の下位区分、諸民族、交通、史料、発明、移動等に関して全体的に記述し、最後に個別民族史の記述を行っている。『普遍史の観念』の初版以来の「民族」に関する規定や、それを単位とする「民族的方法」も、そのまま踏襲されている。

無明世界の記述 具体的記述で新しい要素を見ると、「無明世界」については、2点が注目される。一つは、人類史上の諸大事件としてバベルの塔について述べたところで、「何百という世界の言語は自然と時代が作り出したもので、バベルの塔が作り出したものではない」(149)と述べていることである。バベルの塔の事件を、神による奇蹟としてではなく、「寓話」とする態度が明確に言明されているのである。

第2点は、続く記述で「若干の民族(ノア族のみ)の発生」(149)を挙げているのだが、ここでは、創世記第10章によって「ヤペテ族」、「セム族」、「ハム族」に区分した諸民族の系譜の記述が、今回新たに追加されている⁽³⁾。一見すると、それは普遍史の伝統をただなぞっただけのようにも見える。しかし、ここでの「ヤペテ族」その他には、今日の我々も利用している「語族」の意味が付与されているのである。というのは、ここでの民族の「系譜的理解」について、それは「言語の類似性による」(113)ものとしているからである。当時はまだ比較言語学が存在しなかったから、明確な形で「語族」として語られているわけではない。他方、これらの現在の「語族」名が聖書に由来することは周知のことである。この「聖書系譜」から「語族的系譜」への転換も一つの「世俗化」と表現することが出来ようが、その「世俗化」の出発点となったのが、シュレーツァーなのである。彼は、このように、伝統的用語についても「世

俗化」を推進したのである。

トルコ史、エジプト史 『世界史』での各民族の扱いは、『普遍史の観念』(一七七五)のそれと、ほとんど変化がみられない。具体的記述では全体的にその一部補充という性格が強く、位置付けや内容、各時代の民族的構成も大きな変更は行われていない。

そのなかで、一点、今回時代区分の重要な指標としてトルコ人を追加していることは、やはり重要な変更だと考えられる。そこでシュレーツァーは、世界史を飾る人物の一人としてディザブル・イステミ(中国史書では室点密、瑟帝米)を挙げている。彼はテュルク国(突厥)の建国者の一人であり、現在でもトルコ共和国でトルコ民族の建国の年とされている552年、兄のブミン(中国史書では土門)を助けてこれをテュルク国初代のイリク・カガンとし、自らは西面カガンとなってホラズムを滅ぼすなど、突厥の西方への領土拡大で大きな役割を果たした。シュレーツァーがブミンではなくディザブルを挙げているのは、東ローマ帝国の使節ゼマルコスが彼のもとに赴きその豪華な生活を伝えたことから、ヨーロッパ人によく知られた人物だったからであろう。しかしトルコ民族は、ルターやメランヒトン以来の伝統的普遍史においては、長らくアンティ・クリストとその軍勢とされたり、あるいは無視されたりしてきた民族である。このことを考慮すれば、彼が「前期」からトルコ民族を「主要民族」として重視してきたという経緯があるにしても、それをこのように「世界史」の最重要民族へと明確な形で格上げするには、それなりの意味を込めていると考えるべきであろう。すなわち、『世界史』では、信仰とは別次元の、シュレーツァー自身の「世界史の意図」に基づく「世界史」の構成が、より強力に遂行されているのである。

次に、本書でのエジプト史について見ると、

全体を八つの時代に区分し、そのうちの最初の時代、「ファラオ支配下のエジプト、キリスト前424年まで」⁽⁴⁾ についてのみ記述している。その内容は若干の補充はあるにしても、その位置づけや古代エジプト史の時代区分などは、前著と殆どかわらない。エジプト人の文明を全体として「全ては穴居人的なのである」とする特徴付けも、そのままに繰り返されている。「穴居人」については、リンネが、『自然の体系』第10版(1758-59)で「ホモ・サピエンス」の一亜種としてサハラ以南に住む「穴居人」を記載していた。ヘルダーがシュレーツァーの行っている諸民族の階層的分類を「リンネの猿まね」と呼んでいたことは上でも紹介したが、この分類に対するリンネの影響は、今日も指摘されていることである⁽⁵⁾。しかしそれがこのエジプト文明を「穴居人的」とする規定にまで及んでいるか否かに関しては、『普遍史の観念』の段階ではその可能性があるとしても、『世界史』においては「否」と言える。というのは、本書にいたって、ブルーメンバッハの『人間の自然的変異について』第2版(1781)を援用しながら、「リンネの穴居人は、猿とアルビノのムーア人を合体したナンセンスである」(57)と、明確に否定しているからである。彼のエジプト文明の規定は、結局、古代ギリシア人やプリーニウスらが伝えた穴居人の伝承に基づくものということになる。いずれにしても、もはや聖書は、エジプト史を規定することはなくなっている。

また、他の諸民族についても同様に、外見上は『普遍史の観念』の一部補充でしかないように見えるにしても、いずれも、一層、普遍史的観点や聖書の記述、あるいは信仰に束縛されることなく展開されるようになっている。

世俗化された「世界」—ビューフォンによる「大地」の記述— 歴史学を定義するに際してシュレーツァーは、その「前期」においても、「大地」

の記述もその任務の一部としていた。それは、「普遍史 (Universalhistory)」は常に「6日間」での「天地 (Univers)」の創造から開始され、この神による創造の奇跡が、「普遍史」を構成する重要な要素となっていたからである。しかし他方、「科学革命」の進展のなかでこの「天地」をめぐる問題が極めて重大のものとなってきた。イギリスの「ワールドメーカー」たちに見られるように、「6日間」や「大洪水」等々の「奇跡」に対する、普遍史的立場と矛盾しない物理学的説明も様々に試みられてきた。シュレーツァーもまたこの問題に直面していたことは、上でも見てきた。それでは、シュレーツァーは、この「天地」をめぐる問題をどのように解決したのであろうか。

彼は本書における「大改訂」として、「大地」についてその始まりと変化を記述するため、二つの章を新設した。彼がここで最初に行うのは、当時最新の宇宙像 (地球史) の紹介である。本書では註によって根拠を明記するようになっているが、それによれば、中心的に利用しているのは、ビュフオンの『自然の諸時期』(1778)である。彼は、太陽系に関する記述から始めて地球がそのうちの惑星に過ぎないこと、他方太陽系自身も宇宙の一員に過ぎないこと、そして白熱状態から出発しながらその後冷却し、動植物や人間までが居住するに至った地球史などを、数値も含めて詳しく紹介している。

続いて彼は、モーセとこの新たな地球史との整合性をめぐる議論、具体的には創世記の解釈論を展開する。彼はこの「解釈」にあたり、初期地球の状態に関しては、「ヘブライ人モーセや、ヘブライ語をほとんど知らず物理学に至ってはもっと無知な、その古い解釈者たちに問うよりは、まずは自然とその最近の解釈者たち、今日の自然研究者に問うよう勧める」(19)と言う。もちろんこの「自然研究者」として彼が推奨す

る人々は当時の博物学者たちであり、最も重視しているのはビュフオンである⁽⁶⁾。さらに創世記の記述については、「明らかに古いオリエントの言葉で述べられているが、純粋な物理学的・歴史的叙述なのである」(27)とする、彼の基本的解釈を提示している。続いて彼自身の聖書解釈を具体的に展開していく。すなわち最初の一句、「はじめに神は天と地とを創造された」は全宇宙の創造について述べているが、「文書はそこで全世界のほうは置き去りにして地球に向かう」(28)と言い、以後の記述は全て、地球のみに関する記述であるとしている。ここで聖書を「文書 (史料, Urkunde)」と呼んでいることが、既に彼の立場を明示している。創世記は、彼にあってはもはや神聖な預言書ではなく、特定の時代に記述された「文書」なのである。続いて地球の海上を嵐が襲っており、次いで光があったのが第1日、蒸気が海のうえ高く上昇し空気が形成されるが、大地はまだ海に覆われている段階が第2日、第4日は太陽などの天体が創造されたのではなく、天体の規則的運動が地上から見えるようになったと「解釈」すべき等々の説明が続いている。つまりは、創世記が「純粋な物理学的・歴史的叙述」であることを示し、聖書とビュフオンをはじめとする「自然研究者」の新たな自然史記述とが一致していることを主張しているのである。

この積義の部分も、多くをビュフオンに負っている。しかし、ビュフオンの議論には、先駆者があった。シュレーツァーのこうした解釈自身は、ニュートンを源流としウィistonによる展開を経てビュフオンにも流れ込んだ、「聖書積義のニュートンの方法」⁽⁷⁾に連なっているのである。但し、一点、急ぎ付け加えなければならない。それは、同じく「聖書積義のニュートンの方法」によるとはいつても、ニュートン、ウィistonと、シュレーツァーが依拠したビュフ

オンとでは、神学的立場が異なっていることである。ビュフォンの『自然の諸時期』は、科学史上、18世紀的「自然誌 (natural history)」から19世紀的「自然史 (history of nature)」への転換点とされるが⁽⁸⁾、それはビュフォンが彼らとは異なる理神論の立場に立ち、物理学的・天文学的法則の展開は「自然」に委ねられているとして奇跡を排除し、自然自身が自己展開してきた過程を、「時間」のなかで記述したからである。他方、ニュートンとウィストンは、神の自然法則への介入（奇跡）を承認するイギリスの自然神学の立場に立っており、その聖書釈義の方法は、「科学革命」が明らかにした真理と聖書の真理が矛盾なく両立するものとの信念から生み出されたものであった。啓示の記す「奇跡」に関し、神の全能性を示す「奇跡」である点は留保しつつも、しかし他方、それは科学的に説明し得るものであるとされ、その合理的説明を与えることが重視されていた。ウィストンなどは、天地創造や大洪水、千年王国、終末（大火災）等の奇跡を彗星によって説明するのみでなく、千年王国の到来を予言したり、地下の冥府や、さらに天使の存在までをニュートン物理学によって「論証」しようと努めていた⁽⁹⁾。しかし、現実に彼らの具体的議論を読むと、それは、彼らの主張とは逆に、新たな科学的天文学を前提として聖書の記述のほうを読み替える作業にも見える。それは、ニュートン物理学が登場した時代特有の、保守的かつ熱狂的聖書信奉者の攻撃から「科学革命」を擁護する取り組みとも見える。実際、イギリスではこの方法は、ニュートン物理学が普及するにつれて、ウィストンを最後に、「18世紀半ばには」⁽¹⁰⁾影響力を喪失していくとされる。こうした聖書解釈方法をビュフォンが取り込んだのは、彼らと信念を同じくしていたというよりは、イギリスと大陸との歴史的位相の相違によるものであろう。ビュフォンは、

旧来の聖書解釈を奉ずるソルボンヌによって、異端告発を受けている。こうした状況のなかで、彼らの方法が有する、伝統的立場に基づく批判から科学革命を擁護するという側面を、彼が重視したのではないであろうか。ビュフォンが実際に展開している自然史は、もはや天使が舞い、神秘的な力が支配するような「天地 (Univers)」のそれではない。そこで記述されているのは、伝統的普遍史における奇跡に満ちた「天地」ではなく、法則が支配する「自然」=「世俗化された世界 (Welt)」の歴史に他ならないのである。ビュフォンは当時のフランスの宗教界の現状を考慮し、宗教界に対し、伝統的聖書解釈とは異なるにしてもそれが一定の聖書解釈に基づいていると示すことが、彼の新たな自然史記述の擁護のための有効な手段の一つと考えたのではないであろうか。

シュレーツァーは、聖書の解釈を誤った例として「バーネットとウィストンの体系」(25)を挙げている。その誤りの内容は指摘されていないが、彼も、ウィストンの方法をその信念とともにそのまま受容しているのではないことは、明らかである。シュレーツァーは既にその前期から、師のミハエリスを通じ、ニュートンやウィストンの聖書研究方法を脱却した、新たな「新教義派」の立場を受容していた。そのことは、聖書を「文書」と呼んでいることに現れている。このことは、ビュフォンを通じて換骨奪胎され、自然史を擁護する議論の一部に改変された、「聖書釈義のニュートンの方法」の受容を容易にしたであろう。そして、その結果が、モーセを歴史家とし、モーセの記述を「純粋な物理学的・歴史的叙述」とする位置づけと、その具体的な聖書の「解釈」となったのだと考えられる。また、シュレーツァーが『世界史』においてビュフォンに依拠して「自然史」を記述したのは、単にそれが最新の学説だからという理由からではな

いことも、明らかである。彼が既にその前期から「科学革命」との関係を深めつつあったこと、そしてそこでは、彼のなかで普遍史的立場と「科学革命」との矛盾が深まりつつあったことを見てきた。こうした動きから見れば、ビュフォンの全面的受容はこの矛盾の「解決」であり、「科学革命」の側への全面的移行でもあったと理解すべきであろう。そしてこの「解決」もまた、本書で「普遍史」から「世界史」へと移行したと深く結びついていると考えられる。すなわち、新たな「世界史」においては、従来の普遍史で記述されてきた、奇跡に満ちた「ユニヴァースとしての世界」から、自然法則が支配する「世俗化された世界 (Welt)」への転換が結びついていたのである。彼はこのことを示すために、新たな章立てを行ってまで、これを記述したのである。

ニュートンの時間の歴史への導入 ビュフォンは、シュレーツァーが『普遍史の観念』の改訂版を出版したと同じ1775年、「地球と惑星の冷却に関する研究」を発表していた。そこでは、今日から言えば厳密さを疑えるにしても、しかし様々な実験に基づいて、白熱状態の地球が冷却して現在の温度に至る「時間」を提示していた。『自然の諸時期』(1778)では、この数値を用いながら、地球史を7期に時代区分してさらに詳しく地球史を語っている。そこで肝要な数値は、白熱状態の地球が誕生してから今日までに経過した75000年、そのなかで人類が創造されたのが地球史の第7期、6000～8000年前という数値である。ヘブライ語聖書に基づく普遍史では、約6000年前、「6日間」で人類を含む天地創造が行われたとされてきた。これに対しビュフォンは、地球の誕生と人類のそれとの間に膨大な時間の間隔をおき、人類史に関しては従前と同じ6000年という数値を認めながら、地球史に関しては、当時であっては驚異的な、万年単位の

「時間」を主張したのである。この二つの数値のうち75000年のほうをビュフォンが重視している点については、疑問の余地はないであろう。異端の告発を受けてなお主張したのが、この数値だからである。これに対して6000年という数値は、当時の通念への妥協であると言えよう。そしてこの「妥協」によって彼が目指したのは、自然史に関する「時間」の、始まり(天地創造)と終わり(終末)のある「聖書的時間」からの解放であった。

シュレーツァーの『世界史』は、『自然の諸時期』刊行の7年後に出版されている。彼は、既に前期の段階で天地創造に関する「24×6」時間という数値を否定し、天地の創造とアダムとの間に間隔を認める立場を表明していた。しかし、他方では、「世界が成立してから6000年になる。長い、考えられないくらい長い時間である！」とも述べていた。『世界史』は、そうした矛盾を抱えていたシュレーツァーが『自然の諸時期』に接した後に、書かれているということである。その結果は、「時間」に関してもまた、ビュフォンを受容することによる矛盾の「解決」であった。彼は本書で「大地の始まり」の問題を議論し、ビュフォンの75000年という数値も紹介しつつ、「大地は、…何万年もかかって、水と火の作用で形成されてきたに違いない」(23)と結論づけている。さらに、従来繰り返してきた一文にも手を入れた。すなわち、「人類は少なくとも6000歳である。長い、ほとんど考えられないくらい長い時間である！」(92)と改訂したのである。主語の「世界」を、「人類」に置き換えたのである。だが、これは、単なる修辭上の修正ではない。それは、「普遍史」の伝統からの脱却という、本質的転換を意味するからである。このことが示しているのは、彼が明確に「科学革命」(ビュフォン)の側に立ち、公然と「世界」の始まりと「人間」の歴史の始まり

の間に大きな時間的な隔たりを置くに至ったということ、そうした立場で「世界史」を構築しようとしているということである。さらに、それに決定的な影響を与えたのが、ビュフォンだったということである。

しかも、この転換には、もう一つの重要な要素が含まれている。というのは、ビュフォンは、ヴォルテールと並んで、フランスにおける最初のニュートン主義者の一人であり、彼のこの数値の背後には、ニュートンの「絶対的時間」、すなわち「ひとりでに、そのものの本性からして、外界の何ものとも関係なく均一に流れる」時間が、潜んでいたからである。ニュートンにあってはその物理学の前提であったこの「絶対的時間」を、ビュフォンは自然史に導入したのである。そのことが、上で見た自然史的時間の聖書の時間からの解放と結びついていたのである。そしてこれを承認したシュレーツァーは、この自然史の背後に流れる「絶対的時間」を彼の「人類史」に、従って歴史学に、導入したのである。今回彼が「普遍史」の否定を宣言するにあたっては、このように、「自然史」の内容そのものだけでなく、「時間」に関する考え方の転換が結びついていたのである。彼が「世俗化された世界」に転換するに当たり、その決定的一步を後押ししたのが、バーネットやウィストンのような「神聖な」理論ではなく、実験という強力な武器を備えたビュフォンの理論だったのである。そしてその結果、シュレーツァーは、ハーバーのいわゆる「時間革命」を歴史学の場で遂行することになったのである⁽¹¹⁾。

「時間」表記法の革新：今日のキリスト紀元使用法の開始 歴史の中に流れている「時間」がニュートンの時間に変化したことは、『普遍史の観念』における年号表記法改革の提唱を、一歩進めさせることにもなった。そこで引用していた文章を、下のように改訂したのである。

私は、キリスト生誕から遡ってキュロスまで数えることにする。…記憶力にとってこれは極めて大きな利益となる。だがもっと大きなことは、これによってヘブライ人とギリシア人の年号計算の相違の問題が避けられることであり、さらに、ほとんど全ての教科書が食い違い、その結果全く異なった年号を与えることになっている、あの、天地創造から行う笑止で不正確な算定も完全に廃棄することができるということである(87、傍線は筆者)。

『普遍史の観念』の文章では、初版でも改訂版でもいずれも、傍線部分は、それぞれ「極めて(unendlich)」、「大部分(größtentheils)」という言葉で表現されていた。しかし、今回は、「笑止で(lächerlich)」、「完全に(völlig)」に置き換えたのである。これもまた、単なる修辭的な語の置換として見過ごすことはできない、根本的な修正である。すなわち、創世紀元による年号に対して、以前は部分否定を行っていたに過ぎなかった。しかし今回の修正は、これを原理的に「完全に」否定し去ったのである。そしてそのうえで、「イエス前」を含むキリスト紀元のみを、キュロス以後の「世界史」において使用することとしたのである。つまりキリスト紀元を創世紀元から完全に独立させ、歴史記述における年号表記の手段としたのである。これは、世界史の神学からの独立と表裏一体を成す「宣言」でもある。普遍史的な「時間」の放棄とともに、創世紀元による年号も廃棄したのである。

このような「独立」したキリスト紀元は、さらに、二つの側面から新たな意義を獲得することになった。一つは、上で述べた「絶対的時間」との関係からそれが有するに至った、新たな意義である。すなわち、シュレーツァーは、キリスト紀元が元来有していた宗教性を中性化し、

それを歴史をも貫く「絶対的時間」の目盛り
に転換し、今日に至る、その「西暦」としての年
号使用法を開始したのである。なぜなら、自然
史（ビュフォン）との関係で見た彼の時間は、
もはや始点と終末を有する時間ではなく、前後
に無限に延長され得るニュートンの時間だっ
たからであり、人類史に関わる時間も、この自
然史的時間の一部となっているからである。
従って、シュレーツァーにおける「キリスト紀
元」は、キリスト誕生を定点としてニュートン
的時間を表現する、一つの記号となっている。
あるいは、伝統的なキリスト教的・宗教的意味
を剥奪された中性的時間を表示する年号となっ
ているのである。同じくニュートンの時間を信
じていたイーゼリーンやヴォルテール、コンド
ルセらは、ともに年号表記の困難に直面してい
た。その結果、彼らはほとんど年号を使用しな
い歴史書を書いている。彼らがキリスト紀元の
利用をためらったのは、キリスト紀元自体が本
来的に有していた宗教的性格とともに、さらに
それが創世紀元と結びついていたことが原因で
あったろう。しかしシュレーツァーの場合、年
号表記はもともと「手段」にすぎなかった。し
かも今回は創世紀元から切り離し、そのうえで
「中性的時間」の表記法としてキリスト紀元を
使用することとしたのである。いわばキリスト
紀元を「世俗化」したのである。彼は、しかし
それによって、かえってそれに新たな普遍性を
与えることになった。今日の我々が宗教性をい
ちいち気にすることなくキリスト紀元を使用し
ているのは、このようにシュレーツァーによっ
てそれが「世俗化」され「普遍的記号」に転化
された結果なのである。

もう1点は、彼が本書で与えた時代区分との
関係で生ずる現実的な意味、あるいは可能性で
ある。彼はモーセ以後を歴史時代とし、それ以
前を歴史のない時代として切り捨てた。他方で

キュロス以後が現実においても世界史記述の存
在という点でも「世界史」の叙述の対象となる
最初の時代＝「古代」であると主張し、これ以
後の時代に「世俗化」されたキリスト紀元の年
号を与えた。本書ではこの年号の使用は、とり
あえずは「古代」の始点、キュロスまでとされ
ている。それは、世界史叙述が存在し、史料に
よって世界史的事実関連が証明できる時点が、
当時はここまでだったという理由からであった。
しかし背後にある時間との関係でいえば、事実
的関連が明らかにさえなれば「古代」だけでな
くその先にある「歴史時代」もまた、いくらで
も過去に遡ることが出来る可能性が与えられ
ている。史料に基づく事実が明らかとなりさえ
すれば、「世界史」のみでなく歴史時代（『前
世界』）もまた、「寓話・伝説的な世界」を否定し
つついくらでも遡ることが可能となっている。
この歴史時代における年号については、実際
には、シュレーツァーはイエス紀元と並んで創
世紀元も使用している。だが、創世紀元につ
いては、「それらが現在どの書物にも見られる
という理由からにすぎない」（序文）と限定し
たうえでの使用であった⁽¹²⁾。このような留保
をつけながらも使用したのは、彼が人類の創
造をビュフォンに従って6000年前と考
えており、この数値の範囲内では、創世紀元
による年号も一定の目安になると判断したの
かもしれない。だが、現実に歴史時代や先
史時代がどんどん遡る事態が起きた場合、
その時代に対しても年号が必要なのは、明
らかである。そしてそこでの年号は、も
はやこの新しいイエス紀元による年号以外
にはあり得ないであろう。人間の歴史を
語るのに「天地創造前」などという年号
を使用することは、全くのナンセンスであ
る。それに対しこの新たなイエス紀元は、
「世界史」の範囲を超えて歴史時代まで、
さらには『無明世界』、『始原世界』の
各時代についても、当時人類史の時間の

限界だった6000年前という限界すら越えて、いくらでも遡ることができる性質を付与されているのである。

ブルーメンバッハ的「人間」像と初期人類史の記述 シュレーツァーは、本書で、さらに「人間」についても、その始まりと変化に関する2つの章を新設している。新設とは言っても、何点かについては、従来の見解が踏襲されている。まず、人間規定の面では、彼の立場は変わっていない。「人間は生ずるものではなくて、成るもの」(59)とする前期以来の文章がそのまま繰り返されている。長大な「自然史」がその前に置かれはしたが、人類に関しては「直接的創造によって」(33) アダムとエヴァという一組の夫婦が創造されたとすることも、これまでと変わらない。その時期については、一方で「5000年前か10000年前か誰にも決定できない」(31)とするが、他方では「極めて古いというわけでもないようである」と言い、先にも引用したように、6000年前が妥当な年号と考えている。

現在の人類世界の多様性の認識についても変わらないといえるが、その認識の根拠については、ブルーメンバッハによって、より一層強化されたと言える。シュレーツァーは、肌の色、身体構造などの外的相違について、「これらの差異は全て明らかに気候、栄養摂取の手段、芸術(Kunst)または習慣、および風習によるものである。…黒人の肌の色でさえも、気候の後天的作用によるものなのである」(56f)と言い、続いて、既に一部を引用した文章だが、次のように述べている。

リンネのホモ・ラルは、猿である。彼のホモ・トログロデュッテス(穴居人)は、猿とアルビノのムーア人を合体したナンセンスである。巨人と侏儒はおとぎ話である。また、極めて多くの旅行記作家たちが報告している

有尾人も、全て現在なお一つも証明されていない(57)。

これらの見解はブルーメンバッハに拠っている⁽¹³⁾。ブルーメンバッハは1778年にゲッティンゲン大学の薬学教授に就任しシュレーツァーの同僚となっており、上の文章は、その『人間の自然的変異について』の初版(1775)以後の業績を反映しているからである。彼はさらにその第2版(1781)で初めて「五人種論」を唱えるに至るが、もともとシュレーツァーも五人種論的記述を行っていたから、ブルーメンバッハによって自身の人類に関する現状認識がより強固に確認されたと感じていたであろう⁽¹⁴⁾。

シュレーツァーは、このように、ブルーメンバッハと共通する具体的人間像・人種論を基礎に、さらにモンテスキューにも拠りながら、歴史時代以前の人類の初期について、新たに記述を付け加えている。それによれば、現在は、「もはやいかなる**自然人**も存在しない。全ては、多かれ少なかれ**人為的存在**であり、時とともに、大なり小なりの社会によって、気候、栄養摂取の様式と思考様式によって、形作られたのである」(55)。また初期社会に関しては、「**コロンプス**以後、我々は、人類の子供状態にある諸民族」(同)を知るに至っているから、こうした未開・野蛮な民族の研究を通じて、人類の「本源的状態(UrZustand)」(56)をずっと確かに規定できるようにもなったと述べる。

「自然人」自体に関する考察は行われていないが、この人類の本源的状態から歴史記述の単位となる「民族」が形成される過程は詳しく考察され、民族形成の原因として5点が挙げられている。第1の原因は食物獲得様式と結びついている、生活様式である。人類は「**最初**は、…野生の植物だけで生きていた」(61)が、やがて狩猟人、遊牧者、そして最後に農民となったの

である。ただし、このうち、「今日までのところ、いかなる狩猟民族にも遊牧民にも、文明化したものは存在していない」(62)。第2に、「**気候、土地及び栄養摂取様式**が諸民族の変化を促進する」(62)。第3は国家の形成である。

獣への、または獣のような人間への不安が、または押さえることのできない破壊的自然への不安が、人間を国家へと駆り立てる。またはより強力であり戦略に長けた人間によって、人間は自身の意志に反して国家へと追い込まれる。愚かな人間をその幸福へと強制することが、人間を**統治すること**と呼ばれる。大部分の人間は愚かであり、従って統治されなければならないのである(63)。

第4の原因は、宗教である。「未来の世界と現在の世界を関係づける思考が芽生え、人間は宗教の必要性を感じるようになる」(64)からである。彼は「人間が宗教を考案(erfinden)したり判断したりできることはまれで、ただその教師を、つまり僧侶を信じた」(64)と述べており、このように宗教もまた、歴史のなかで「必要性」に基づいて人間が「考案した」ものなのである。第5の原因は、道徳である。それは、「一人の人間から万人に拡がり、民族の身体と精神を改造した」(66)。「かくして各民族は、おのおのの土地で、おのおのの時代に、実際にそうであったものとなったのである。**生活様式**が規定し、**気候と栄養摂取様式**が創造し、**支配者が強制し、僧侶が教え、範例が心を奪った**のである」(66)。彼における「民族」は、「一つの国家に統合されているか、または一つの最高支配権に従っている人々」(103)であった。従って、ここで言われている民族の形成が、同時に国家の形成をも意味していることに注意したい。彼の個別民族史の記述が、例えばエジプト史がメネスを祖と

する「不詳の諸王朝期」から常に開始されているように、どの民族についても民族的出自に拘泥せず国家形成の時点から開始されるのも、この理由によるのである。

普遍史的要素も残存、ただし、「寓話＝伝説」として シュレーツァーの『世界史』は上に見たように様々な意味で世界史記述に革新をもたらしたが、しかし、そこにはなお普遍史的要素が残存していることも、指摘しておかなければならない。諸時代のうち最も普遍史的要素が色濃く残っているのは、「始原世界」と「無明世界」である。第2部の記述を見ると、そこでは、上でも述べたように一定の留保を附したうえではあるが、例えばモーセ誕生が創世紀元2493年、キリスト紀元前1490年とされるなど、創世紀元も記されている。また「始原世界」に関し「極めて確かか、または確からしい」(137)として、以下の4命題を挙げているのである。

- 「1. 最初の人間は墮落した」(137)、
- 「2. 人間は当時極めて長命であった」(138)、
- 「3. 彼らのものですでに人間文化が始まった」(139)、
- 「4. 彼らは大洪水で絶滅した」(140)。

ただし、これら諸命題の「確か」らしさについて、幾重にも留保が付されている。第2命題については、父祖たちの900歳から1000歳という年数は、「実際の太陽年だろうか？ビュフォンはそういうことがあり得るとしているが、他の人々は、祖先名の表は…個人名ではなくて部族名ではないかと疑っている」(138)とある。彼は名を挙げていないが、「他の人々」には、ガッテラーも含まれていた。最終的判断は示されていないが、少なくとも、彼も部族名である可能性を検討していることは示されている。第4命題の説明では「全般的洪水は雨では物理的に不

可能だが、破裂した大洋という源泉によって (Gen.VII, II)なら可能 — しかしモーセの言葉は、全般的洪水を意味するわけではない。そしてノアが舟に載せた全動物の世話を1年間にわたり8名で行ったことに対しては、誰も人間の悟性にそれが反するものであることを否定できない。とはいえ、ノアの大洪水は十分に大規模で画期をもたらすものであった。それはまた、大部分の平坦な近東及び南西アジアを襲ったはずである」(141)と言う。しかしまた、「ノアの大洪水が引き起こしたとされる全体的変化は、今だなお、単なる仮説に過ぎない」(40)とも述べている。最後に、「留保」は、「始原世界」と「無明世界」全体を覆っている。彼の上の議論は、この二つの世界を「歴史時代」のそれと明確に区別し、「寓話＝伝説の世界」(95)としたうえで言説だからである。

理神論的な神 シュレーツァーは、『普遍史の観念』の初版から、彼の普遍史が「崇高」な使命と「高貴」な効用を有するとして「世界史は宗教への奉仕者であることができるし、またそうあらねばならない」(37)としていた。他方、上で見たヘルダー批判において現れていた神は、アダムの創造者ではあるがその後の歴史には直接的介入は行わず、「高貴化」への道に進むか「墮落」するかを人間自身にゆだねている神である。天地創造を行った神であるが、「6日間」で創造した神ではない。「何万年」も、「時間」を遙か昔まで遡らせることを許す神であった。すなわち、すでにその時点から、理神論的な神であった。シュレーツァーはプロテスタントの牧師の家柄に生まれ、最初は神学を志した。そのころは、伝統的なプロテスタントの一員だったであろう。しかしその生涯に転機をもたらし、また生涯の師となったのはミハエリスであった。ミハエリスは「新教義派」の代表者であり、理神論の立場に立つ神学者であった。彼を生涯の師

としたシュレーツァーは、明確な形で神を語ることはなかったけれども、このミハエリスとの交流のなかで理神論的な神を受け容れていったと考えられる。彼がその出発点からガッテラーとは異なる聖書との距離を示しているのも、このことが一因であろう。

また、上で見たヘルダー批判の文書では当時まだ決定的に移行はしたとまでは言えないように思われるが、少なくとも、シュレーツァーが理神論的な神を受容しつつあった変化の過程が表面化していたのではなかろうか。彼はもちろん無神論者ではないし、子供時代から宗教教育を行うべしとしてバセドウとも論争していた。当時ヨーロッパでは、この理神論的な神が敬虔な宗教意識とも結びついていた。しかしここで重要なことは、理神論的な神は、一方では「科学革命」とは親和性を有するが、他方では、聖書を直接的基盤とし、その記述を全て言葉通りに歴史的事実としてきたそれまでの普遍史が前提とする神とは、性格を異にしていたということである。彼がヘルダー批判のなかで18世紀の普遍史を厳しく批判する背後には、シュレーツァーの神と伝統的普遍史一般の基礎にある神との性格の相違が横たわっていたことが伺われるのである。だが他方彼は、前期においては、「世界が成立してから6000年になる」という、伝統に即した記述を繰り返していた。こうしたことから、ヘルダーへの反批判における「神」を、彼の「神」の観念の移行の過程を示すものと受け取ることが適切であると思われる。

ヴェーゼンドンクは、「シュレーツァーは深い宗教意識を有してはいたが、それは一種の自然宗教であって、いかなる神の摂理も認めていなかった」⁽¹⁵⁾と評している。筆者はこの「一種の自然宗教」という言葉は「理神論」に置き換えるのが適切と考えるが、いずれにしろ、この評言が完全に適用できるのは、『世界史』の段階か

らであると考え。『世界史』における彼の神は、「始原世界」、「無明世界」に対して、「寓話＝伝説の時代」との規定や諸「留保」を許容する神である。大地と人間の創造者ではあるが、「6日間」の否定やニュートンの時間歴史学への導入等を許してもいる神である。普遍史的な神とは違って、この神は、自然と人間の歴史に直接奇蹟を通じて干渉する存在ではないと主張されている。さらには、宗教すら、人間が歴史のなかで「必要性」に基づいて「考案した」と述べたことを許容する神である。シュレーツァーの「後期」は、このように、彼の理神論的な「神」の観念の確立とも結合していたと考えられる。そしてこの「神」が、『世界史』を根底で支えていたのである。

文明の進歩史としての世界史、『世界史』における「歴史時代」の明確な設定は、時代区分においてのみではなく、章の新設や具体的記述にも現れている。とりわけ新設した第4章「人間の変化」において、シュレーツァーは新たに歴史時代の内容の規定に取り組んでいる。結論的に言えば、彼においては「歴史時代」の開始は、国家と文明の開始を意味する。彼は民族の形成を国家の形成と結びつけて理解しており、さらにその国家の形成は、「家族的社会から市民的社会へ、または、同一のことに帰すのだが、未開から文明への進歩」(58)を意味していたからである。

始原世界に関して先に引用した第3命題にあるように、「彼らのもとですでに人間文化が始まった」とされているから、火や言語から冶金、織物等など、「発明」そのものは、すでに「歴史時代」以前から、積み重ねられてきた。しかし、まさに「人間は、ただ秩序ある**国家**においてのみ、偉大となり得る」(68)存在であって、エジプト人、バビロニア人などによって文字や暦、学問など数々の「発明」が一挙に行われたよう

に、いったん国家が形成されるや、そこでは急速に数多くの「発明」が行われ、さらに文明化の進展とともに、それはますます速度と数を増大させて今日の高度な文明へと進歩してきた。

「世界史は、**人類史**として、同時に**発明**の歴史である」(67)とも述べている。彼が「発明」を重視するのは、このような広く言えば文化史的視点からなのである。そして、こうした「文明」の基礎的要素全てが出そろった時代、それがまさに、彼が設定した、文字史料によって事実が確認できる「歴史時代」の開始の時代でもあった。彼の「歴史時代」全体は、従って、未開段階からの「進歩」によって実現した「文明」の時代であり、その開始は、以後の文明の進歩の始点となった時代である。彼の「歴史時代」は、「世界史」開始以後はその時代(古代・中世)と重なりつつ、さらにヨーロッパ文明を頂点とする、現在の世界に至ることになる。それは、内容的には「民族の形成」＝国家の形成を核として出発し、「市民的社会」の具体的あり方や宗教、道徳、「発明」までを包含する意味での文明の進歩の歴史、ただしそのときどきの文明を担った諸民族の興亡や人類の一部の「墮落」を内包する、文明の進歩の歴史となる。

シュレーツァーは、このような「歴史時代」を設定しながらもなお「世界史」の時代を重視し、「世界史」の記述を歴史学の任務とした。その理由は、彼の「世界史」の定義にある、「大地や人類の現状を根本から理解する」という視点から来るものであろう。彼が活動した18世後半という時代は、大航海時代以来の動きの結果として実現した、いわゆる「地球の一体化」を特徴とする時代であった。彼は彼なりの真の普遍史を目指したその活動の初発から、こうした「一体化した世界」という「現状」の歴史的説明を目指していた。そうした立場からは、「歴史時代」の開始ではなく、このような「一体化した世界」の

始点としてのキュロス(アケメネス朝ペルシア)の時点のほうが、より重要な節目だったと理解すべきであろう。但し、それは「より重要」ということであって、「歴史時代」の排除ではなかった。実際、彼は「始原世界」と「無明世界」を「寓話・伝説的な世界」として排除する一方で、「歴史時代」を明確に歴史学の対象として設定したのである。

こうして『世界史』は、彼のこれまでの研鑽の最終的到達点となった。彼はその理神論的世界観に基づき、神による世界と人間の創造は承認しつつ、しかしそれ以後の「世界」と「人類史」を聖書から解放し、「世俗化」した。そしてこの世界における人類史を、ここまで検討してきた様々な「解決」の上に立って、神による人類教育の発展の過程ではなく、今日の「先史時代」にあたる「始原世界」と「無明世界」における文化的発展、次いで歴史時代における文明の開始、そして「世界史」の開始から現在に至る人類の進歩の歴史を、一貫した体系にまとめ上げた。そのことによってガッテラーより一步先に進み、「ドイツ啓蒙主義歴史学」の到達点となる彼の「世界史」を提出したのである。

ドイツ啓蒙主義歴史学の一頂点 この結果彼の『世界史』は、諸家が認めるように、ドイツ啓蒙主義的歴史学を一つの頂点にまで推し進めたものとなった。ここで「一つの」頂点というのは、それが、なによりも「世界史」記述そのものが問題とされた局面での「頂点」という意味である。

シュレーツァーの世界史記述は、「発明」という文化史的・文明的要素を重視するという点で、ヴォルテール、コンドルセらのフランスの啓蒙主義的歴史記述とも共通の特質を有している。ただし、政治を重視した彼は、アルファベットや印刷術の発明等を時代区分の指標としたコンドルセとは違って、「発明」そのものを時代

区分の指標とまではしなかった。彼は、古代・中世・近代という時代区分のもと、歴史上重要な位置を占めた諸民族とその国家を配置し、より現実的かつ体系的な世界史を提案した。また、ヴォルテール、コンドルセらが直面していた年号表記の問題も、キリスト紀元の「世俗化」によって、解決した。このことは、また、ガッテラーの世界史と比較しても言えることである。ガッテラーも、最後の著書『世界史試論』では「発明」を重視し、人類の文化的発展段階を設定しつつ、体系化を試みた。ガッテラーは、しかし、その「段階」を重視するあまり、人類の文化的進歩の各段階ごとに各民族の歴史を分断し、その段階における諸民族の文化的活動を並列して記述した。そのために、各民族の歴史については、時系列的な流れが辿りにくい形式となった。それに対しシュレーツァーの場合、「発明」はそれを行った民族に即して語られ、人類史への寄与は、発明の「移動」として記述されている⁽¹⁶⁾。その結果、諸民族の文化活動における特徴の記述も、また当該民族の歴史的発展から没落までの全体的なまとまりも保持しつつ、より歴史的現実性に即した、かつ、より見通しのよい歴史記述を与えているのである。

また、その生涯において、ガッテラー同様、シュレーツァーも普遍史から世界史への転換を身をもって提示した。二人のこの転換は、それ自体で大きな意義を有している。だが、19世紀以後との関係で見た場合、シュレーツァーのほうが、より大きな影響を残した。生涯創世紀元を捨てなかったガッテラーと違い、彼は創世紀元を廃棄し、キリスト紀元を普遍史的時間から独立させた。しかも彼は、その独特の個性によって、声高にそれを宣言し、宣伝した。彼の「キリスト前」を含む「世俗化」された年号表記は、無限の歴史的時間を計る目盛りとして使用される、今日的な使用への道を開いた。その結果、そ

これは「シュレーツァー以後、ドイツの歴史科学の共有財産となった」⁽¹⁷⁾。このことを示す一好例となっているのが、ゲッティンゲン大学で学び、ドイツ初期ロマン派の理論的指導者となったフリードリヒ・シュレーゲルである。すなわち彼は、『普遍史講義』(1805-1806)で、「人類の古さに関して旧約聖書から導き出された年代はあらゆる点から見て誤りである」と断じ、また年代決定に用いるべき紀元については、ギリシア史のオリンピック紀元、ローマ史のローマ建国紀元は別として、「他の歴史については“キリスト前”のみであって、これ以外のいかなるものも決定手段とはなり得ない」⁽¹⁸⁾と述べているのである。さらにシュレーツァーは、こうした動きと結びつけて、歴史学の神学からの独立を宣言すると同時に、啓蒙主義的歴史哲学とも対決しつつ、歴史学の対象と方法の確立に努めた。それ自体は普遍史の中から生まれてきた古代・中世・近代という時代区分も、新たな世界史の基本的時代区分に鍛え直した。彼の「通時的・民族的方法」も、ヴェーゼンドンクが夙に指摘していたように、19世紀において、「世界史叙述における唯一の支配的方法」として継承された。彼は、上でも見たように、ロシア人、トルコ人その他の諸民族の歴史を開拓してこれを世界史に組み込むという点でも大きな功績を残したが、それだけでなく、世界史の研究と叙述方法の追求においてもまた、19世紀歴史学に結びつき、その基盤となる諸活動を展開したのである。彼が残したこれらの遺産は、聖書を直接的基盤とし、そして始まりと終末のある「時間」を前提としていた伝統的普遍史を廃棄し、今日に至る歴史学の「科学化」に出発点を与えるものとなったのである。

おわりに

ここでは、ガッテラーを含めてドイツ啓蒙主

義歴史学の果たした役割について考察することで、本誌におけるこれまでのシリーズのまとめとしたい。

ドイツ啓蒙主義歴史学的「世界史」の意義 史学史的には1810年代からは「歴史主義」への移行期に入るとはいえ、ドイツ啓蒙主義歴史学は、19世紀半ばに最終的に主流の地位を奪われるまで、ガッテラーとシュレーツァーが確立した歴史学の地位を引き継いで、なおドイツにおける重要な歴史学の潮流として展開を遂げていく。先にシュレーツァーを世界史記述が最も重要な局面での一つの頂点としたが、彼が「頂点」であるということは、彼で問題のピークを越えたということであって、決して「世界史」の取り組みが絶無となったということではない。しかし、19世紀にはいると、「ゲッティンゲン学派」自体に変化が生じてくる。「ゲッティンゲン大学の重装歩兵密集隊」、ガッテラー、シュレーツァー、シュピットラー、ヘーレンのうち、シュピットラーとヘーレンは「ヨーロッパ史」を主要対象とするようになり、シュピットラーの場合はそのうちの政治史（特にラント史）へ、ズルビックが啓蒙主義歴史学の頂点としたヘーレンのほうは通商史から国際関係史へと重点を移行させていくのである。だが、この事実から逆に、「普遍史から世界史へ」の転換が、ガッテラーとシュレーツァーの二人で完了したと評価することが出来るであろう。実際、19世紀にはいると、二人がそこから出発した伝統的な「普遍史」は、もはや真剣な批判の対象にすらならず、いわんや「普遍史」の研究が大学における学問的研究の対象とされることなど、ありえない状況となる。普遍史的記述はなお家庭教育や初等教育の教科書などの分野で生き残ってはいくものの、もはや、「歴史科学」が取り組む対象ではなくなるのである。このことは、ガッテラーと、とりわけシュレーツァーの影響力がそれだけ大きか

ったこと、その活動によって歴史学の独立的地位が確定し、これを前提条件として、二人の後、歴史学内部での新たな「専門分化」の時代が開始されたことを示している。上では、シュレーツァーを「一つの」頂点と表現した。それは、ドイツ啓蒙主義歴史学の歴史のなかで、その最初の局面として、世界史記述の変革が主要な課題だった時代があったことを強調したかったからである。この課題への取り組みはガッテラーから始まったが、彼の場合は、普遍史からの脱却のほうに重点があった。これに対しシュレーツァーの活動は、ガッテラーの成果は引き継ぎつつも、主として脱却後の歴史学の科学としての建設とその新たな方向付けのほうに向けられていた。その結果、歴史学の研究対象の規定、啓蒙主義的世界史の「体系」と「方法」の前進、キリスト紀元の今日的使用の開始など、今日なお生きている諸遺産を残すことになった。シュレーツァーの後にも、そのときどきの局面における、啓蒙主義歴史学の「頂点」が現れるであろう。だが、「世界史」の問題がドイツ歴史学の独立をめぐる「主戦場」となっていた時代において、その戦いに決着をつけたのが「ガッテラーよりは先に進んだ」シュレーツァーだったのである。

ガッテラーとシュレーツァーが遂行したこの「普遍史から世界史へ」の転換は、同時に、多様な意味での転換を意味するものとなった。

まず第1に、改めて、それが啓蒙主義的歴史学への転換であったことを確認しておかなければならない。彼らの世界史の記述内容は、ガッテラーもシュレーツァーも常に強調していたように、もはや従来のように王侯・貴族を主人公としたものではなかった。彼らは、一方でドイツの現実のなかでは、ともに「民衆」に信を置くことが出来なかった。そこで、現実のドイツ

については、結局、啓蒙専制君主による「上からの改革」によって、ドイツにおける「市民的解放」を目指すことになった⁽¹⁾。しかし彼らの歴史記述においては、名前さえ残さなかった人々による「発明」が大きな役割を果たしていた。また、支配者ではなく「民族」を単位として、全体として人類の文化的進歩を記述する「真の人類の歴史」が目指されていた。普遍史が聖書やそれに基づく四世界帝国論等を通じて支配者の歴史とその支配の正統性を語っていたのに対し、彼らの歴史記述は主人公を民衆の側に置きかえ、それを「真の人類の歴史」として押し出していると言えるのである。このように歴史記述においてはその内容を支配者の記述から解放し、「市民的解放」の一翼を担う内容へと転換させた。こうした様々な意味で、彼らの「世界史」は歴史学を啓蒙主義の一翼へ転化させる転換点となったのである。

第2に、今日の「科学的歴史学」の系譜を遡るという観点から見た場合、それは、「伝統的なキリスト教的世界史から科学的世界史へ」の転換点でもあった。ブランケも言うように、「啓蒙主義的歴史家の争う余地のない功績は、…とりわけ歴史的世界の科学的開発と歴史を科学として基礎づけたことにある」。すなわち、この歴史学はもはや根拠を聖書に置くのではなく、史料の批判的研究に基づく「諸事実」を根拠とし、また、救済史観による目的論的歴史理解ではなく、「大地や人類の現状を根本から理解する」ことを任務とする学問となったからである。そしてその結果神学から独立し、他方では歴史哲学とも異なる手段、方法、研究領域を有し、「世俗的」世界＝歴史的世界を研究領域とする、独立した人文科学の一員としての地位を確立したからである。

第3に、それは全ヨーロッパ的な諸転換と結びつき、かつ、その一翼を担った転換であった。

本稿では、シュレーツァーについて、様々な面での「世俗化」を指摘した。この「世俗化」は、早くはルネサンスから、本格的には「科学革命」を通じて展開し、啓蒙主義の時代になってヨーロッパ全域、全分野に行き渡ると言われる。聖書の支配力が強かった人文科学における「世俗化」は、この動きに取り残された、最後の一分野であった。かかる全体的状況のなかで、ガッテラーもシュレーツァーも、ビュフォンをはじめとする「科学革命」の成果を受容しつつ、「普遍史から世界史」へと転換した。すなわち、「科学革命」を通じて「世俗化」された「世界 (Welt)」を受容することが、当時の聖書の批判的研究の進展と並んで、彼らの「世界史」への転換に決定的影響を与えたのである。こうしてドイツ啓蒙主義歴史学は、全ヨーロッパ的転換の最後の局面を迎えた時代にあつて、当時の主戦場として戦われていた歴史学の分野において、とりわけその中心的問題となっていた「世界史」の分野においてその「世俗化」を遂行したという意味でも、一つの転換点だったのである。そしてそれは、以後今日に至る、「科学」としての歴史学の発展の基礎を築いた。啓蒙主義歴史学の形成には「科学革命」が一つの決定的影響を与えたと言えるが、しかし同時に啓蒙主義歴史学自身もまた、バターフィールドの言葉を借りれば、「歴史研究における科学革命」⁽²⁾の担い手に「転換」したのである。

この「転換点」は、しかし、単なる「通過点」ではなかった。それは、彼らが提出した「世界史」が、世界史記述の歴史において独自の位置を有しているからである。そこでは、まず理論に基づく人間観が、普遍史のそれとも、近代の進化論に基づくそれとも異なっている。シュレーツァーは人間の現実の出発点を神によるアダムの創造に置き、そして多様な現在の人類が全て「同一の祖先に由来している」として、こ

のことに「世界史」の成立根拠を置くとともに、人間を「成るもの」ととらえ、人間の歴史は、「完成能力」とともに「墮落能力」も有するという、人間の本性に基づいて展開するものとした。そしてこの人間を「科学革命」の結果である「世俗化」された「時間」と「世界」のなかに置き、また、リンネの批判的継承者ブルーメンバハと共通する人間観・人種観に基づいて 18 世紀の地球規模の人間世界を見つづ、そうした人間世界の現状に至る歩みを説明しようとした。

さらに、その「世界史」の具体的内容も両者と異なっている。ガッテラーの場合、彼が心血を注いだ「世界史」の記述が最終的に行き着いたのは、人類文化の進歩を基軸として構想された世界史であった。政治史を重視した点で特徴を有するシュレーツァーにおいても、この点は同様である。彼は、その『世界史』において、歴史時代全体を文明の進歩の過程とし、とりわけ「世界史は、人類史として、同時に**発明**の歴史である」と断じ、火とガラスの発明、ジャガイモや火酒のヨーロッパへの渡来は中国の秦などと同じ価値を持つと論じて、文化史、というより、今日の「歴史的社会科学」あるいは「社会史」に近い内容を主張している。このことが、「社会史」を奉ずる人々がドイツ啓蒙主義歴史学を自らの先駆者として位置づける、一つの理由ともなっている。シュレーツァーは、しかもこうした世界史こそ、「実用性」のみでなく、他の学問に対する指導的役割を有するとまで主張していた。世界史のこうした「実用性」、百科全書的内容、その高い地位の主張は、歴史学自体の内部が多様に専門分化した 19 世紀、歴史主義の時代には見られない。これもまた、ドイツ啓蒙主義歴史学とその「世界史」に独自のものであったと言えよう。

ガッテラーとシュレーツァーが世界史記述に残した課題 大きな様々な意味での転換を歴史学

にもたらしたガッテラーとシュレーツァーではあるが、その転換にはなお問題も残されていた。それは、何度も確かめてきた、聖書との関係である。ガッテラーの場合は「伝説的歴史」との限定下であり、また、シュレーツァーの場合は「歴史時代」に先立つ「寓話・伝説的世界」の時代という限定下ではあるが、ともに、アダムからノアまでの時代が、その「世界史」で記述されていた。聖書との関係が、まだ完全には払拭されていないのである。この問題は今日的観点から見ての問題であり、両者に対する「無い物ねだり」とも言える。しかし、今日の我々の「世界史」の成立を考えると、これを問題とすることは許されよう。結論から言えば、それは、両者によって大きな課題として19世紀に託された問題であった。しかしここで重要なことは、この問題についてもシュレーツァーがその解決の糸口を与えてくれているということである。それは彼が設定した「始原世界」、「無明世界」、「前世界」の位置づけと、それが有する「可能性」によっている。

まず「前世界」について言えば、それは「世界史」の時代以前に置かれているが、モーセ以後の、文字史料や歴史書の存在を理由に設定された時代であり、「歴史時代」が開始された時代であった。それは、世界史に結びつくような文書史料が出てくれば、すぐにも、彼の「世界史」（＝古代）に組み込まれる可能性が与えられていた。他方で、「歴史時代」は彼の「世界史の時代」よりはるかに長いタイムスパンを有し、そのうちに「世界史の時代」も包含している。彼が「世界史の時代」を重視したのは、上で見たように、時代状況との関係で持つ「世界史」の重要性に基づいていた。そうした意味では、時代状況の変化によって観点が変化し、その結果「歴史時代」と「先史時代」の区別のほうが重視されるようになる可能性を秘めていた。実際、

19世紀になると、周知のように、彼が重視した「世界史の時代」よりは、この「歴史時代」とそれ以前の時代（「先史時代」）との区別のほうが主要な区分となる。しかもそこでは、ヒエログリフの解読や「アッシリア学」の発展等々によって、「歴史時代」または「古代」が急速に拡大したのであった。

最も普遍史的要素の強く残っている、彼の「始原世界」と「無明世界」の場合はどうであろうか。それらは、当時においては、まだ「寓話・伝説的世界」である。だがこの時代についても、もし史料や歴史書が発見されれば、それらの時代は直ちに「歴史時代」または「古代」へと転化するはずである。他方で、人類史を包含する地球史においては、時間の中性化と無限延長化が遂行されていた。『世界史』で設定された「始原世界」と「無明世界」は、この聖書の「時間」を遙かに超える過去から始まり人類史の開始へと接近してくる自然史と、「歴史時代」、または「古代」の過去への拡大とによって、挟撃される位置に置かれていることになる。シュレーツァーが普遍史的要素を多く有するこの時代をなお設定せざるを得なかったのは、時代的制約によるものと見ることが出来る。彼には、この時代については「モーセ」しか評価できる歴史書がなかった。当時は、ルソーやイーゼリーンら为先駆者とする民族学（人類学）が、まだ形成され始めたばかりの時代であった。今日のような、民族学や考古学によって「先史時代」が明らかにされるような時代ではなかったのである。だが、こうして「世界史」の対象となる時代と「歴史時代」が拡大すれば、「古代」がさらに過去に向かって延長されて、「始原世界」と「無明世界」は縮小を余儀なくされることになろう。またそれにともなって、彼によって「世俗化」されたキリスト紀元が、その拡大された過去にも適用されていくことになろう。他方で、自然史

研究の発展も、はるか過去の側から人類史の開始や「歴史時代」に向かって、「始原世界」と「無明世界」を縮小させつつ接近してくるであろう。両者によって挟撃された普遍史の残滓はこうして次第に縮小されて消滅に向かい、やがて完全に駆逐されて、自然史と人類史、人類史初期と歴史時代とが直接結びつくであろう。その結果、人類史は自然史に直結した先史時代、歴史時代（古代・中世・近代）へと編成替えされていくことになる。シュレーツァー以後の時代、「科学の世紀」19世紀には、地質学、考古学、人類学の発展のほか、とりわけ進化論が登場したことによって、こうした動きが実現のものとなった時代であった⁽³⁾。

シュレーツァーは、世界史記述の枠組み、「通時的・民族的方法」および古代・中世・近代という「古典的三分区」を提出した。それだけでなく、歴史時代と先史時代を区別するという、今日の一つの共通認識となっている人類史の区分を提出した。さらに、普遍史の残滓を廃棄し、自然史と人類史を結合させる可能性を開き、その時間を測る中性的目盛り、すなわち創世紀元から独立したキリスト紀元を提出して、それらが一般的に使用されるための道を開いた。彼が残した遺産は、19世紀ヨーロッパで一般的に継承されただけでなく、一定の限定を附されることがあるとしても今日なお、歴史学の基本的要素として受け継がれているのである。

[註]

本稿では、史料の文献からの引用は、原則として巻数と章、あるいは頁数を本文に半角数字で記載する。また、引用文中のゴチック、傍点は全て原著のものであり、[]内は筆者が補筆した部分である。研究書においても同様

とする。

はじめに

1. 拙著『キリスト教的世界史から科学的世界史へ—ドイツ啓蒙主義歴史学研究—』（勁草書房、2000）。なおガッテラーに関する論考は、この間の研究を踏まえ、本書に収録するに当たって初出のものにかなりの修正を行った。
2. 上記拙著の他、拙著『聖書 VS. 世界史』（講談社現代新書、1996）および『世界史とヨーロッパ』（講談社現代新書、2003）。
3. メランヒトンは宗教改革にともなう大学改革で歴史を重視したカリキュラムを導入したが、それは歴史が聖書の真理の「範例」を与えるからとする位置づけからであった。そして、彼以後18世紀まで、彼に発する「プロテスタント的普遍史」がドイツ大学で書き継がれ、講義されてきていたのである。
4. ガッテラーはその最初の著作『普遍史教科書』で、「読む価値のある歴史の歴史を書くと考えた研究者が未だかつていなかった」として、史学史記述への取り組みを提起した（Gatterer: *Handbuch der Universalhistorie*, Göttingen 1761, I-S.1）。
5. Blanke, Horst Walter : *Historiographie als Historik*, Stuttgart-Bad Cannstatt 1991 (*Fundamenta Historica* 3.), S.194. 以下では本書をBlanke(1991)と表記する。
6. Wachler, Johann Friedrich Ludwig : *Geschichte der historischen Forschung und Kunst seit der Wiederherstellung der literarischen Cultur in Europa*, 2. Bandes 2. Abtheilung, Göttingen 1818.
7. Wesendonck, Hermann : *Die Gründung der neueren deutschen Geschichtsschreibung durch Gatterer und Schlözer*, Leipzig 1876. S.v.
8. Blanke(1991), S.732.
9. Wegele, Franz Xaver von: *Geschichte der deutschen Historiographie seit dem Auftreten des Humanismus*, München und Leipzig 1885.
10. Bernheim, *Einleitung in die Geschichtswissenschaft*, Berlin 1920 (初版は1905年)。坂口昶訳『歴史とはなんぞや』（岩波文庫、昭和10）。彼は歴史学の発展を「物語的歴史」、「教訓的或いは實用的歴史」、「發展的或いは發生的歴史」の三段階に区分し、この第二段階から第三段階への移行期を「17・18世紀交」(25)に置いて、この時点から歴史的知識が「真に一個の科学と成った」(同)とする。そしてこの基本的な立場から、様々な歴史学の潮流を整理している。
11. ベルンハイムは、君主など個人が歴史的事件の担い手であった時代には實用主義的歴史が「繁盛」と

- し、ドイツの「小國分裂状態」(25)が、實用的歴史盛行の基礎にあったと述べている。こうした位置づけには、ガッテラー自身が自らを「プラグマティスト」と名付けたことも関与していよう。しかし、ゼッレが言うように、「ガッテラーがプラグマティックな歴史記述という言葉のもとで理解していたのは“世界における諸事象の全体的関連の観念”[ガッテラー]だったのである」(Selle, Götz von, *Die Georg=August=Universität zu Göttingen, 1737-1937, Göttingen 1937. S.134.*)。しかもその目的の一つは、従来のような王侯を主人公とする歴史を否定することであった。この点については、拙著『キリスト教的世界史から科学的世界史へ』第二編、第二章(126頁、及びその註6)も参照されたい。
12. Fueter, Eduard: *Geschichte der neueren Historiographie*, München, 3. Aufl. 1936 (1. Aifl. 1911).なお、ブランケによれば、ブランケ本人以前に「啓蒙主義歴史記述」という名辞を使用した研究者は、わずか二人、このフューターとヴァヴラ (Vávra, Jaroslav : *Aufklärungsgeschichtsschreibung*, in: "Historia" 19, 1980, 171-93)しかいない (Blanke(1991), S.51)。
13. 「これらの人々は見解や方法において相互に異なっており他の啓蒙主義歴史家に対していかなる特殊なグループをも成してはいなかった」(S.375)。
14. Meinecke, Friedrich: *Die Entstehung des Historismus*, 2 Bde, München 1936. 菊盛英夫訳『歴史主義の成立(上、下)』筑摩叢書、1985。
15. Iggers, Georg G. : *The European Context of Eighteenth-Century German Enlightenment Historiography*. 下記註31の *Aufklärung und Geschichte*(1986), S. 242.
16. Srbik, Heinrich Ritter von ; *Geist und Geschichte vom deutschen Humanismus bis zur Gegenwart*, München und Salzburg, unveränderte 3. Aufl. 1964. 1. Bband (1.Aufl.: 1950).
17. Heeren, Arnold H.L.: *Handbuch der Geschichte des europäischen Staatensystems und seiner Kolonien*, 1809.
18. Dilthey, Wilhelm: *Das achzehnte Jahrhundert und die geschichtliche Welt*, 1901, in : *Studien zur Geschichte des deutschen Geistes*, Gesammelte Schriften III, Leipzig u. Berlin 1927.ディルタイは本書で18世紀の「非歴史性、反歴史性」という考え方を否定した。この点についてカッシーラーは、次註に挙げる書で、ディルタイの限界として『伝説』の最終的な破壊には成功したものの、この点に関する具体的な問題が極め尽くされたわけではなかった」(下、11)と指摘している。
19. Kassierer, Ernst: *Die Philosophie der Aufklärung*, 1932. 中野好之訳『啓蒙主義の哲学(上、下)』(筑摩学芸文庫、2003)。彼は「十八世紀が特別に『非歴史的』な世紀であった、という通説はそれ自体まったく歴史的根拠を持たないし、また持ち得ない見解である。このような見方は、実はロマン主義が啓蒙主義哲学に立ち向かった際に、自らの立場の宣言として作り出したスローガンにすぎない」(下、009頁)と言う。彼によれば、18世紀思想においては「自然科学や歴史学、法、国家、芸術などの個々の認識領域が、次第に従来の形而上学や神学の支配ないし保護から自立しはじめる」(上、258)。そして「科学全体を神学の後見から解放する」という「この抗争のなかから歴史と精神科学一般の新しい形態が発展する」(下、15)のである。但し、この議論で、彼はヴォルテール、モンテスキュー、ヒュームなどを取り上げるが、ドイツ啓蒙主義歴史学者たちを素通りして、啓蒙主義的歴史の克服者としてのレッシング、ヘルダーへと議論を移している。
20. Gay, Peter: *The Enlightenment: An Interpretation*, 2 vols, New York 1967-69. 本書の第二巻 (*The Science of Freedom*, 1969)は翻訳されている；中川久定、鷲見洋一、中川洋子、永見文雄、玉井道和訳、『自由の科学』(ミネルヴァ書房、1982)。ゲイによれば、啓蒙主義者たちは「非歴史的」どころか「歴史学を科学にする」(306)ことに取り組んだ、歴史学の変革者であった。具体的には、聖書に基づくキリスト教的歴史を否定し「世俗化」(312)して史実に基づく歴史に変革し、研究対象を拡大して新たな世界史の可能性を開き、また文化史を発見するなど、大きな変革を成し遂げたと評価している。但し、彼がこれらの議論で取り上げるのもヴォルテール、モンテスキュー、ヒューム、ギボンらであって、ここには、ドイツ啓蒙主義歴史学者の名は一切登場していない。
21. Butterfield, Herbert : *Man on his Past : The Study of Historical Scholarship*, Cambridge 1955.
22. Iggers, Georg G: *New Direction in European Historiography*, 1975. 中村幹夫・末川清・鈴木利章・谷口健治訳『ヨーロッパ史学の新潮流』(晃洋書房1986)。歴史主義に対する批判者であるイグガースは、啓蒙主義を「非歴史的」とする評価について、それはロマン派とその後継者の歴史主義のものだとし、実際には「歴史学の現代的観念は、啓蒙主義にその源を持っている」(15)と指摘する。彼によれば、歴史学の科学化への道は啓蒙主義歴史学者ガッテラー、シュレーツァーらのゲッティンゲン学派によって開始され、それにランケが「一つの進展」(19)をもたらしたことで、歴史学における19世紀的パラダイムが確立したのであった。他方、この「進展」に際して政治史などへの「視野の狭隘化」(19)が起り、ランケらが

- 「記述史料の批判的検討を優先的に重視したことは、かつてゲッティンゲンの歴史家たちが目標とした普遍史の科学的な研究への道を閉ざしてしまった」(24)と批判している。
23. Reill, Peter Hanns: *The German Enlightenment and the Rise of Historicism*, Berkeley, Los Angeles, London 1975. ライルが本書で主張するのは、バターフィールドやイッガース同様に、「ランケの歴史記述の基本的諸原理は啓蒙期におけるドイツの啓蒙主義思想家たちによって確立されていること、及び、ヘーゲルが弁証法による解決を追求した諸問題は、精密に解かれはしなかったにしろ、啓蒙主義的学者たちによって明確に提起されていたということ」(3)である。本書については、以下ではReill(1975)と表記する。
24. Hans-Ulrich Wehler (hrsg.): *Geschichte als Historische Sozialwissenschaft*, Frankfurt am Main. 1973.
25. 「歴史的社会科学」という呼称はヴェーラーが提案し、一九七三年に著書 (Hans-Ulrich Wehler: *Geschichte als Historische Sozialwissenschaft*, Frankfurt am Main. 1973) の題名として掲げて以後広がり、歴史主義を批判する立場の研究者たちの共通の名称として、「遅くとも七〇年代中葉には…他の諸用語に代わって一般化した」(Blanke(1991), S.64)ともいわれている。しかし、本稿は、以後、引用文以外では新たな歴史学の潮流の総称として今日使用される「社会史」の呼称を使用する。
26. H.-U.ヴェーラー編『ドイツの歴史家』(未来社、1982) 第1巻、序言。本書はHans-Ulrich Wehler(hrsg.): *Deutsche Historiker*, 5 Bde (Göttingen 1971/72) の翻訳である。
27. Koselleck, Reinhart: *Historia Magistra Vitae. Über die Auflösung des Topos im Horizont neuzeitlich bewegter Geschichte*. in ders.: *Vergangene Zukunft*, 3. Aufl. Frankfurt am Main 1995 (1. Aufl. 1979). S.47. なお本論文の初出が1967年なので、Koselleck(1967)と表記する。コゼレックによれば、“Historie”が古代以来の「人生の教師としての歴史」という位置づけと結びついていたのに対し、そうした役割を放棄した、単なる過去の諸事件の記述としての歴史=“Geschichte”へとこの時代に転換し、しかも、“Geschichte”が複数形で使用されるようになった。このことが示しているのは、Universalhistorieが神の示した唯一の真理・教訓を記述する統合的歴史(単一の歴史)だったのに対し、世界史(Weltgeschichte)のほうは、多数の系列の歴史(複数の歴史)を統合した記述と考えられるようになったということである。
28. *Geschichtliche Grundbegriffe*, hrsg. von O. Brunner/ W. Conze/ R. Koselleck, Bd.1, Stuttgart 1972. Einleitung, S.xv. 直訳すれば「鞍部期」であるが、ここで「はざま期」としたのは、坂井栄八郎『ユストゥス・メーザーの世界』(刀水書房、2004、244頁)によっている。
29. 執筆者および収録巻数は以下の通りである。
Reill, Peter Hanns: *Johann Christoph Gatterer (Deutsche Historiker VI 1980)*.
Becher, Ursula A.J.: *August Ludwig v. Schlözer (VII 1980)*.
Reill, Peter Hanns: *Ludwig Timotheus Spittler (IX 1982)*.
Seier, Hermut: *Arnold Herrmann Ludwig Heeren (IX 1982)*.
30. 早島瑛「【ドイツ】社会と国家のはざままで」、竹岡敬温、川北稔編『社会史への途』有斐閣選書、一九九五、179頁。なお本書では「ゲッティンゲン学派」が「緩やかではあるが共通の研究方法をもつ歴史家集団」(146)であったと指摘され、個々の歴史家の紹介とともに、それが学問としての歴史学を初めて形成したこと、さらに「ドイツの歴史学は、その誕生のとき、社会史に開かれた歴史学であったのである」(15)として、現代ドイツにおける「社会史」との関係も記述されている。
31. Hans Erich Bödeker, Georg G. Iggers, Jonathen B. Knudsen, Peter H. Reill (hrsg.): *Aufklärung und Geschichte*, Göttingen 1986. 本書は、*Aufklärung und Geschichte*(1986)と表記する。
32. *Aufklärung, Interdisziplinäres Jahrbuch zur Erforschung des 18. Jahrhunderts und seiner Wirkungsgeschichte*. なお本誌が現在のように「年報」となったのは、第13巻(1992)からである。
33. リューゼンに関しては竹本彦彦「ドイツ社会史と概念史-J・リュウゼンのドロイゼン解釈について-」(早稲田大学社会科学研究所『會会科学学討究』第34巻第1号、1988)、及び、同「ドイツの啓蒙史学の系譜とHistorikの歴史-イェルン・リュウゼンを中心に-」(同上第38巻第2号、1992)を参照。なお竹本氏は“Historik”を「歴史学基礎論」と訳しておられるが、ブランケが自らこれを英語で“theory of history”と呼んでいるので(Blanke(1991), S.8)、このように訳した。
34. 例えばこの時期のもので筆者が参照したものは、Blanke/Rüsen(hrsg): *Von der Aufklärung zum Historismus*, Paderborn, München, Zürich 1984.
Vierhaus, Rudolf(hrsg): *Wissenschaften im Zeitalter der Aufklärung*, Göttingen 1985.
Rüsen/ Lämmert/ Glotz(hrsg): *Die Zukunft der Aufklärung*, Frankfurt am Main 1988.
Kocka, Jürgen: *Geschichte und Aufklärung*, Göttingen 1989.
Pandel, Hans-Jürgen : *Historik und Didaktik*,

Stuttgart-Bad Cannstatt 1990 (*Fundamenta Historica* 2).
 35. Bkanke, Horst Walter, Fleischer, Dirk (hrsg.):
Theoretiker der deutschen Aufklärungshistorie, 2 Bde.
 Stuttgart-Bad Cannstatt 1990

(*Fundamenta Historica* 1.1,1.2).

36. Jörn Rüsen: *Historische Vernunft* (*Grundzüge einer Historik*, Bd.1: *Die Grundlagen der Geschichtswissenschaft*), Göttingen 1983.

なおリュゼンは、'Ende des Historismus? Chancen historischer Vernunft' (Blanke/ Rüsen(1984),註 34) においても、その主張を

要約的に述べている。

ブランケはその「学

問母型」を右のよう

に図示し (67)、また、

ドイツ歴史学でパラ

ダイムシフトが起こ

ったか否かの問いに

対し、「私個人は無

条件でしかりと回答したい」(28) と述べているが、それ

は、このように「学問母型」が形成されたと見て

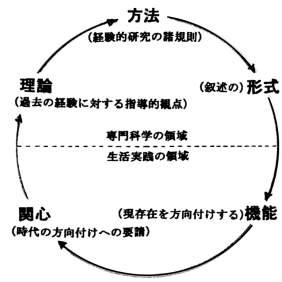
いるからである。

37. 別の場所ではシュピットラー (Ludwig Timotheus Spittler, 1752-1810) を加えて「ゲッティンゲン大学の重装歩兵密隊」(Blanke(1911),S.115) とも呼んでいる。

38. Iggers, Georg G: Edward Wang with the assistance of Supriya Mukherjee, *A Grobal History of Modern Historiography*, 2008.

39. 小木曾公『西洋史学史』(吉川弘文館、昭和三七) では、「シュレーツァーの『普遍史』やシュミットの『ドイツ史』などは学生に対する講義の概説史であるが、これらは、歴史学が一般に普及する上に功績があった」(31) とある。

このように名前と著作だけでもあげられるのはまれで、管見のかぎりでは、千代田謙『啓蒙史學の研究(第一部)』(三省堂、昭和二〇) が、長い間、一定の頁を割いてガッターラーとシュレーツァーを紹介した唯一の記述であった。千代田氏はドイツ啓蒙主義思想には「主智主義と主情主義」、または「合理主義的現實主義的實用主義的傾向」(786) と「浪漫主義的類似傾向」(785) との「二大傾向」(694) があるとし、その「尖頭的位置」(580) を、前者では歴史記述者としてフリードリヒ大王、後者ではヘルダーに与える。後者は歴史主義につながる潮流である。他方、前者の「遠景」の一つとして「文化史的世界史」を提出した「ゲッティンゲン學派」が位置づけられ、「歴史的百科全書の



父」ガッターラー、「獨逸政論の父」にして「政治的方面と文化史的方面との視野廣き綜合を企て」、また「最も卓越せる考證家の一人」でもあったシュレーツァーについて、ウェーゼンドクに依拠し、両者の著書も紹介しつつ記述されている (591~616 頁)。

40. 坂昌樹「ドイツ啓蒙の實用主義について」(『国際文化論集』第 21 号 桃山学院大学総合研究所、2000 年 3 月) をはじめとする氏の一連の論考がある。しかしこの新たな動き担っておられた氏が急逝されたことは、まことに残念である。

41. 筆者がガッターラーとシュレーツァーの取り組みについて知ったのは上述の Reill (1975) からであったが、二人の著書をミュンヘンで直接研究することができたのは、1990 年のことであった。この意味では、上述の研究史の流れに即応する形で研究を始めたということにもなるのかもしれない。

42. ブランケは、啓蒙主義歴史学が取り組んだ研究テーマを 15 項目に整理し列挙している。すなわち、「普遍史；並びに普遍史と区別された歴史哲学的考察；…包括的な人類史のスケッチ；外国の文化史の歴史的研究；ヨーロッパの諸国家史、とりわけ“ヨーロッパ諸国家体系史”；旧来のドイツ史；領邦史…；包括的社会史の意味での制度史、…または“構造史”；最も広い意味での経済史；いわゆる“国政学 (Statistik)”；…史料集；歴史補助諸科学；百科事典的・文献整理的作業；史料批判研究；最後ではあるが重要な、歴史理論 (Historik) に関する反省的考察」を挙げている (Blanke(1991), S.118)。

43. Blanke (1991) , S.113.

44. ヴァッハラーはシュレーツァーの世界史教科書について「彼の諸教科書は当時抜きんできた価値を有していた」(787) と、その大きな影響力を指摘している。そして「彼の多くの機知に富んだ表現は、ヴォルテールを思い起こさせるものがある」(788) とも述べている。

45. Schlözer, A. L. von; *Vollstellung seiner Universal-Historie* (1772/3) : mit Beilagen/ August Ludwig Schlözer-Nachdr. / neu hrsg., eingeleitet und kommentiert von Horst Walter Blanke, Waltrop : Spenner 1997. S.XI. 本書の初版は 1990 年に出版されている。なお、本書に付したブランケの序文及び註から引用する場合は、Blanke(1990) と表記する。

46. ブランケが『世界史』の意義を軽視していることについては、本書で「シュレーツァーの主要著作」に採録した諸文献からこの『世界史』がはずされてしまっていることにも示されている (Blanke(1990), S.XL)。

47. Koselleck, Reinhart : *Geschichte, Geschichten und formale Zeit strukturen*. in: ders.: *Vergangene Zukunft*, 3.Aufl.

Frankfurt am Main 1995 (1.Aufl.1979), S.143. なお本論文の初出は1973年なので、以後、Koselleck(1973)と表記する。

48. 第2章の註5にあるザンデの2003年の論文も『普遍史の観念』のみを論拠に議論が行われている。
49. Blanke (1991), S.118.
50. 「他の諸科学に比べて歴史は独立した地位を有していなかったが、長い戦いを通じてこの独立的地位を獲得させたということこそ、ガッターラーとシュレーツァーの功績だったのである」(Wesendonck, *a.a.O.* S. 142)。

第1章、生涯と活動

1. Gaggstadt : Jaggstadt と綴られることもある (Blanke (1990), S.IX)。評伝は下記のうち、カルレのものを基本とした。
 - ・ Karle, Joan Theresa: *August Ludwig von Schlözer*, Columbia University Microfilms 1972.
 - ・ Becher, (1980), はじめに、註29。また、以下のものにも評伝が含まれている。
 - ・ Schlözer, Christian von: *August Ludwig von Schlözers öffentliches und Privatleben*, 2Bde, Göttingen 1828.
 - ・ Wesendonck, *a.a.O.*, はじめに、註7。
 - ・ Blanke, (1990), はじめに、註44。
2. Wesendonck, *a.a.O.* S. 73.
3. Karle, *op.cit.* p.22.
4. *ibid.* p.55.
5. *ibid.* p.57.
6. ガッターラーは、このときに初めて、共通の友人である博物学者ビュットナーを通じてシュレーツァーと知り合いになったと述べている [Gatterer, *Schlözers Species Facti* (1773), S.16, in: Schlözer, *Vorstellung* (1773) 2.Theil.本表記については第2章註1を参照されたい]。1772年に入学してきたブルーメンバッハを自然人類学者に育て上げたのが、このビュットナーである。
7. ゲッティンゲン大学の創設者ミュンヒハウゼンは“歴史を哲学と法学に結合する”ことを強調し、そのために“哲学部にはとりわけ有能な歴史家を集めなければならない”としていた。この方針に従って、シュレーツァーは、ガッターラー、アッヘンヴァルに次いで3人目の歴史学教授となったのである。哲学部では「普遍史」は基礎教育として重視され、1736年から1796年まで、1765年夏学期を除き、全セメスターで講じられた。なかでも1796年などは、4コマも開講されているほどである (Jarausch, Konrad H : *The Institutionalization of History in 18-th-Century Germany*, in: *Aufklärung und Geschichte*(1986), S.34-40)。
8. 「彼の最高の活動期間である18世紀最後の三分の一世紀において、ゲッティンゲン大学の学生総数約700名から900名のうち、400名が彼の講義を聴講した」(Becher(1980), S.10)と言われている。この数値には普遍史以外の講義も含まれているが、普遍史の「100名超」については、概して一学年のうちの2名に1人が聴講していたことになる。また、当時は学生数100~200名台の大学が大部分であったから、当時の通常規模の一大学の学生全体が受講したような数値ということにもなる (潮木守一『近代大学の形成と変容』(東京大学出版会、1973、163頁)。
9. Wesendonck, *a.a.O.* S.77.
10. Becher (1980), S. 21. なお、バターフィールドの評価は、上に紹介しておいた。
11. *August Ludwig Schlözers Staats-Anzeigen*, 18 vols, Göttingen 1782-1793.
12. Schlözer, Christian von , *a.a.O.* 1.Bd. S.275.
13. Blanke(1991), S.121.
14. シュレーツァーは17歳段階での少年への政治教育を主張し、「まだ虚弱なドイツ人の魂に当局に対する畏敬と感謝の念を刻印することは当を得たことである。しかし同様に必要なことは、ドイツ人の奴隷根性をその芽のうちにつみ取ることである」と述べている (Kern, Bärbel / Kern, Horst: *Madame Doctorin Schlözer*, München 1988. S.28による)。
15. *ebd.* S.33.
16. *Staats-Anzeigen* は1793年に廃刊となるが、それはフランス革命の影響のドイツへの波及を恐れたハノーバー当局の命令によるものであった。
17. Becher(1980), S.9.
18. Wesendonck, *a.a.O.* S.87.
19. Karle, *a.a.O.* S.41.
20. ミハエリスは、旧約聖書研究の一環として、1761年、デンマーク王の後援を得て「幸福なアラビア」に調査探検隊を派遣した。隊は彼の弟子でありリンネの弟子でもあったペール・フォルスコールを中心に組織されたが、高名な歴史家の父となるニーブールのみが1767年に生還するという、悲惨な結果となった。この探検については西村三郎『リンネとその使徒たち』(人文書院、1989)が詳しい。なお、ニーブールの最初の報告書である『アラビアの記録』が出版されたのは1772年であるが、これは後述するシュレーツァーの最初の世界史記述が出版された年にも当たっている。
21. Karle, *a.a.O.* S.41.
22. シュレーツァー自身、ドロテアをAnti-Basedowと呼んでいたという (Kern, Bärbel / Kern, Horst, *a.a.O.* S.55)。バセドウとの論争は、バセドウの、『エミール』に倣った、15歳以下では情操教育に力点を置き、以後に知

育を強化するという教育法をシュレーツァーが批判したことに始まる。シュレーツァーは自己の見解を「実証」するため15歳以前から娘に、バセドウが15歳以後の男子に教えるとしていた諸科目を教え込んだ。語学では低地ドイツ語から始めてデンマーク語、スウェーデン語、ノルウェー語、さらに英語、フランス語、イタリア語、ラテン語、ギリシア語を教え、加えて数学、歴史、政治学、宗教教育をほどこし、しかもいずれも大人が驚嘆するほどのレベルにまで到達させ、ついには1787年、ドイツ最初の女性博士（哲学）にまで育て上げたのである。

第2章、『普遍史の観念』（1771/72年の初版、および1775年の増補改訂版）

1. シュレーツァーの歴史関係の主要な著作には、以下のものがある。

1. 世界史に関する著作

- ・ *Vorstellung seiner UniversalHistorie*, 2Theile, Göttingen und Gotha 1771-1772.
- ・ *Vorstellung seiner UniversalHistorie*, 2Theile, Göttingen und Gotha 1773. 筆者が利用したのはこの1773年版である。この版では、初版をそのまま第I部（出版年を1772年と表記）とし、第II部（出版年を1773年と表記）として、この初版をめぐる論争的文書（ヘルダーへの反批判とガッテラー批判、ガッテラーの反論）が追加されている。以下の引用頁数は、全て本書のものである（以下では *Vorstellung* (1773)、本書第II部からの引用の場合は、これに2.Theilを加えて表記する）。
- ・ *Vorstellung der UniversalHistorie*, zweite, veränderte Auflage, Göttingen 1775. 以下では *Vorstellung* (1775) .
- ・ *WeltGeschichte nach ihren HauptTheilen im Auszug und Zusammenhang*, Göttingen 1785. 以下では *WeltGeschichte* (1785)。
- ・ *WeltGeschichte nach ihren HauptTheilen im Auszug und Zusammenhang*, Göttingen 1792.

2. 特殊史

- ・ *Versuch einer allgemeinen Geschichte der Handlung und Seefahrt in den ältesten Zeiten*, 1761.
- ・ *Geschichte von Russland*, Petersburg 1766.
- ・ *Allgemeine nordische Geschichte*, 1771.
- ・ *Summerische Geschichte von Nord-Africa*, 1775.
- ・ *Kritische Sammlungen zur Geschichte der Deutschen in Siebenbürgen*, 1795-1797.
- ・ *Kritisch-Historische Nebenstunden, Orgines Osmanicas* [...] Göttingen 1797.
- ・ *Nestor. Russische Annalen in ihrer slavonischen*

Grundsprache verglichen übersetzt, und erklärt, 1802-1809.

2. 本書のタイトルでは「普遍史」が使用されているが、具体的記述では、「世界史」と「普遍史」の語が混用されている。この問題は、後に考察する。
3. 「普遍史の叙述者は、すでに整えられた無数の特殊的历史の素材からそれら〔世界史の大変革〕を選択し、完全に集積し、目的に応じて選択し、そしておのおの特殊的历史を他の部分や全体のプランに関係づけて秩序立てる、すなわち、プランが世界史に形式を与えるのである。

諸事件の関係づけのあり方同様にその選択においても基礎にあるこの形式は、一般的には世界史の意図に規定されている」(13 f)。

4. 「叙事詩の地位に高まる」という言葉は今日から見れば奇異にも映るが、これについては、アリストテレス以来の詩を歴史の上位に位置づける伝統との関係で、当時、叙事詩と歴史の境界線や両者の関係について論争があった(Koselleck(1967),S.51f)。彼のこの言葉は、この議論に対するシュレーツァーの回答なのである。
5. Zande, Johann van der : August Ludwig Schlözer and the English *Universal History*, in: Stefan Berger, Peter Lambert, Peter Schuman (hrsg.), *Historikerdialoge. Geschichte, Mythos und Gedächtnis in dem deutsch-britischen kulturellen Austausch 1750-2000*. Göttingen 2003.
6. 「イギリス人の世界史」(*An Universal History, from the earliest account of time to the present*, 23 vols (65Pt.), London 1736-64) は、オランダ語訳を嚆矢として各国語に訳され広く流布した。ザンデによれば、ドイツ語訳は1744年以後、パウムガルテン、次いでゼムラーが中心となって翻訳・出版された。前近代部分第30分冊までは取り立てて批判は生じなかったが、しかし、1759年から刊行が開始された近代史の翻訳をめぐることは、オランダでもドイツでも、とりわけ自国の歴史の記述が不十分とする批判が起った。そこでドイツでは、ガッテラーやシュレーツァーらの批判と提案に基づいて、以後は翻訳ではなく独自に「補遺」として刊行を継続することとなり、1814年まで継続された。本書の刊行は、その一環であった。
7. コゼレックによれば、「普遍史」から「世界史」への転換に際し、「諸歴史」をいかにして「世界史」へと統合するかが問題となった。その解決に当たっては、初期には諸歴史記述を単に統合しただけの、「集合体(Aggregat)」としての世界史が編纂されたが、やがて、合理的な「体系(System)」的世界史へと発展したとしている。その「体系」への議論の実例について、最

- 初彼はカントの「世界市民的意図における一般史ための理念」(1784)のみを挙げていたが(Koselleck(1967),S.53)、後にこれにシュレーツァーの『世界史』(1785)を追加した(Koselleck(1973),S.143)。これではカントのほうが一年早いことになるが、実際にはここで見たようにシュレーツァーのほうが早く議論を展開しており、それを『世界史』で再録していたのである。したがって、「集積」から「体系」への発展という問題に関するかぎりは、『普遍史の観念』(1771/72)を重視する議論のほうが、より正しいと言えよう。
8. “Ethnographie”はシュレーツァーの造語であり、後に述べる批評でヘルダーには「生硬な言葉」と批判されたが、その概念とともに、今日も引き継がれている(Blanke(1990),S.XXXVIII,及び註48)。
9. 「ガッテラーは通時的・共時的方法の発案者であり、シュレーツァーは、今日なお唯一の支配的方法である通時的・民族的方法(chronologisch-ethnologische Methode)の発案者となった」(Wesendonck,a.a.O. S.162)。
10. 要約年表には「前661年、日本の内裏たち」(73)とあり、この年をもって日本も世界史を構成する一員として登場したとされている。ただし、彼は日本についてはこのように名を挙げるだけで、ガッテラーと違い、日本史については終生記述することはなかった。
11. 「その歴史はニムロデとアッシュール、または二人のベルスから始まり、キュロスで終わる。歴史は三つの時代を有するが、そのうち初めの二期は前史に属している」(113)として、次の三期に区分している。
- I、古い未知の歴史、ニムロデからニヌスまで。
- II、中間の、寓話的歴史、ニヌスからサルダナパルスまで。
- III、新たな混乱の歴史、サルダナパルスのおよそ100年後からキュロスまで
1. アッシリア、ブルからメディアのキアクサレスによる滅亡まで、前770~594年まで。
2. バビロン、ナボナツサルからナボニドまで、前747~537年まで
3. メディア;ディオケスからアステュアゲスまで、前695~前558年まで。
- このような「アッシリア」の位置づけと内容は、シュレーツァーが、まだメランヒトンに始まる「アッシリア」論を完全に払拭していないことも示している。
12. これは後述するヘルダーへの反論にある言葉である(Vorstellung(1773).2.Theil. S.277)。なお、Peters, Martin: *Möglichkeiten und Grenzen der Rezeption Rousseaus in den deutschen Historiographien.* in; Herbert Jaumann (hrsg.), *Rousseau in Deutschland*, Berlin & NewYork 1995. S.283 参照。
13. Becher(1980), S.16.
14. Reill, Peter H. : *Science and the Science of History in the Spätaufklärung.* in: *Aufklärung und Geschichte*(1986), p.440f.
15. この点に関しては、拙稿「リンネの人間論」(『埼玉大学紀要 教養学部 第41巻(第2号)』、2006)を参照されたい。
16. 以下の二点がある。
- *Kleine WeltGeschichte*, Göttingen 1769.
 - *Vorbereitung zur WeltGeschichte für Kinder*, Göttingen 1779.
- 現在検討している *Vorstellung*(1773)の段階ではまだ前者を出版しているだけだが、そこでは、彼は年号を創世紀元で記していた。後者は、後述する *Vorstellung* (1775)のうち「世界史の理念」の部分の子供向けに要約したものである。また、バセドウとの論争については、本稿第1章註22を参照されたい。
17. *Vorstellung*(1773), 2.Theil. S.247.
18. Blanke(1990), S.30.
19. シュレーツァーが1784年に書いた言葉(Blanke(1991), S.160による)。
20. Koselleck(1967), S.56.
21. Johann Gottfried Herder: *A.L. Schlozers Vorstellung seiner Universal=Historie.* Göttingen und Gotha bey Dieterich 1772. 8. 16 Bogen. in; Bernhard Suphan (hrsg.), *Johann Gottfried von Herder's Sämtliche Werke*, V. Georg Olms Verlagsbuchhandlung Hildesheim 1967.S.436-440.ヘルダーからの引用は、本書による。なおこの論評はBlanke(1990)にも採録されている。
22. リンネとの関係については第3章で触れる(第3章の註5でも)。
23. *Vorstellung*(1773), 2.Theil 所収。以下の引用は本書による。
24. Johann Gottfried Herder: *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*, 1784-91.
25. Erhalt, Walter: *Was nützen schielende Wahrheiten?* in ; Herbert Jaumann (hrsg),*Rousseau in Deutschland*, 1995. S. 51.この点はヘルダーとイーゼリーン、カントとの相違点でもある。
26. Burnet, Thomas: *The Sacred History of the Earth* (1690/91), Southern Illinois University Press 1965.
- Whiston, William: *A New Theory of the Earth, From its Original to the Consummation of all Things*, Arno Press, New York 1978.本書は初版本(1696)のファクシミリ版である。
- バーネットとウィストンについては、さしあたり、

- Cohn, Norman: *Noah's Flood*. Yale University Press 1996. 浜林正夫訳『ノアの大洪水』(大月書店、1997)を参照されたい。また、「ワールドメーカー」に関しては、以下の博士論文が現在日本で最も詳細な研究である。玉川博之「一七世紀の地球の理論における科学と宗教の交錯—ワールドメーカーとキリスト教的世界観—」(東北大学、2006)。
27. Force, James E.: *William Whiston, Honest Newtonian*, Cambridge University Press, Cambridge · London · New York · New Rochelle · Melbourne · Sydney 1985. p.28 および p.168. ウィストンの『地球の新理論』(1696)は、「ブランデンブルクのある大学の学長」であったハインが1742年にドイツ語に翻訳と解説を行ってから、ドイツでは広く知られるようになった」という。また他方で、ビュフォンが『自然誌』第一巻(1749)でバーネット、ウィストン、ウッドワードの地球の理論について議論しているから、こちらからも、彼らの議論の情報ドイツに伝えられていた。
28. ウィストン(William Whiston, 1667-1752)は、「6日間」は「天地」ではなく地球の創造の記述であるとし、文字通りの6日間だが、ただし、地球の自転が始まったのは「墮罪」の時であるから、自転していなかった最初の「5日」では、その「1日」は公転周期に一致するとして説明を試みた。つまり最初の5日間は我々の5年間にあたるとし、この時間延長によって、聖書にある「天地創造」=地球創造の過程について物理学的な説明を試みたのである。また、この考え方は、ニュートンがバーネット宛の手紙で自転に関して述べた、「最初の年は1年で自転1回、次の年は1年で3回転、3年目は5回…としてかまわない」に対応している。ニュートンは自転の開始の原因については「神が地球に対し…その運動を与えた」と述べて、神の奇跡に帰していた。ウィストンにとってもこの点は同様であり、彼はニュートンから基本的アイデアを受け取ったのである。
29. ニュートン、河辺六男訳、『自然哲学の数学的諸原理』中央公論社、1979、538頁。
30. シュレーツァーは、自然科学のなかでは「鉱物学」を極めて重視していた。娘ドロテアに、言語などを基礎科目として教える一方で、主要科目として数学、歴史、鉱物学の三科目を課し、鉱物学については、ゲッティンゲン大学の同僚で後にリンネの『自然の体系』第13版(1788/93)の編集者となる、F.グメリンに私的に学ばせているほどである(Kern, Bärbel / Kern, Horst, a.a.O. S.53-55)。
31. 筆者はシュレーツァーの前期の二著をともに『普遍史の観念』と訳したが、より正確には、本章註1で見られるように初版のタイトルには seiner (=シュレーツァーの) という語が入っており、彼の独自性が強調されている。なお、ヘルダーに散々な皮肉を浴びせられたこの語は、1775年版では定冠詞の第二格 der に置き換えられている。
32. ガッテラーとの論争に関しては、Vorstellug(1773), 2.Theil に、ヘルダーへの反批判の文書に続いて収録されている。そこでは、Species Facti のタイトルのもと、シュレーツァーのガッテラー批判とガッテラーの反論が収録されている。
33. *Versuch einer allgemeinen Geschichte der Handlung und Seefahrt in den ältesten Zeiten*, 1761. シュレーツァーは本書をスウェーデン語で1759年に出版し、1761年にそのドイツ語訳を出版した。
34. ガッテラーは「イギリス人の世界史」の翻訳者かつ編集者の一人であり、『普通史教科書』については、これに依拠していることを明示していた。
35. Gatterer, J.Chr.: 'Vom historische Plan', in: "Allgemeine historische Bibliothek 1" (Halle 1767), S.15-89. なおこの論文は、以下の史料集に再録されている; Bkanke, H.W, Fleischer, D. (hrsg): *Theoretiker der deutschen Aufklärungshistorie*, 2.Bd. Stuttgart-Bad Cannstatt 1990, S.621-661.
36. Blanke(1990), S.XXXIX.
37. ebd. S.54.
38. Klaus, Andreas: *Vernunft und Geschichte*, Freiburg · Basel · Wien, 1963. S.173.
39. 「民族体系」は『普通史序説』になると「諸民族体系(Völkersystem)」、「アッシリア的諸民族体系」などと変更されと表現されるなど、若干の手直しと整備が行われている。なお、『普通史序説』の構想について、詳しくは拙著『キリスト教的世界史から科学的世界史へ』を参照されたい(第二編第二章)。
40. Bkanke(1990), S.XXXIX.
41. *Vorstellung*(1773), 2.Theil, S.395.
42. 18頁にわたり中国史が記述されているが、まず現在の清帝国に関して「世界最大の帝国」だが「無制限な専制政治」が行われている「世界で最悪の帝国」(122)であるとの前文があり、次いで「中国史の古さ」について議論している。彼は、中国史は周の武帝くらいからある程度は歴史的事実を含むようになるが「中国人の歴史が偉大で真実のものとなるのは、始皇帝からである」(124)と主張する。理由として、黄帝以下の三皇五帝などは後の時代の諸王朝が自己の権力を正当化するために創り出した神話であって、彼らは「中国史において実在した人物ではない」(124)こと、また、中国で日食の記録が始まりある程度信頼できる年代

記が書かれるようになるのは前 770 年頃からであること、そしてその記述も、道徳的・政治的なもので歴史的なものではないことを挙げている。そこで、夏、商などは無視し、また周以後も「前史」として、中国史に以下のような時代区分を与え概略を記述している。

- 前史；周（前 1123-258）～秦（-200）
- I.漢（キリスト紀元前 200-後 220）
- II.第一期分裂時代（220-617）
- III.唐（617-907）
- IV.第二期分裂時代（907-1276）
- V.モンゴル人または元（1276-1368）
- VI.明（1368-1644）
- VII.満州人または清（1644）

43. Christoph Keller (Cellarius, 1638-1707)は、下記の三著で、「古典的三分区」を歴史に初めて導入した；

Historia antiqua, Cizae 1685.

Historia medii aevi, Cizae 1688.

Historia nova, Halae Magdeburgicae 1698.

44. Neddermeyer, Uve: *Das Mittelalter in der deutschen Historiographie vom 15. bis 18. Jahrhundert*, Köln, Wien 1988. S. 196. ネットマイヤーが挙げているブライテンバッハの世界史とは、次のものである：Breitenbach, Georg August von: *Geschichte von Asien und Africa in den mittleren und neuen Zeitalter*, 2 Bde. 1783-1784.

45. 「どの大陸も同等である。…四つの世界帝国にも、神の民やギリシア人とローマ人にも、特別重きを置かれることはない」（*Vorstellung*(1775), S. 242f.）。

46. シュレーツァーが依拠しているヘブライ語聖書によれば、アダムはノアの父レメクの時代まで生きていたし、セムは大洪水後 500 年まで、アブラハムを超えてなお生きていたことになる。「4人」とは、このレメク、セムに加え、聖書からは明確に確定できないが、ヨセフ、エフライムということになる。

第3章、『世界史』（1785、1792）

1. 1792 年版の『世界史』は 1785 年版と同一の構成をとり、特に第一部の「世界史序説」は、誤植を含めて、1785 年版と全く同一の文章が置かれている。
2. なお今回は、「近代」について「なお閉じられていない最初の三世紀は、麗しき時代の最初の曙光となるであろう」（105）と述べるだけで、これを「世界史」の本来の対象とするか否かについて発言していない。しかし前回同様に、近代はまだ「閉じていない」と判断しているから、これを重視すれば、やはり中世の終わり（1500 年）までを世界史記述の本来の対象と考え、

近代については特殊史のみが可能と考えていたとすることができるであろう。

3. 次のように区分している；

- ・「ヤベテ族（Japhetiden）が北部に居住」（149）；
Kimmerier, Medier, Tibarener, Moscher, Massageten, Phrygier, Tracrier, Ionier
- ・「セム族（Semiten）が東部に」（150）；Syrier, Assyrier, Babylonier, Araber zc.
- ・「ハム族（Hamiten）は南西に向かい、エジプトとアフリカへ」（150）。

4. 次の各時代に区分している。

1. ファラオ支配下のエジプト、キリスト前 424 まで。
2. ペルシア人支配下のエジプト、200 年間。
3. マケドニア人のプトレマイオス朝支配下のエジプト、300 年間。
4. ローマ人支配下のエジプト、キリスト生誕以後の 400 年間。
5. ビザンチン人支配下のエジプト、250 年間。
6. アラブ人支配下のエジプト、650 年から 972 年まで。
7. ファティマ人、クルド人、マムルーク支配下のエジプト、500 年間。
8. オスマン・トルコ人支配下のエジプト、1517 年以降。

5. 「一つの階層的図式によって世界史の一体性を記述しようとするその試みにおいては、シュレーツァーは、リンネの階層的体系の影響を受けているのである」（Becher(1980), S.18）。

6. 「オウィディウスの転身物語やペーメのアウローラ、カロフの創世記注釈などはこの問題に答えることはできない。この問題はライブニッツ、ビュフォン、ヴァーデブルク、ヴァレリウス、ジルバーシュラークや、これら同類の人々によって解明しなければならない」（16）とも述べている。そしてこの文章に註を付け、ビュフォンと、イェナ大学数学教授だったヴィーデブルクの二書を挙げている。ビュフォンのものは『博物誌補遺五』（1778）としており、『自然の諸時期』を指している。

7. Force, *op. cit.*, p.32. シュレーツァーはウィストンの彗星説や「6 日間」擁護説は棄てている。しかし、創世記の最初の一句を「6 日間」と切り離し、以後は全て地球の創造の記述とする解釈やそれ以後の説明については、ビュフォン以前に、すでに『地球の新理論』でウィストンが同様な見解を記述していた。

8. Roger, Jacques: *The Living World*, in: *The Ferment of Knowledge*, ed. by Rousseau, G.S. and Porter, R. 1980. p.

278f.

9. ウィストンの『地球の新理論』は、地球は彗星から生まれ、神慮による他の彗星の接近、衝突などが大洪水や千年王国、大火災をもたらし、最後には彗星に戻るとする、普遍的地球史を語るものであった。また、『自然宗教及び啓示宗教の天文学的原理』(1717)では、極半径と赤道半径の長さに関する理論的数値と実測値が異なることから地下における「空洞」を推定し、それが、『後漢書』の「壺中天」にも似た一つの「宇宙」(=冥府)を形成し、「不可視の存在を受け入れる場所」(95)になっていると述べる。他方で、不可視の「エーテル的身体または媒介物を有している魂、または精神的存在」(=天使、148)が、「大気の上層部にある、…エーテル的な領域」(150)に住むと主張している (Whiston, W. : *Astronomical Principles of Religion, Natural and Revealed*, Hildesheim・Zülich・New York 1983)。なお、上記の第2章註 26~28 も参照されたい。
10. Force, *op. cit.* p. 8.
11. Haber, Francis C.: *The Age of the World, Moses to Darwin*, Baltimore 1966.
12. ブランケは、シュレーツァーが『世界史の観念』初版でノアの大洪水に天地創造後 1656 年という年号を与えたことに関して、「シュレーツァーはここでも(また他の場所でも)旧約聖書から導き出される年号を主張している」と述べている (Blanke(1990), S.52, 註29)。『普遍史の観念』に関する註としてはこの指摘は正しい。だが、ブランケが『世界史』におけるこのようなシュレーツァーの本質的な変化を指摘しないのは、筆者には、片手落ちと思われる。
13. 以下の二著が参考文献として挙げられている。
 - ・ビュフォン『博物誌』の第六巻 (1756)、
 - ・ブルーメンバッハ『人間の自然的変異について』(1781)。
14. 上記 74 頁の引用文を参照されたい。シュレーツァーは『世界史』においてもこの文章を繰り返している (S.35)。
15. Wesendonck, *a.a.O.* S. 82.
16. 例えば、長いが、次の文章。「大地を人為的に変えた最初の民族はエジプト人とバビロニア人である。ある地域の産物を他の地域に運んだ最初の民族は、ペルシア戦争以後のギリシア人、および、アフリカと小アジアへの最初の遠征を行った以後のローマ人である。カルタゴ人はスペインにフェニキアの技芸を植え付け、イタリアからは文化が支配下の南ヨーロッパに拡大した。それから、長い休憩を挟んで、ユスティニアヌス時代にペルシアから桑とカイコが渡ってきた。アラ

ブ人を通じて米と砂糖が、多分東インドから渡来した。十字軍がヨーロッパに若干の果物や果樹をもたらした。— しかしコロンブス以後の新大陸と旧大陸観の動物と植物の交易! アメリカからトウモロコシ、ジャガイモ、タバコが、アメリカへは米、砂糖、インディゴ、コーヒー、家畜が渡ったのである。近年発見された第五の大陸は、ヨーロッパからは動物を受け入れたが、ヨーロッパに優れた動物を与えてはいない」(48)。

17. Blanke(1990), 註 42 (S.20).
18. Schlegel, Friedrich: “*Vorlesungen über Universalgeschichte 1805-1806*”, in; Behler, Ernst (hrsg), *Friedrich Schlegel, Kritische Ausgabe seiner Werke*, München・Paderborn・Wien, 7.Bd. 1966, S.10.

おわりに

1. ガッテラーはペリクレス時代を「賤民統治」の時代と否定的表現をしていたし、シュレーツァーが国家形成について述べているところで、「大部分の人間は愚か」だと述べていることは、すでに見た。しかし他方シュレーツァーは、全人類がアダムとエヴァの子孫であることについて、「全ての人間の本質的平等という自然法の偉大な教義は、それによって新たな支柱を得ることになる」(*Weltgeschichte*(1785),S.35)と述べている。この「本質的平等」の実現を、二人は、ドイツの現状のなかでは、啓蒙専制君主に期待するしかなかったのである。君主たちを臆せず批判することで当時の啓蒙主義者たちの最左翼に位置していたシュレーツァーにしてかくのごとくであり、「上からの改革」に期待するのは、当時のドイツの啓蒙主義者たちに一般的な考え方でもあった。
2. Butterfield, *op.cit.* p.42.
3. 「先史時代」の概念を考古学研究が対象とする時代に対して初めて使用したのは、ダーウィンの秘蔵っ子、ラボック (1834-1913) の『先史時代』(1865)であった (Lubbock, John: *Pre-historic Times. As Illustrated by Ancient Remains, and the Manners and Customs of Modern Savages*, 1865)。ラボックについては、拙稿「進化論と歴史記述におけるアダムの死」(『埼玉大学紀要 教養学部 第44巻第1号』2008)を参照されたい。